石川県小松市

軽海西芳寺遺跡Ⅱ

ふるさと支援道路整備工事に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

石川県立埋蔵文化財センター

石川県小松市

軽海西芳寺遺跡Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1．本書は、石川県小松市軽海町地内に所在する軽海西芳寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、ふるさと支援道路整備工事（一般国道360号）に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部道路建設課、小松土木事務所の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．現地調査は平成8年12月3～17日にかけて実施した。

4．発掘調査は中屋克彦（当センター主事、現文化財課主事）、岩瀬由美（当センター主事）が担当し、端猛（当センター主事、現㈳石川県埋蔵文化財保存協会調査員）、林大智（当センター主事）、大藤雅男（当センター調査補助員）、田中義則（長期研修生、輪島市教育委員会）の協力を受けた。

5．出土遺物の整理作業は、平成9年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。

6．本書の編集は岩瀬が行い、執筆分担は目次に記した。

7．本書挿図で用いた方位は、第1～3章では磁北、第4～6章では座標北で、水平基準は海抜高である。

8．本調査の出土遺物、記録資料は当センターが一括して保管している。

目　次

第１章　序　説 ……（岩瀬由美）1
第１節　調査に至る経緯と経過 ……1
第２節　過去の調査 ……1
第３節　周辺の遺跡 ……3

第２章　調査の概要 ……（岩瀬）5
第１節　区割りと層序 ……5
第２節　遺構の概要 ……7

第３章　遺構・遺物 ……（岩瀬）8
第１節　土坑 ……8
第２節　溝 ……9
第３節　掘立柱建物跡 ……11
第４節　包含層 ……14
第５節　まとめ ……14

第４章　昭和58（1983）年度の調査 ……（柿田祐司）16
第１節　概要 ……16
第２節　遺構・遺物 ……17
第３節　馬鞍雨乞石の調査 ……25

第５章　昭和59（1984）年度の調査 ……35
第１節　概要 ……（柿田）35
第２節　北調査区の遺構・遺物 ……35
第３節　南調査区の遺構・遺物 ……40
１．上層の遺構・遺物 ……40
２．下層の遺構・遺物 ……（宮田　明）47

第６章　梯川中流域左岸における古代集落の動向について
－軽海西芳寺・荒木田遺跡の調査から－ ……（柿田）82

写真図版

第1章　序　説

第1節　調査に至る経緯と経過

本調査はふるさと支援道路整備工事（一般国道360号）にかかる緊急発掘調査である。平成8年7月31日付けで石川県小松土木事務所長から石川県立埋蔵文化財センターに対し発掘調査依頼が提出され、当センターが平成8年12月3～17日にかけて現地調査を実施した。当初約360m²の調査依頼であったが、一部未調査のまますでにU字溝が設置されていたため、その箇所を除いた約250m²を対象として調査を行った。

調査は12月3日から重機による表土掘削を開始した。それと同時に作業員を投入し、排水溝の掘削を行った。2日目より早速遺構検出を行い、ピット、溝などを検出したが、調査区南端はU字溝埋設時の工事により破壊を受けていることを確認した。季節柄天候には恵まれなかったが、作業は順調に進み、12月17日に現地調査を終了した。

なお、本発掘調査にかかる事業名は、平成9年12月にふるさと支援道路整備事業から県単道路改良事業に変更されている。

調査日誌抄

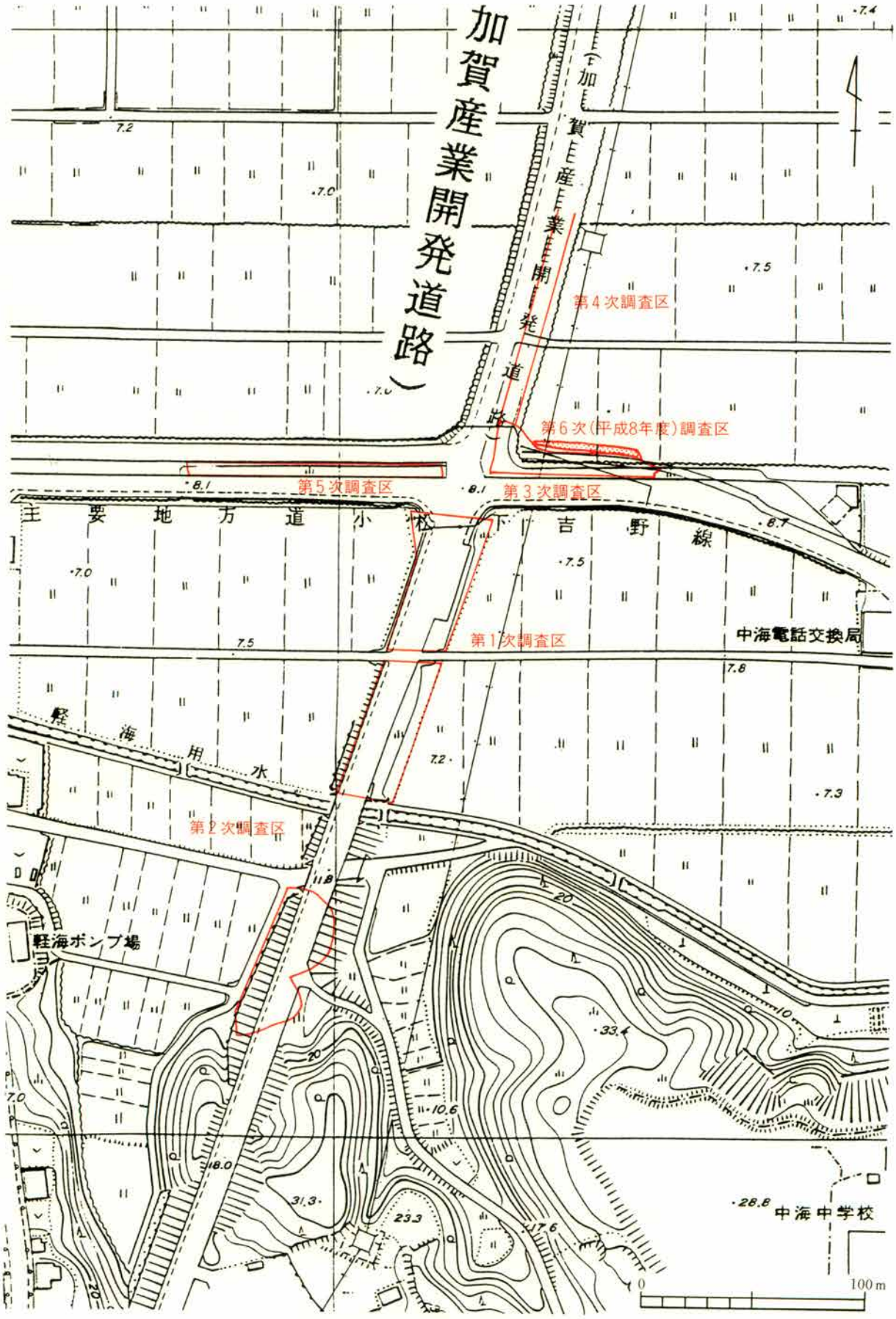
12月3日(火) 晴れ後曇り	重機による表土掘削を行う。作業員を投入して排水溝を掘削する。
12月4日(水) 曇り	5m間隔で任意の杭を打つ。第1～3区の遺構検出を行う。
12月5日(木) 雨	調査区平面図を作成する。
12月6日(金) 曇り後雪	第1、2区の遺構を調査する。
12月9日(月) 曇り	第3、4区の遺構検出を行う。
12月10日(火) 曇り後雨	第4、5区の遺構検出及び調査を行う。
12月11日(水) 曇り時々雨	第6、7区の遺構を調査する。
12月12日(木) 晴れ	壁面の土層断面図を作成する。
12月13日(金) 晴れ	遺構のアゼはずしを行う。
12月16日(月) 晴れ	調査区全景の写真撮影。
12月17日(火) 雨	平面図を作成する。

第2節　過去の調査

軽海西芳寺遺跡の発掘調査はこれまで5次にわたり、平成8年度の調査は第6次調査にあたる。

本遺跡の最初の調査は昭和58年に溯る。主要地方道金沢・小松線改良工事（加賀産業道路）に伴う調査であり、当センターが昭和58年度から同59年度にかけて約6,100m²を対象に調査を行った。その結果、縄文時代の炉跡や土坑群、奈良・平安時代、中世の掘立柱建物跡などを検出し、本遺跡が縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかにされた。第3次調査は平成3年度にふるさと支援道路整備事業にかかり、約600m²を対象に当センターが行い、飛鳥時代の掘立柱建物跡、平安時代の土坑、溝、中・近世の土坑などを検出した。第4、5次調査は平成4年度に県土幹線軸道路整備工事主要地方道金沢小松線（加賀産業道路）にかかり約850m²を、ふるさと支援道路整備事業にかかり約600m²を対象に当センターが調査を行った。第4次調査では、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物跡を多数検出し、第5次調査では古代の溝数条等を検出した。また、明確な遺構は確認されなかったものの、弥生時代後期末の遺物も出土している。

以上これまでの調査成果から、本遺跡は縄文時代には南側の丘陵部分に集落を形成し、弥生時代、或いは

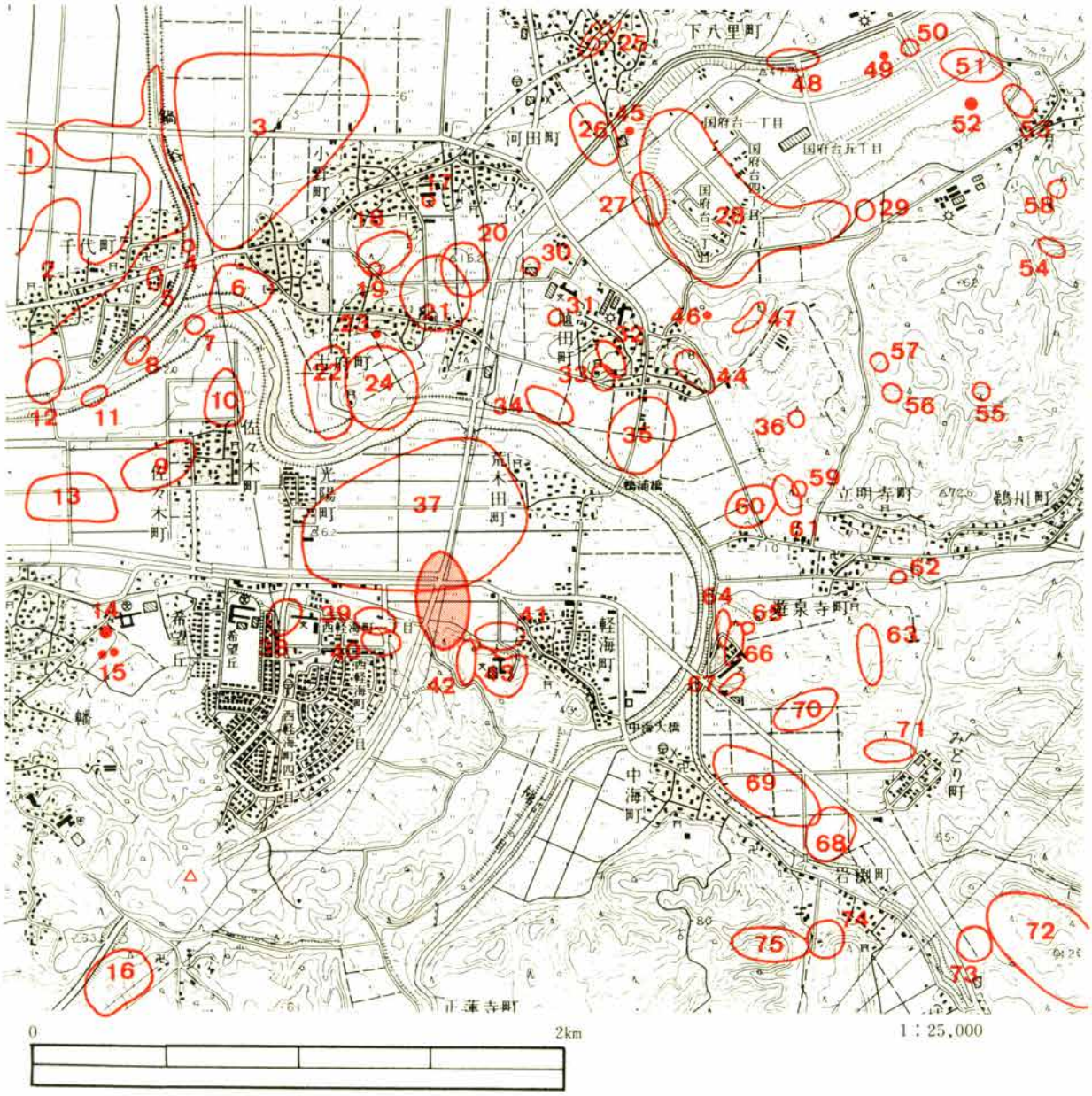


第1図　調査区の位置（S＝1／2,500）

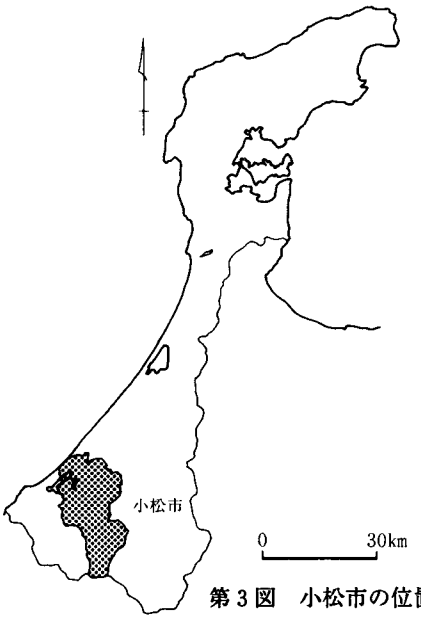
古墳時代に中心が北側の低地へ移り、その後集落を展開したと推定される。中でも、飛鳥時代から平安時代にかけては掘立柱建物跡が多く検出されており、断続的に集落が営まれたことが明らかにされた。

第３節　周辺の遺跡

軽海西芳寺遺跡は、小松市軽海町地内に所在する。本遺跡は、白山山系大日山連峰に源を発する梯川中流域左岸に形成された沖積平野に立地する。この沖積平野は、農耕適地として古くから開発され、また、梯川



第２図　軽海西芳寺遺跡（アミフセ部分）と周辺遺跡の分布（△は馬鞍石）



第３図　小松市の位置（Ｓ＝１／2,000,000）

が物資の流通路として水上交通にも利用されてきたことから、多くの遺跡が密集する地域となっている。現在ではそれらの発掘調査も進み、当時の様子が次第に明らかにされつつある。それらの詳細な内容については、すでに刊行された『軽海西芳寺遺跡』(1994) に譲り、ここでは周辺遺跡の位置図を示すにとどめたい。

番号	名　　称	種 別	立　地	時　　代
1	千代能美遺跡	散布地	平地	奈良～中世
2	千代オオキダ遺跡	散布地	平地	奈良～中世
3	古府しのまち遺跡	集落跡	平地	古墳前期～平安
4	小野町遺跡	散布地	平地	古墳
5	千代城跡	城跡	平地	室町
6	古府遺跡	集落跡	平地	平安中期
7	フドンド遺跡	散布地	平地	平安
8	横地遺跡	散布地	平地	縄文後期
9	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	平地	弥生～中世
10	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	平地	弥生～中世
11	千代本村遺跡	散布地	平地	古墳
12	千代マエダ遺跡	散布地	平地	古墳～平安
13	佐々木遺跡	集落跡	平地	平安
14	八幡大塚古墳	古墳	台地	古墳
15	八幡行者塚古墳	古墳	台地	古墳
	八幡２号墳	古墳	台地	古墳
16	浄水寺跡	寺院跡	丘陵	古墳・平安・中世
17	小野窯跡	窯跡	台地	江戸
18	十九堂山遺跡	寺院跡	台地	平安・中世
19	十九堂山中世墓群	墳墓	台地端	中世
20	小野スギノキ遺跡	散布地	台地	平安・中世
21	小野遺跡	散布地	台地	平安
22	古府シマ遺跡	散布地	台地	平安・中世
23	古府横穴	横穴墓	台地	古墳
24	南野台遺跡	散布地	台地	縄文中期・古墳
25	谷内横穴	横穴墓	山麓	古墳
26	河田Ｃ遺跡	散布地	平地	不詳
27	河田Ｂ遺跡	散布地	台地	奈良
28	河田山古墳群	古墳	丘陵	古墳前期～後期
29	河田窯跡	窯跡	丘陵斜面	不詳
30	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	台地	不詳
31	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	台地	不詳
32	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	台地	縄文・室町
33	埴田フルカワ遺跡	散布地	丘陵	古墳
34	埴田ウラムキ遺跡	散布地	台地	平安・中世
35	埴田遺跡	散布地	平地	奈良・平安
36	埴田塚	塚	丘陵	中世
37	荒木田遺跡	散布地	平地	古墳～中世
38	大谷口遺跡	散布地	平地	弥生後期
39	軽海遺跡	散布地	平地	弥生～近世
40	亀山玉造遺跡	集落跡	低丘陵	古墳前期

番号	名　　称	種 別	立　地	時　　代
41	西芳寺遺跡	寺院跡	平地	平安・中世
42	軽海中世墓群	墳墓	丘陵斜面	鎌倉末期～室町
43	軽海廃寺	寺院跡	山頂	平安後期
44	埴田後山明神１号墳	古墳	台地	古墳
	埴田後山明神２号墳	古墳	低丘陵	古墳
	埴田後山明神３号墳	古墳	丘陵	古墳
	埴田無常堂古墳	古墳	低丘陵	古墳
45	河田横穴	横穴墓	丘陵斜面	不詳
46	御菩提所古墳	古墳	平地	古墳
47	埴田山１号墳	古墳	丘陵	古墳
	埴田山２号墳	古墳	丘陵	古墳
48	下八里横穴群	横穴墓	丘陵	中世
49	穴場横穴	横穴墓	丘陵	古墳
50	上八里Ｃ遺跡	散布地	丘陵	奈良
51	上八里横穴墓群	横穴墓	丘陵	不詳
52	上八里１号窯跡	窯跡	丘陵裾	不詳
53	上八里Ｄ遺跡	散布地	丘陵	不詳
54	里川Ｃ遺跡	窯跡	丘陵斜面	不詳
55	里川Ｄ遺跡	散布地	丘陵頂	縄文中期
56	里川Ｅ遺跡	寺院跡	丘陵斜面	平安
57	里川Ｆ遺跡	寺院跡	丘陵斜面	平安
58	里川Ｇ遺跡	散布地	丘陵尾根	不詳
59	隆明寺跡	寺院跡	丘陵裾	平安初期
60	遊泉寺・クボタＡ遺跡	散布地	平地	平安～中世
61	遊泉寺・クボタＢ遺跡	散布地	丘陵端	平安～中世
62	涌泉寺跡	寺院跡	平地	平安初期
63	宮の奥１～３号経塚	経塚	山頂	平安～鎌倉
64	遊泉寺遺跡	散布地	丘陵	縄文
65	仏生寺塚	経塚	丘陵	中世
66	仏生寺跡	寺院跡	丘陵頂	中世
67	プッショウジヤマ古墳群	古墳	丘陵	古墳
68	中海遺跡	集落跡	平地	縄文中期
69	中海Ｂ遺跡	集落跡	平地	古墳～中世
70	中海Ｃ遺跡	散布地	平地	平安～中世
71	長寛寺中世墓跡	墳墓	丘陵裾	室町
72	岩渕城跡	城跡	丘陵	中世
73	善興寺跡	寺院跡	平地	平安
74	赤穂谷口遺跡	散布地	平地	縄文
75	松の木谷横穴群	横穴墓	山腹	古墳

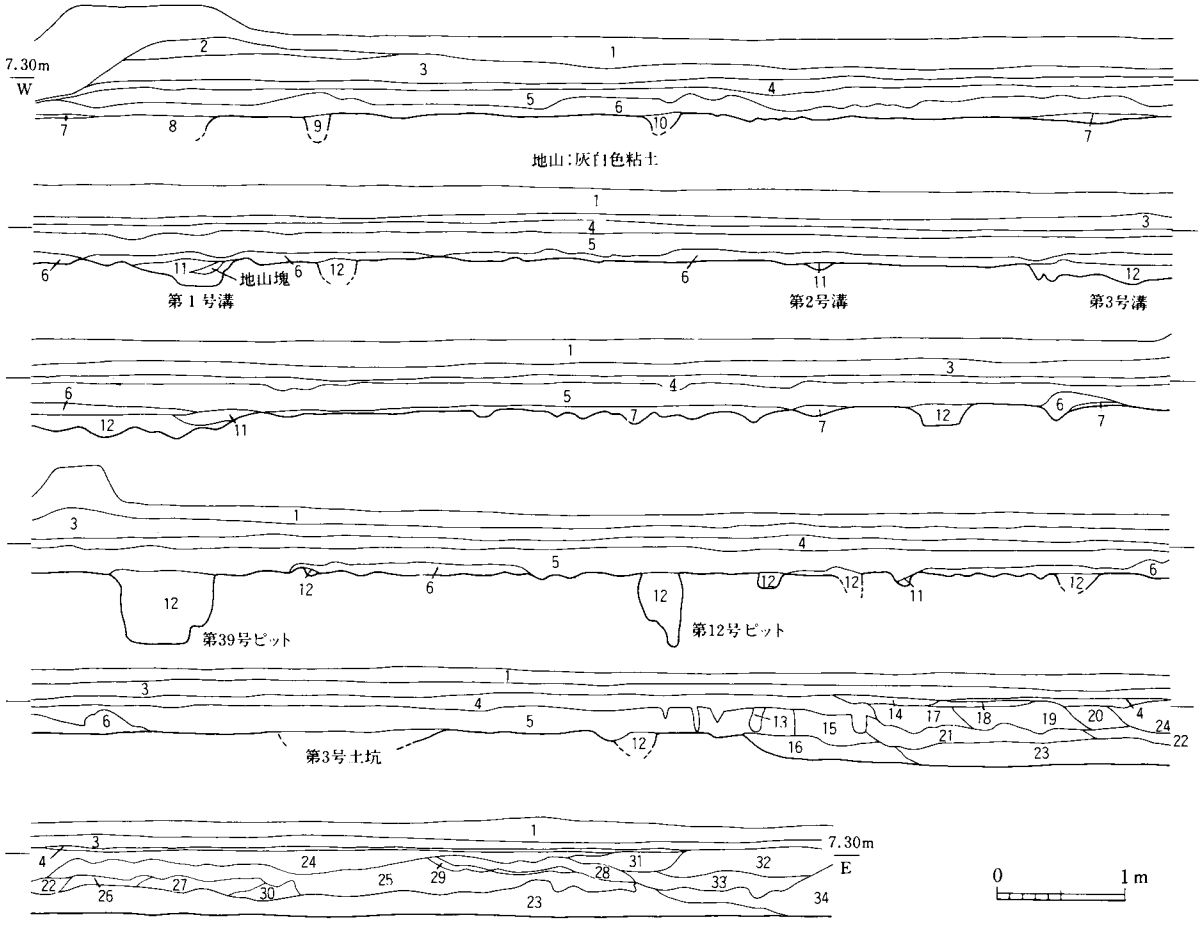
第１表　遺跡地名表

第２章　調査の概要

第１節　区割りと層序（第４図）

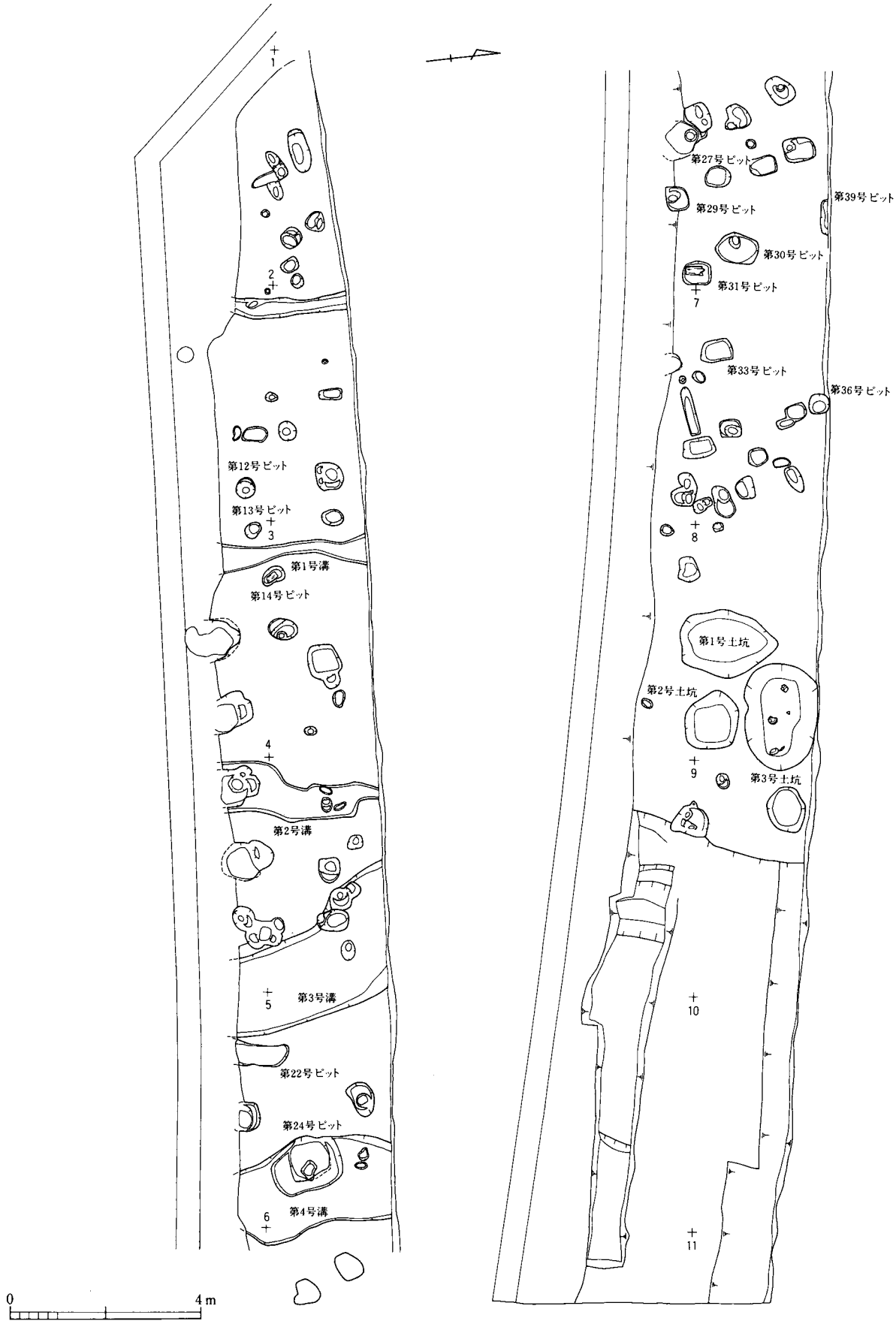
調査区の長軸方向に沿って、５ｍ間隔の任意の杭を一列設置し、西から第１～11杭とした。区割りは、西側の杭をグリッド名とし、第１区等と呼称する。

基本層序は、調査区北壁で観察した。第１層は現耕作土で、第２、３層はカドミウムに汚染された土壌の改良のために入れ替えられた客土である。第４層は旧耕作土とみられる。第５、６層は古代から中世の遺物を含む包含層で、第７層は古代の包含層である。また、第４～８層には鉄分の沈着が見られた。第９～12層は古代から中世の遺構覆土である。第16、23層は落ち込みに自然堆積したとみられる層であり、その深さは浅いものの古代の河川跡と認識した。第17、19、20、22、24～26、28、29、31～33層は近世以降の遺物を含んでおり、撹乱或いは河川跡とみられる。そのうち、第24層の下層には砂利が沈着し、第25層は紫灰色粘土塊、砂利を含んでいた。地山は粘性の強い灰白色粘土であり、遺構は全て地山面から掘削されていた。



1．淡灰褐色粘土
2．褐灰色砂
3．黄褐色砂
4．青灰色砂質土
5．灰色粘質土
6．灰色粘土
7．黒色粘質土
8．灰色粘質土
9．灰色粘土
10．褐灰色粘土
11．暗褐灰色粘土
12．黒色粘土
13．灰白色粘土
14．灰色粘質土
15．灰色粘質土
16．灰褐色粘質土
17．褐灰色粘質土
18．灰褐色粘質土
19．紫灰色粘質土
20．灰色シルト
21．灰色シルト
22．紫灰色粘土
23．青灰色粘土
24．紫灰色粘土
25．灰色粘土
26．紫灰色シルト
27．灰色シルト
28．灰色粘土
29．褐色粘質土
30．灰色粘土
31．暗灰色粘土
32．暗灰色粘質土
33．灰色粘土
34．暗灰色粘土

第４図　基本土層図（Ｓ＝１／60）



第5図　遺構全体図（S＝1／120）

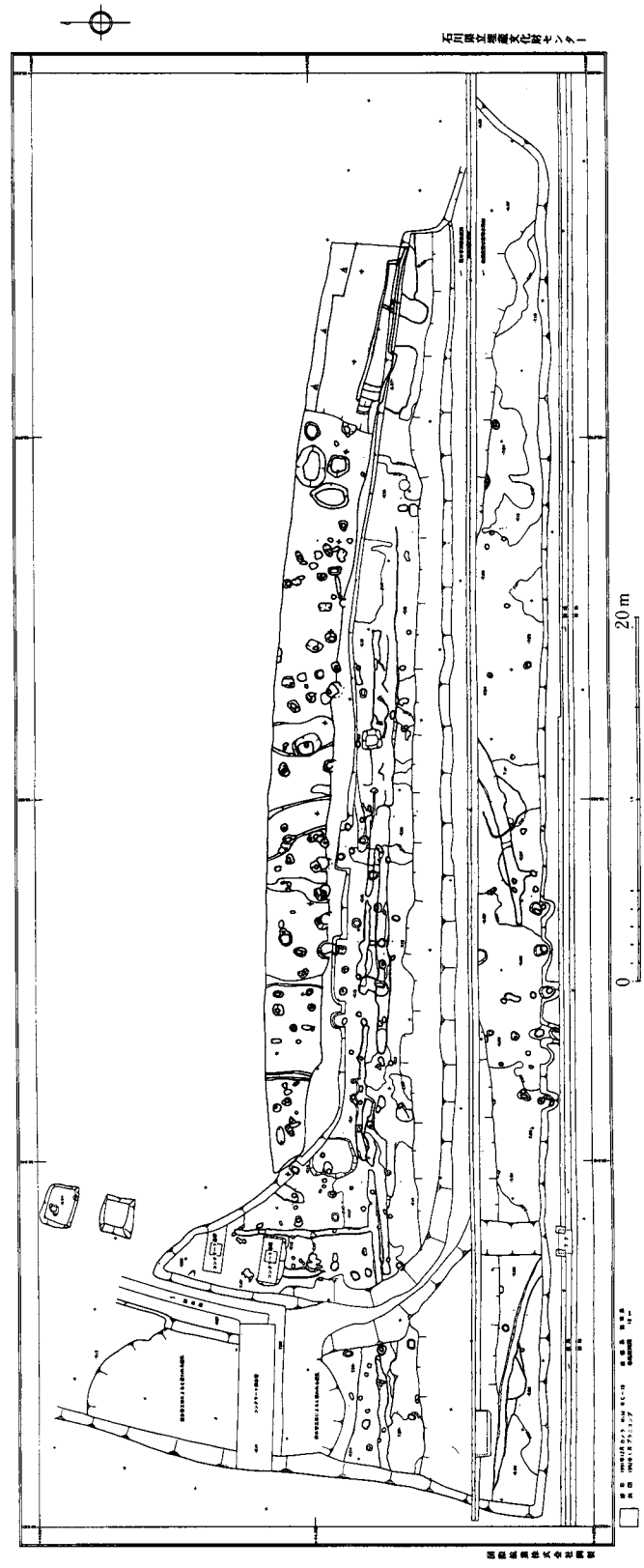
第２節　遺構の概要（第５、６図）

遺構は、東西方向の溝状遺構を５条、土坑を３基、ピットを70基弱検出した。

土坑は、遺跡の東端とみられる河川跡のわきに近接して存在し、掘立柱建物跡はそれらよりも西方に展開している。掘立柱建物跡は４棟復元したが、いずれも調査区外に続いており、全形を知ることはできなかった。

遺構の殆どは、７世紀後半～８世紀代に所属するとみられる。

第３次の調査区との合成を第１、９杭を基準に行った。その結果、溝状遺構等は全くつながらなかったが、一部の掘立柱建物跡は本年度調査のものと同一である可能性が指摘される。



第６図　合成図（Ｓ＝１／400）

第３章　遺構・遺物

第１節　土　　坑（第７、９図）

第１号土坑

第８区で第２、３号土坑とともに検出した。長径203cm、短径144cmを測る。楕円形に近い土坑で、深さは約20cmと浅い。覆土は暗灰色粘土を主体とし、鉄分、炭粒を比較的多く含んでいた。

遺物は須恵器と土師器が出土した。１は口径14.8cmを測る須恵器の杯蓋で、内外とも灰色を呈し、天井部外面にはケズリを施す。２も杯蓋で口径は16.0cm、内外とも灰色を呈す。焼成は良く、胎土には粗砂、黒色粒が少量見られる。３は土師器の非ロクロの小甕で、胴部には約２cm幅の輪積み痕が確認される。内面には細密な原体で横位のハケ調整を施している。色調は灰白色、胎土に粗砂を多く含む。４も非ロクロの甕で、胎土に粗砂を多く含む。調整は摩耗のため不明だが、かすかに内面のハケ調整が確認される。これ以外にも土師器煮炊具が多く出土した。

年代は３、４が７世紀後葉以降、１、２が８世紀第２四半期の製品とみられる。

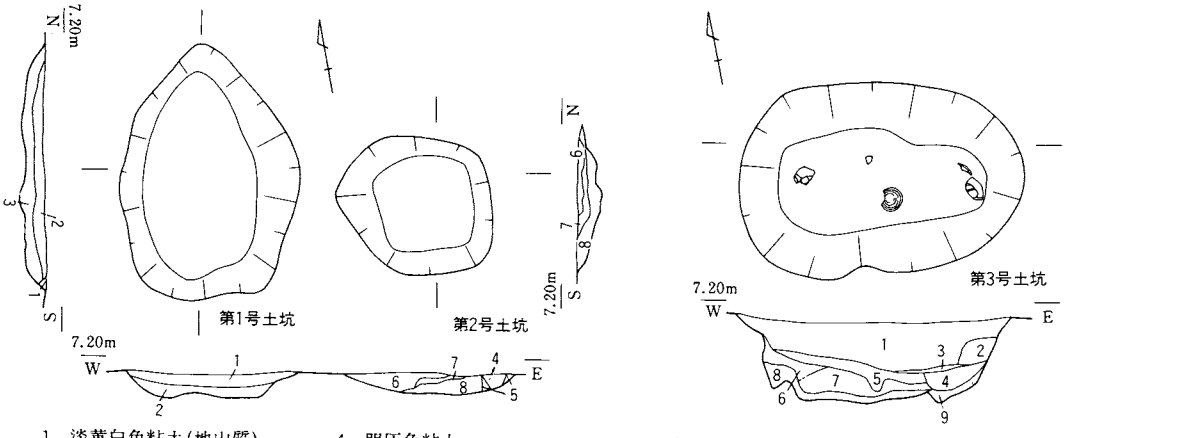
第２号土坑

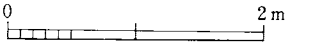
五角形に近い平面形を持ち、最大幅で123cmを測る。深さは約15cm。覆土は第１号土坑とほぼ共通しているが、一部に薄く炭化物層が堆積していた。第１号土坑と同時期の遺構と判断される。

５は口径15.9cmを測るロクロ製の土師器甕で、口縁端部を内側に屈曲させる。胴部内面にはカキ目調整が施され、色調は外面がにぶい橙色、内面は灰褐色を呈す。胎土には粗砂を多く含み、3mm大の礫も少量含まれる。８世紀前半の製品か。これ以外に、須恵器杯蓋の転用硯が１点と土師器の煮炊具が多く出土している。

第３号土坑

長径245cm、短径約150cmの楕円形の土坑である。深さは約65cmと第１、２号土坑よりも深い。覆土はシルト及び粘土を中心とし、第５層下方には木片が多く確認された。また、第５層からは遺物がまとまって出土している。





第７図　第１～３号土坑実測図（S＝１／60）

遺物は須恵器と土師器を中心に出土し、その量は全遺構中最も多い。6は須恵器の杯蓋で、口径11.4cmを測る。口縁部付近を除いた外面全体に丁寧なロクロケズリを施している。細砂が並に含まれるものの、胎土は比較的精良で、色調はうすい灰色を呈す。7、8も須恵器の杯蓋で、それぞれ口径17.6、17.5cm、器高2.2、2.8cmと近似する。7は天井部外面にロクロケズリを施し、胎土には黒色粒が多く含まれる。色調は内外とも灰色であるが、外面は降灰のため光沢を帯びる。8は胎土に多量の白色砂粒、黒色粒を含み、器面は非常にざらついている。色調は灰色～暗灰色で、重ね焼きの痕跡が顕著である。10は須恵器で、杯型の焼き台とみられる。口径は13.1cmを測り、胴部に8mm前後の穿孔が4箇所に復元される。胴部外面下方にはロクロケズリが確認され、胎土には黒色粒が多く見られる。本来は窯道具であるが、何らかの容器として使用されたのだろうか。第18号ピット出土破片と接合した。

9は口径17.9cm、器高4.8cmの土師器の椀で、外底にはケズリ調整が確認される。内外面に赤彩が施され、赤褐色を呈する。11は土師器の堝で、口径約35cmを測る。内面はヘラケズリ、外面はハケ調整が観察され、外面胴部にはススが付着する。胎土には2mm大の礫が少量見られるが、砂粒の含みは少ない。色調は浅黄橙色。12は非ロクロの土師器甕である。内面は2.2cm幅のハケ目調整が、外面上半はカキ目、下半はヘラケズリが施されている。胎土には砂粒、及び礫が多く含まれ、色調は内面が淡橙色、外面は灰褐色を呈す。内底と、外面全体にススが付着している。

土器以外には、被熱した凝灰岩の切石が1点出土している。図化していないが、面を平滑に整えたもので、カマドなどの火処の保護等に使用したとも推定される遺物である。

以上の遺物の年代は、6が7世紀末葉、10が8世紀末葉から9世紀初頭である以外は、概ね8世紀第2四半期の所産とみられる。

完形に近い8や9の出土状態から、本土坑の年代は8世紀中葉頃と考えたい。

第2節　溝（第9図）

第1号溝

第3区で検出した。幅25～60cmを測り、深さは約7cmと浅い東西方向に走る溝である。覆土は暗褐灰色粘土の単層である。

17は口径17.2cm、高台径13.7cm、器高4.9cmを測る須恵器の有台杯である。底部の切り離しは非常に滑らかで、鋭利な工具の使用が想定される。砂粒の含みは少ないが、3～5mm大の礫が数点見られる。色調は内外とも灰色である。時期は8世紀第2四半期か。

第2号溝

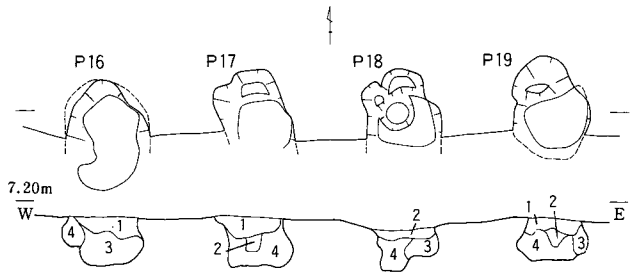
第4区で検出した。幅30～105cm、深さは約6cmを測り、東西方向に走る。覆土は暗褐灰色粘土の単層である。

遺物は18が地山直上から出土した。同安窯の青磁碗底部で、素地は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。12世紀末～13世紀の所産である。

第3号溝

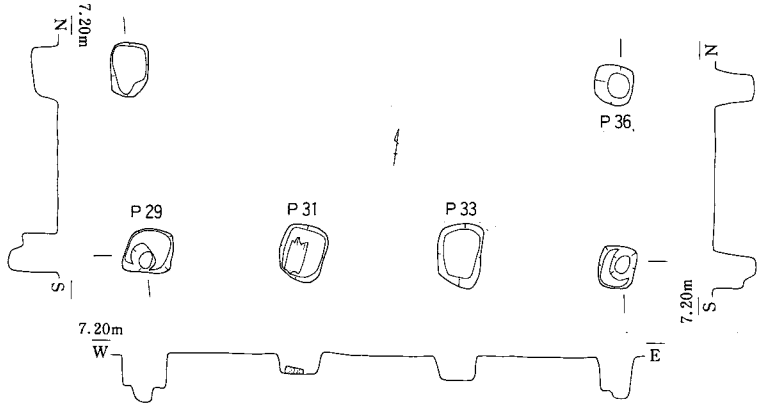
第4、5区境で検出した。幅約170～200cmと幅広で、深さは約20cmを測り、東西方向に走る。覆土は黒色粘土である。

14は須恵器の杯で、口径約12cmを測る。砂粒の含みは少なく、硬質に焼け、外面には自然釉が掛かってい

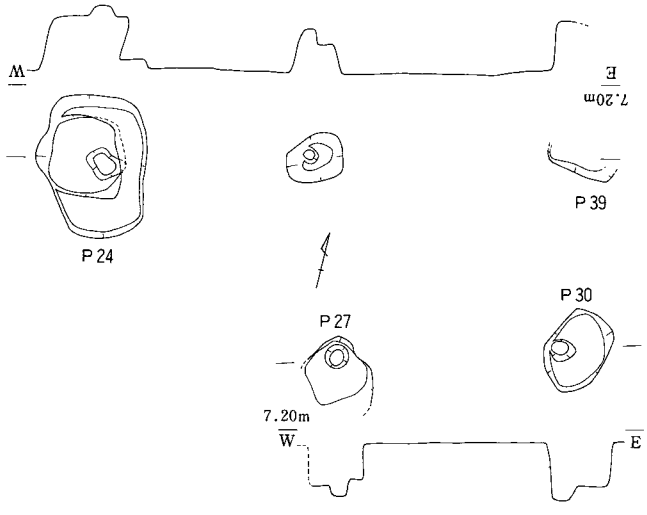


1．暗褐灰色粘土(鉄分、炭粒含)
2．灰色粘土(鉄分含)
3．黒色粘土(地山ブロック少)
4．黒色粘土(地山ブロック多)

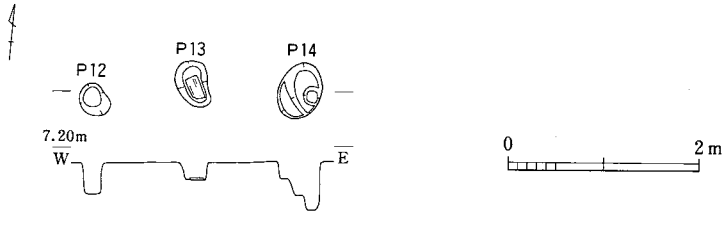
第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡

第8図　掘立柱建物跡実測図（S＝1／80）

る。7世紀末葉の製品か。15も口径13.0cm、器高3.4cmを測る須恵器の無台杯である。器壁は厚く、ややぼってりとしている。底部にはヘラ切りの跡と板状圧痕が観察される。色調は内面灰色、外面明青灰色を呈す。8世紀後半以降の製品とみられる。

第4号溝

第5、6区境で検出した。東西方向に走る溝で、幅140～180cm、深さ6cmを測る。

16は須恵器の無台杯で、胎土には黒色粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。8世紀後半の製品か。

河川跡

調査区東端で落ち込みを確認し、それを河川跡と認識した。これより東方では分布調査の結果遺跡が確認されていないことから、この落ち込みを以て本遺跡の東端と判断される。

上面には近世以降の遺物も見られたが、底部付近から13の須恵器杯蓋が出土した。口径は12.2cmを測る。胎土には黒色粒を多く含み、礫も少量確認される。内外とも灰白色を呈し、外面には自然釉が掛かる。時期は8世紀第2四半期か。

第3節　掘立柱建物跡（第8、9、11図）

第1号掘立柱建物跡

3間の柱列を確認した。柱穴の径は70～100cmと大きく、深さも50cm前後を測る。柱間寸法は150～170cm程度である。軸はほぼ東西方向を向いている。覆土は暗褐灰色～黒色粘土を主体とし、4基ともほぼ共通する。第19号ピットの東側にもピットが存在するが、その形態や覆土が異なることから、同一建物の柱穴とは判断しなかった。第3次調査で検出された第2号掘立柱建物跡と場所的に近接しており、同一建物の可能性もあるが、それは柱穴の径が45cm、深さ25～35cmと規模が小さく、柱間寸法もやや異なること、出土遺物が7世紀後半のものでずれがあることなど、肯定する材料は少ない。

遺物は各ピットから土師器と須恵器の小片が出土している。先に述べたが、10の焼き台が第18号ピットから出土した。出土遺物の年代はおおよそ8世紀後半代である。

第2号掘立柱建物跡

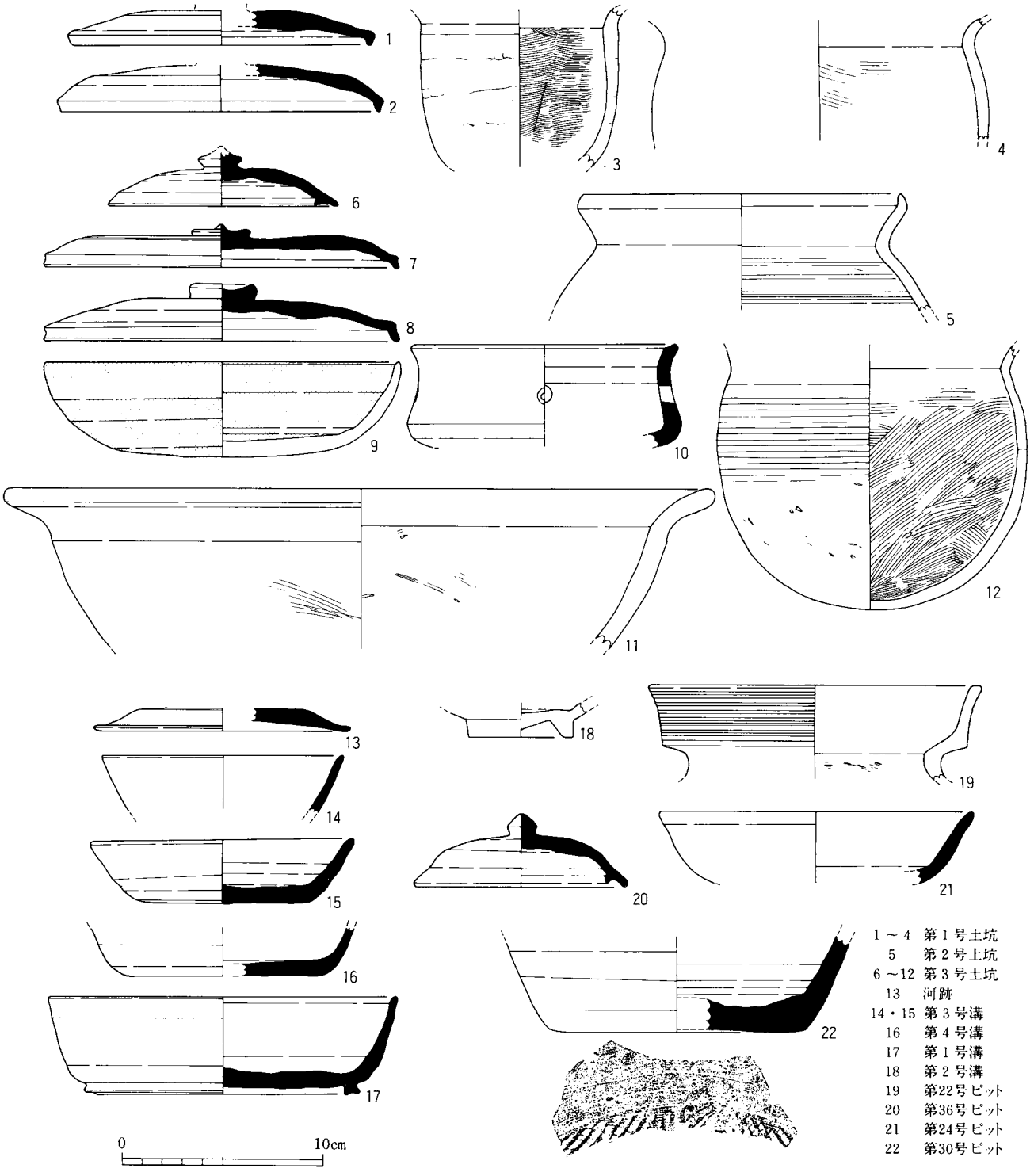
3間×1間までを検出した。建物は北側へ更に続くとみられる。柱穴は径40～70cm、深さは25～45cm、柱間寸法は南北列で約190cm、東西列は西から約160、170、170cmを測る。主軸はおよそN－83°－E。第31号ピットからは36の礎板が出土した。

遺物は礎板の他に第36号ピットから20の須恵器杯蓋が出土している。20は完形品で、口径10.5cm、器高3.7cm、つまみ径1.5cmを測る。胎土には細砂と黒色粒を並に含み、色調は灰色を呈する。外面には自然釉が掛かり、四分の三ほどの範囲に砂が溶着している。7世紀中葉の製品とみられる。この完形品がどの時点でピットに入ったのかは不明であるが、他のピット出土遺物の年代から見て、7世紀後半頃の建物と考えたい。

第3号掘立柱建物跡

2間×1間で検出した。柱穴の大きさは一様ではない。柱間寸法は南北が約220cm、東西が230～270cmを測る。主軸はおよそN－77°－Eである。

遺物は21が第24号ピットから、22が第30号ピットから出土した。21は須恵器の有台杯で、口径は15.7cmを測る。胎土に黒色粒を並に含み、色調は灰白色を呈す。内面に漆の付着がやや厚く見られた。時期は7世紀後葉か。第24号ピットからは礎石ともみられる被熱した偏平な石も出土している。22は須恵器の瓶類とみら

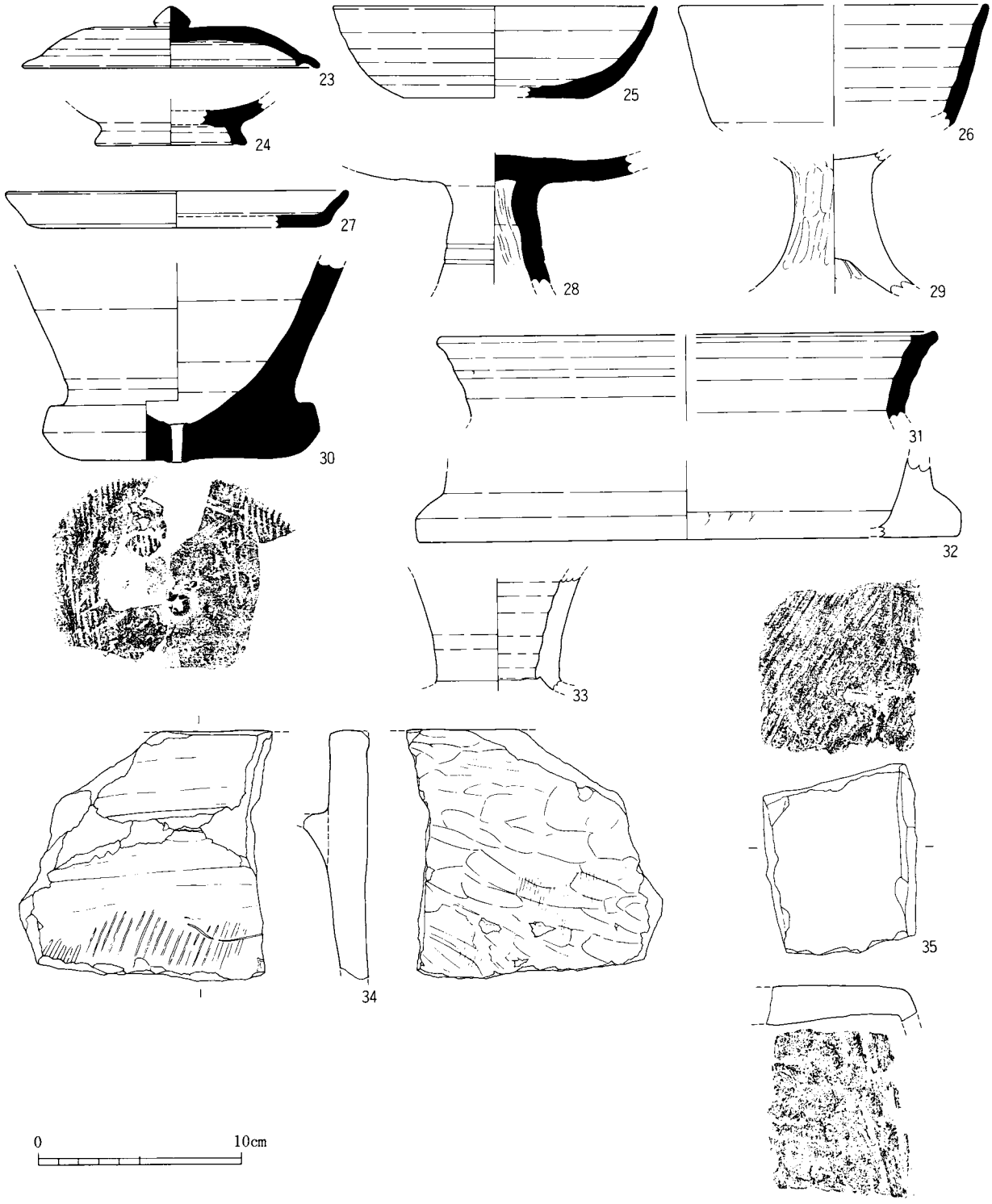


第9図　遺構出土土器実測図（S＝1／3）

れ、底径で12.8cmを測る。外面はたたき調整の後へラケズリを施している。胎土は白色の細砂、黒色粒を並に含み、灰白色を呈する。8世紀代の所産とみられる。

第4号掘立柱建物跡

東西2間の柱列を検出した。柱間寸法は西から110、120cmである。第13号ピットからは37の礎板が出土した。本掘立柱建物跡は、第3次調査区で検出されたピットにつながる可能性が指摘され、そのうちの柱穴1



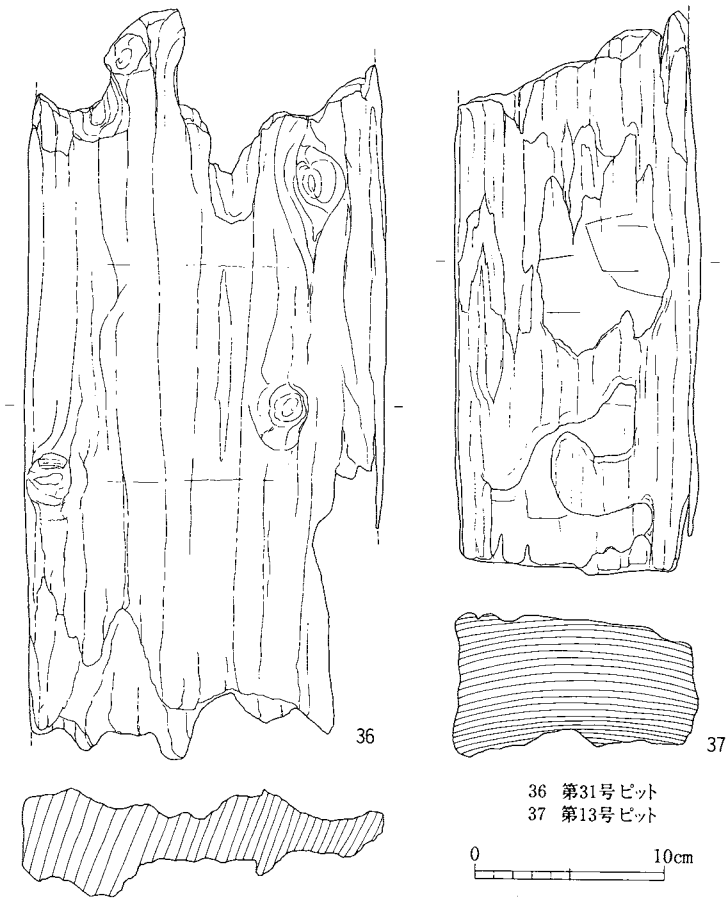
第10図　包含層出土土器実測図（S＝1／3）

基からは礎板の出土が報告されている[1]。同一建物とすると、東西方向が短い2間×2間の総柱の掘立柱建物に復元されよう。

遺物は8世紀頃の所産とみられる土師器と須恵器の小片が出土した。

その他のピット

第22号ピットから19が出土した。口径16.3cmの月影系の甕である。礫を多く含み、色調は灰白色を呈す。



第11図　礎板実測図（S＝1／4）

第4節　包含層（第10図）

23は須恵器の杯蓋であり、口径14.4cm、器高2.8cmを測る。胎土に細砂を少量含み、色調は灰色を呈す。24は須恵器の椀底部で、高台径7.4cmを測る。色調は明青灰色。25も須恵器の椀であるが、造りは非常に丁寧である。口径15.7cm、器高4.5cmを測り、外面下半から底部にかけてシャープなロクロケズリを施す。胎土は細砂が少量含まれる程度で精良であり、焼きも良い。色調は灰白色。26は須恵器の杯で、口径は約15cmと推定される。胎土には粗砂を少量含み、色調は灰白色を呈す。27は須恵器の盤で、口径16.7cm、器高1.8cmを測る。胎土に白色の細砂を多く含み、色調は明青灰色を呈す。28は須恵器の高杯で、脚部に2条の沈線が確認される。色調は灰色。29は土師器の高杯で、杯部は内黒である。30は須恵器の捏ね鉢であるが、底部には焼成前に空けた径約5㎜の穿孔が確認される。外底部に通有な刺突の痕跡は見られない。胎土には黒色粒と礫を並に含み、灰色を呈する。31は須恵器の甕で、口径は約24cmに復元される。内外に降灰が見られ、暗灰色を呈す。32は土師器の甑底部片とみられる。胎土には粗砂を多く含み、色調は内面灰褐色、外面淡黄色を呈す。器表全面に薄くススが付着する。

33は瀬戸・美濃焼の尊式花瓶で、外面にはオリーブ灰色の灰釉が掛かる。素地は灰白色。34、35は須恵器質の陶棺とみられる。34は張り付けの突帯を有し、その上面が平坦で、蓋の受け部とみられることから棺身の口縁部片と判断される。外面は突帯より下方にタタキ調整が、内面はヘラ状の工具で調整した後、ナデている。35はその胎土から、同一個体と判断される破片である。外面はタタキ、内面はヘラ状工具で調整されている。角を持つその形態から、棺身の側面コーナー部ではないかと推定される。これらの胎土には粗砂を並に、礫を少量含む。色調は灰白色。同一個体とみられる破片が第3次調査でも出土している[2]。

以上の遺物の年代は、29が7世紀代、34、35が7世紀前半[3]、23が7世紀後葉、26、28、30、31が8世紀前半頃、25、27、32が8世紀後半頃、24が9世紀後半、33が15世紀前半頃と判断される。

第5節　まとめ

弥生時代の遺物は僅少で、明確な遺構も検出されなかったが、各調査年次を通じて月影式期前後の遺物を確認しており、周辺域に集落の存在が予想される。隣接する荒木田遺跡で弥生時代後期末から古墳時代初頭

を中心とした集落が確認されていることから、該期の主体はそちらに求められるのかもしれない。

古代では、7世紀前半から9世紀代の遺物が出土し、その中心は7世紀後半～8世紀代に求められる。中でも、7世紀後半と8世紀第2四半期に遺物量のピークが認められた。遺構は掘立柱建物跡4棟と、土坑3基を検出した。土坑はその覆土、出土遺物等から8世紀第2四半期以降の同時期に使用されたものと推定した。第3号土坑については、その形態や、出土木片等から調査時には木棺墓かとも推定したが、それを裏付ける資料には欠ける。これら土坑の特徴としては、覆土に炭を多く含むこと、土師器の煮炊具が比較的高い比率を持って出土することなどが挙げられる。このような特徴は、佐々木ノテウラ遺跡の第13～15号土坑でも認められる[4]。それらは10～30cmと浅く、炭を多量に含む覆土を有するという。また、出土遺物は土師器の煮炊具が中心である。報告者はこれらの土坑に「簡単な覆屋を有する、住居に付随する炊事場」としての機能を想定している。本遺跡で検出した土坑は、第3号土坑が深さ約65cmと深いこと、覆屋を形成する柱穴も確定できないことから、炊事場と断定することは避け、その共通性を指摘するにとどめたい。ただ、第3号土坑から出土した、被熱した切り石はその可能性を示唆するものではある。

掘立柱建物跡は、全形を窺えるものは皆無だが、過去の調査成果から2間×2間、或いは2間×3間程度の規模と推定している。これらの時期は、第2号掘立柱建物跡が7世紀後半、第1号掘立柱建物跡が8世紀後半、第3、4号掘立柱建物跡が8世紀代と推定したが、出土遺物は少量であり、確定できるものではない。過去の調査では、隣接する第3次調査区では7世紀後半～10世紀にかけての遺物、遺構が確認され、中でも7世紀後半～8世紀代に出土遺物の中心をみる。2棟の掘立柱建物跡が7世紀後半とされている。第4次調査では7世紀初頭～10世紀前半の遺物が確認されるが、掘立柱建物跡は8世紀中葉～10世紀前半に帰属しており、第3次調査の結果とは時期的なずれが認められる。8世紀前半の遺物は調査区の南側に偏在することが指摘されており、第3次調査区側に該期の集落を比定している[5]。第1、2次調査では遺物は7世紀後半、8世紀第2四半期～10世紀初頭のものを確認し、その中心は8世紀後半～9世紀前半に求められている。また、9棟程度に復元される掘立柱建物跡の多くは8世紀中葉～後葉に帰属すると推定されている。

以上の成果から、古代の軽海西芳寺遺跡は、遺跡の南方域で7世紀代に集落が形成され始め、7世紀後半に一つのピークを迎える。次の8世紀第1四半期にはやや衰退し、第2四半期になって、再び掘立柱建物が多く建造され、8世紀後半まで二つ目のピークを形成する。8世紀中葉以降になると、第4次調査区でも掘立柱建物跡が確認されることから、集落域が北方へ拡大したことが窺えるが、9世紀以降の掘立柱建物跡は第4次調査区でしか検出されていないことから、居住域が縮小し、やや北方へ移動したとも考えられる。

中世は、本調査では鎌倉期と室町期の遺物を各1点確認したのみである。第1、2次調査で比較的まとまった遺物が出土しており、第2次調査区では井戸跡なども確認していることから、その周辺域に居住地が求められようか。

註

(1) 石川県立埋蔵文化財センター　『軽海西芳寺遺跡』　1994。
　第3次調査での第48号ピットから礎板が出土している。
(2) 註(1)に同じ。註文献第15図30がそれである。それ以外にも破片が数点出土している。
(3) 入江文敏　「北陸地方出土の陶棺－列島の古墳時代史への位置づけ－」『阡陵』　関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集　1992。
(4) 石川県立埋蔵文化財センター　『佐々木ノテウラ遺跡』　1986。
(5) 石川県立埋蔵文化財センター　『荒木田遺跡』　1995。

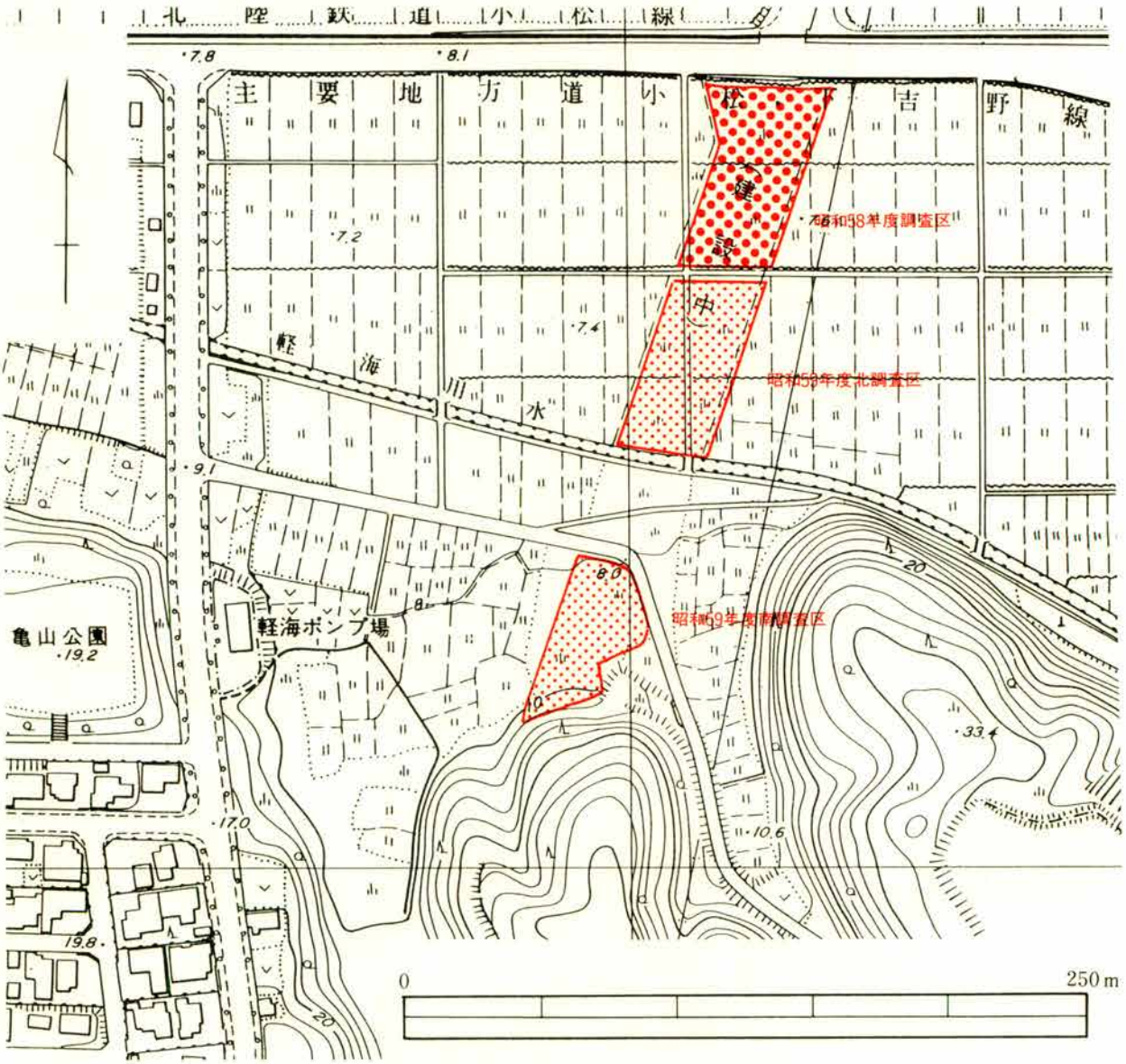
第４章　昭和58(1983)年度の調査

第１節　概　　要

現地調査は昭和58年６月１日から９月３日にかけて行われている。調査面積は1,800㎡で、調査担当者は谷内尾晋司・垣田修児である。調査区は５ｍグリッドを設定し、北東杭をグリッド名としている。

調査の結果、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡等が検出されている。掘立柱建物跡のほとんどが古代に属すると見られ、古代の集落が形成されていたと考えられる。溝には弥生時代・古代・近世の各段階のものがあり、いずれも定量の遺物が出土している。井戸跡は２基検出されているが、良好な状態で遺物が出土していないため、それらの時期を決定することはできない。

遺物には弥生時代から近世のものが粗密はあるものの一定量見られる。また縄文時代の遺物もわずかながら見られる。遺構はよくわからないが、中世の遺物も包含層中から定量出土している。主に時期的には14世



第12図　調査区位置図

紀後半から15世紀前半代のものが多い。調査区周辺に中世の集落が存在する可能性が考えられる。

また、八幡町地内の馬鞍雨乞石の調査が行われている。

第２節　遺構・遺物

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は７棟復元されているが、調査区外に伸びるものも含めれば、さらに２棟ほど復元できる。建物の方位を見てみると、ＳＢ０１・０２・０３・０８を除けば、建物の梁ないしは桁の方向は東偏２～５度の間でまとまっている。これらほぼ同じ方位をとる建物は、重複する部分も見られることから、前後関係があることは明らかだが、それを判断する材料に乏しく不明と言うしかない。前後関係は不明だが、わずかに柱穴内から出土した遺物や、包含層の出土遺物などから、これらの建物はおおよそ８世紀半ば頃から９世紀前半代頃の間に収まるものと考えたい。ＳＢ０１・０２・０８はそれ以前の建物の可能性が高いものと考えられる。

ＳＢ０１（第14図）　調査区の北端部に位置し、２×２間の総柱建物跡で倉庫様の建物と考えられる。座標北を基準として（以下、北は座標北）東に23度振れている。面積は柱間距離から求めると15.6㎡となる。なお柱間距離を測るに際して、柱痕の確認できるものに関してはその心芯間を、確認できない場合には柱穴の心芯間を柱間距離としている。

ＳＢ０２（第14図）　調査区の北端部に位置し、２×２間の総柱建物跡である。ＳＢ０１と同じく倉庫様の建物と考えられる。ＳＢ０１・０２は重複しており前後関係が認められるが、柱穴の切り合い等からは確認できない。ＳＢ０２が方位を東に13度振っているという違いを除けば、その面積も16.7㎡と規模的にもほとんど変わりがない。検出面での柱穴の規模と、掘方の深さがいずれもＳＢ０１の方が大きいという違いは認められる。また、北東に位置するＳＤ０１の流路方向とＳＢ０２の方位はほぼ一致している。ＳＤ０１が掘削された時期に建てられたものの可能性もある。

ＳＢ０３（第15図）　２×３間の総柱建物跡である。南端の柱列は近世溝によって若干切られているが、これ以上規模が大きくなる可能性はないと思われる。ＳＢ０１・０２と同様倉庫様建物になる可能性が考えられる。ＳＢ０３は東西棟で、桁方向は西に４度振っている。復元されている建物の中では唯一軸が西に振れている。その面積は23.8㎡を測る。

ＳＢ０４（第17図）　２×３間の総柱建物跡である。桁行南端の柱列は、20cm余り柱間距離が伸びる。南北棟の建物で、方位は東に2度振れている。面積は25.6㎡を測る。柱間の揃う２×２間部分だけをとれば、その面積は15.6㎡となり、ＳＢ０１・０２と変わらない。南端柱列は、建物柱列ではなく柵列のような付属施設の可能性もある。

ＳＢ０５（第18図）　３×４間ないし、３×５間の建物跡になると推測される。または３×３間の建物と、２ないし３×３間の建物が並立していることも考えられる。北側は近世溝に切られているため、これらのことを明らかにすることはできない。３×４間の建物とした場合は、３×３間の建物に庇状のものが北側に付随しているとも考えられる。その面積は46.4㎡を測り、身舎部分の面積は31.9㎡を測る。３×５間で復元した場合には、その面積は53.9㎡となる。南北棟の建物であり、方位は東に３度振れている。

ＳＢ０６（第16図）　３×３間の建物跡である。東西棟で、桁方向は東に３度振っている。その面積は39.7㎡を測る。南西隅の柱穴は削平されているためか検出されていない。

ＳＢ０７（第19図）　3×4間の側柱式建物に復元されている。南北棟の建物で、主軸方位は東に5度振れている。北端の柱列が庇となる建物、または建物内に仕切のある建物と思われる。その面積は52.4m²を測る。

ＳＢ０８（第13図）　調査区の北東端に位置している。ＳＤ０１に切られているために、その全形を知ることはできない。方位は東に35度と大きく振れている。建物方位で判断する限り、他の建物とは時期が異なるものと思われる。

ＳＢ０９（第13図）　調査区の中央部東側、ＳＢ０６の東に位置している。２×２間以上の総柱式建物になると思われる。方位は東に５度振れている。他の建物とはほぼ方位が一致するので、古代に属するものと考えて良いと思われる。

(2) 井戸跡

ＳＥ０１（第20図）　検出面で直径約２ｍ弱の円形の掘方をもち、深さは約１ｍを測る。出土遺物はほとんどなく時期の推定は難しいが、おそらく中世段階のものであろう。

ＳＥ０２（第20図）　検出面で直径約１ｍ弱の円形の掘方を持ち、深さは約1.1ｍ強を測る。出土遺物が不明で遺物から年代は推定できないが、ＳＥ０１と同じく中世段階のものであろう。

(3) 土坑

ＳＫ０４（第20図）　検出面で長軸0.96ｍ、短軸0.8ｍの楕円形の掘方をもち、深さは0.2ｍを測る。法仏式期の壺が（第22図－10）出土している。

ＳＫ０７（第20図）　検出面で長さ約3.6ｍ、幅約0.5ｍ、深さは最も深いところで約0.3ｍを測る溝状の遺構である。若干混入が見られるものの、月影式期の土器（第22図－１～９）がまとまって出土している。

(4) 溝

ＳＤ０１（第13図）　調査区の北東端に位置し、東から西に約10度前後北に流路を振って流れていたものと考えられる。検出面で幅約２ｍ、深さ約0.3ｍ前後を測る。溝の断面形態はなだらかな「Ｕ字形」を呈している。この溝からは、古代の遺物が出土しており（第24図13～27）、おおむね８世紀半ばから９世紀末葉頃におさまるものと考えられる。

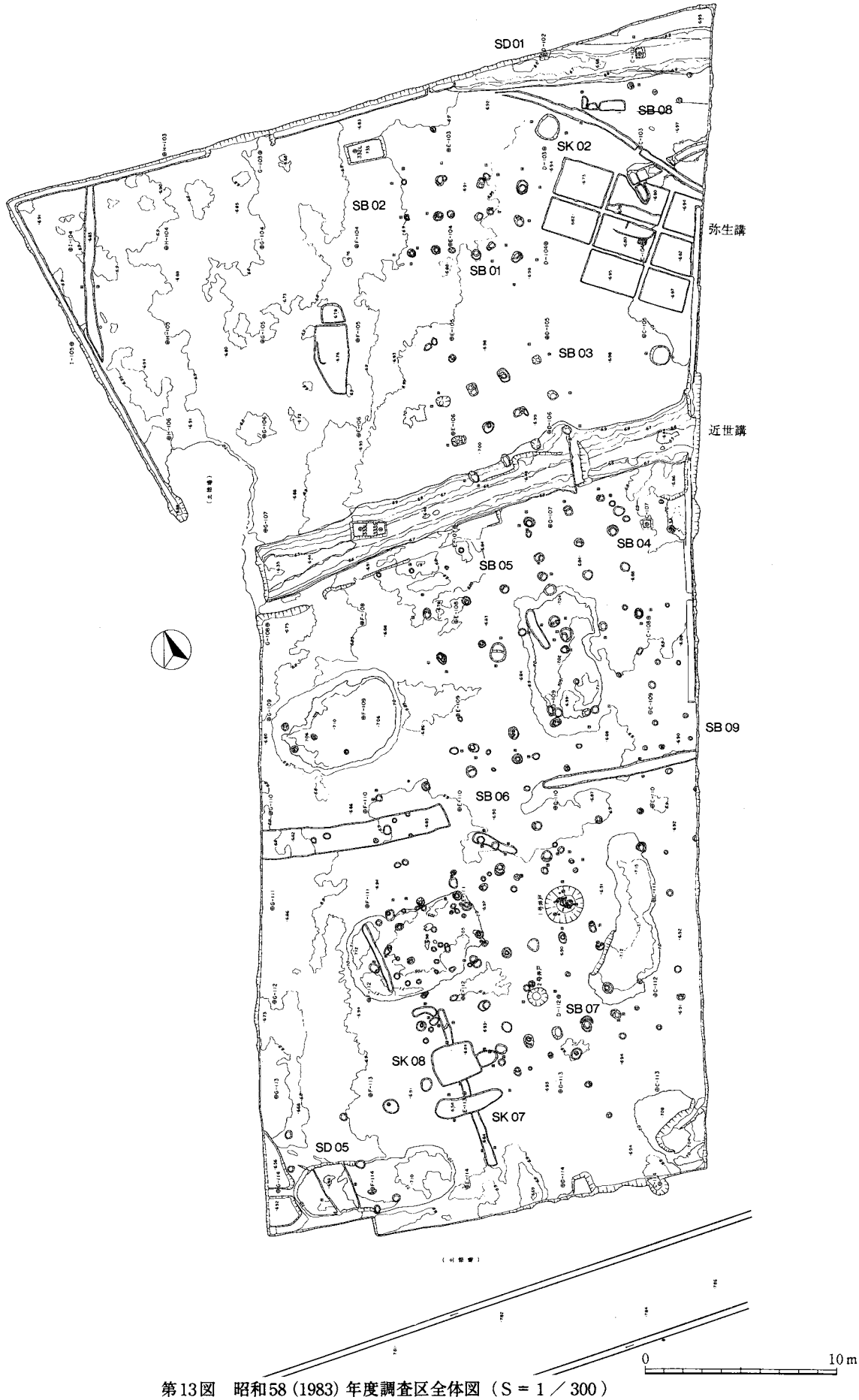
ＳＤ０５（第20図）　調査区の南西端に位置し、ほとんど削平されておりわずかに長さ約2.7ｍ、幅約1.8ｍ、深さ0.1ｍの一部分が残っているにすぎない。８世紀半ばから後半代と見られる遺物（第24図－29～32）が出土している。

弥生溝（第13図）　調査区北東側に位置し、明確な掘方を持っていないか削平を受けているらしく、はっきりと図化されていない。月影式期の土器（第22図－11～24・第23図）がまとまって出土している。ＳＫ０７と同じく混入が見られるが、おそらく整理段階で生じたものだと思われる。

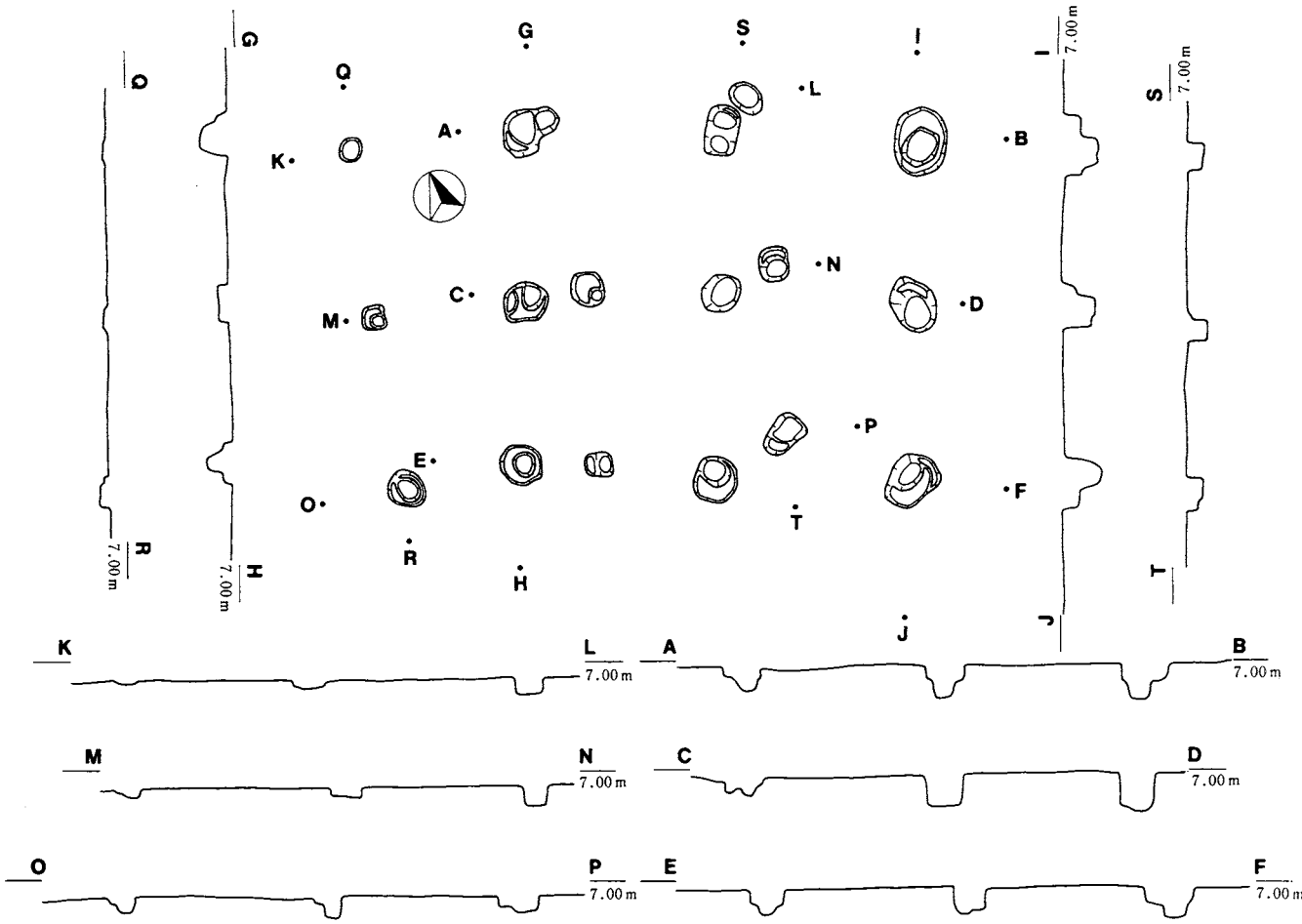
近世溝（第13図）　調査区の中央部に位置し、東西方向に流路とる。検出面で幅は約2.4ｍ、深さは約0.4ｍを測る。

(5) 包含層出土遺物（第25～27図）

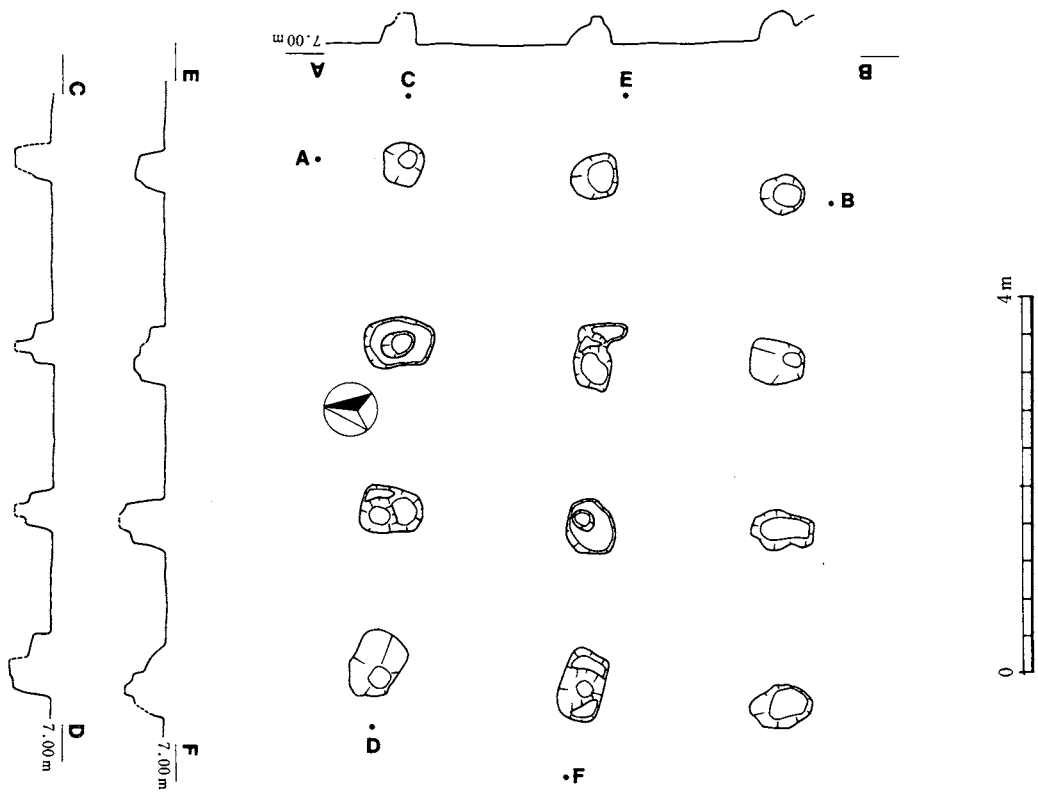
７世紀後半代の須恵器が定量出土していることが目に付く。また８世紀初頭頃の須恵器は見えず、８世紀半ば以降再び須恵器の出土量が多くなっている。そして９世紀末ないし10世紀前半代頃まで続く。それ以降



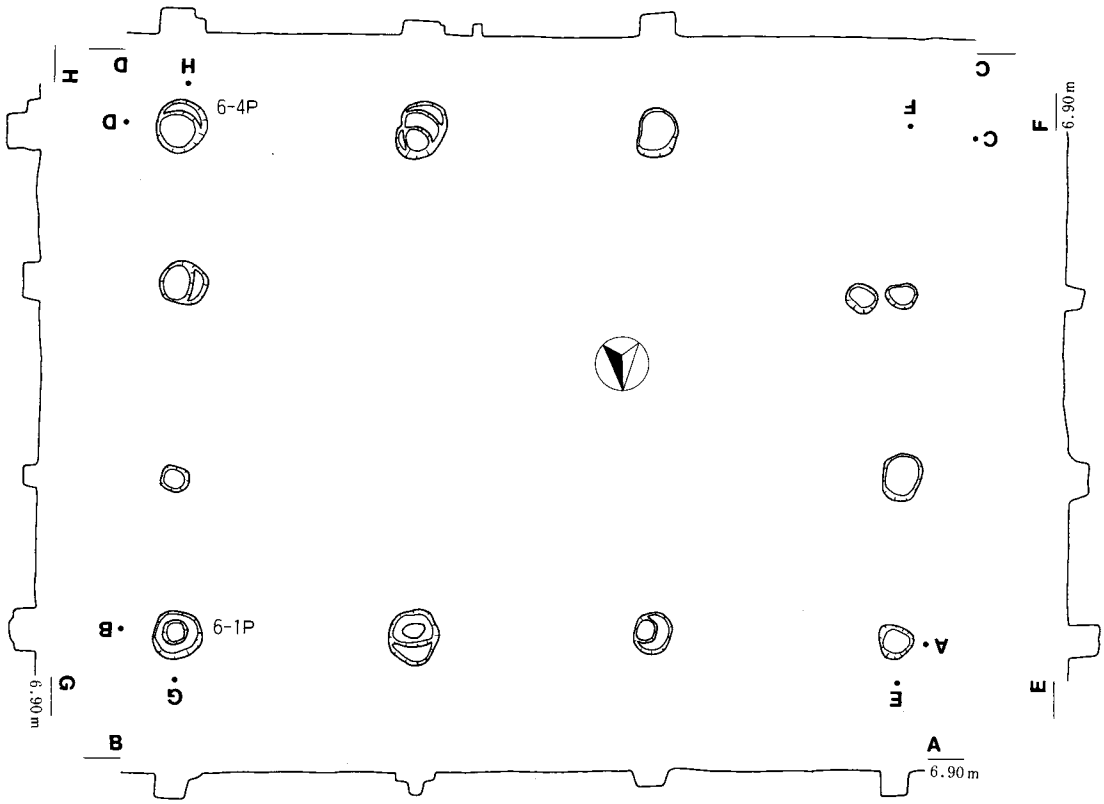
第13図　昭和58 (1983) 年度調査区全体図（S＝1／300）



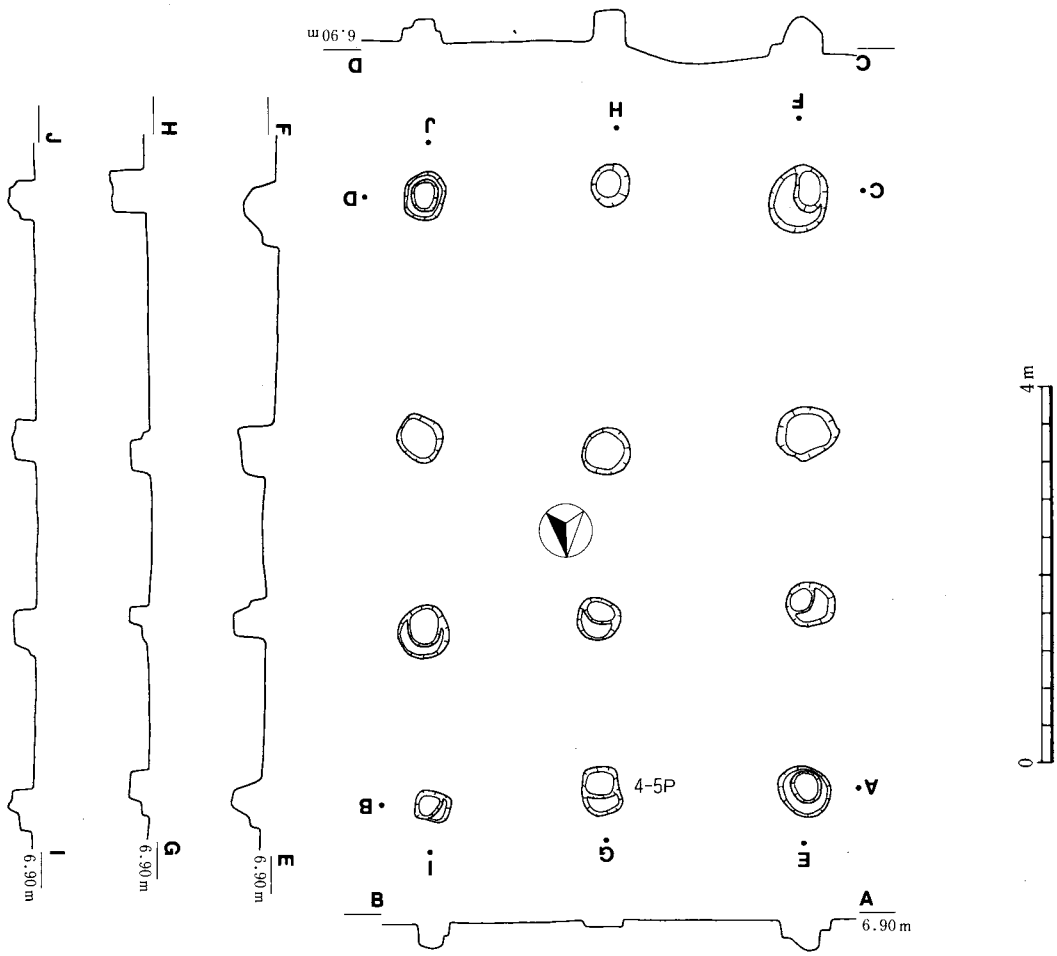
第14図　SB01・02実測図（S＝1／80）



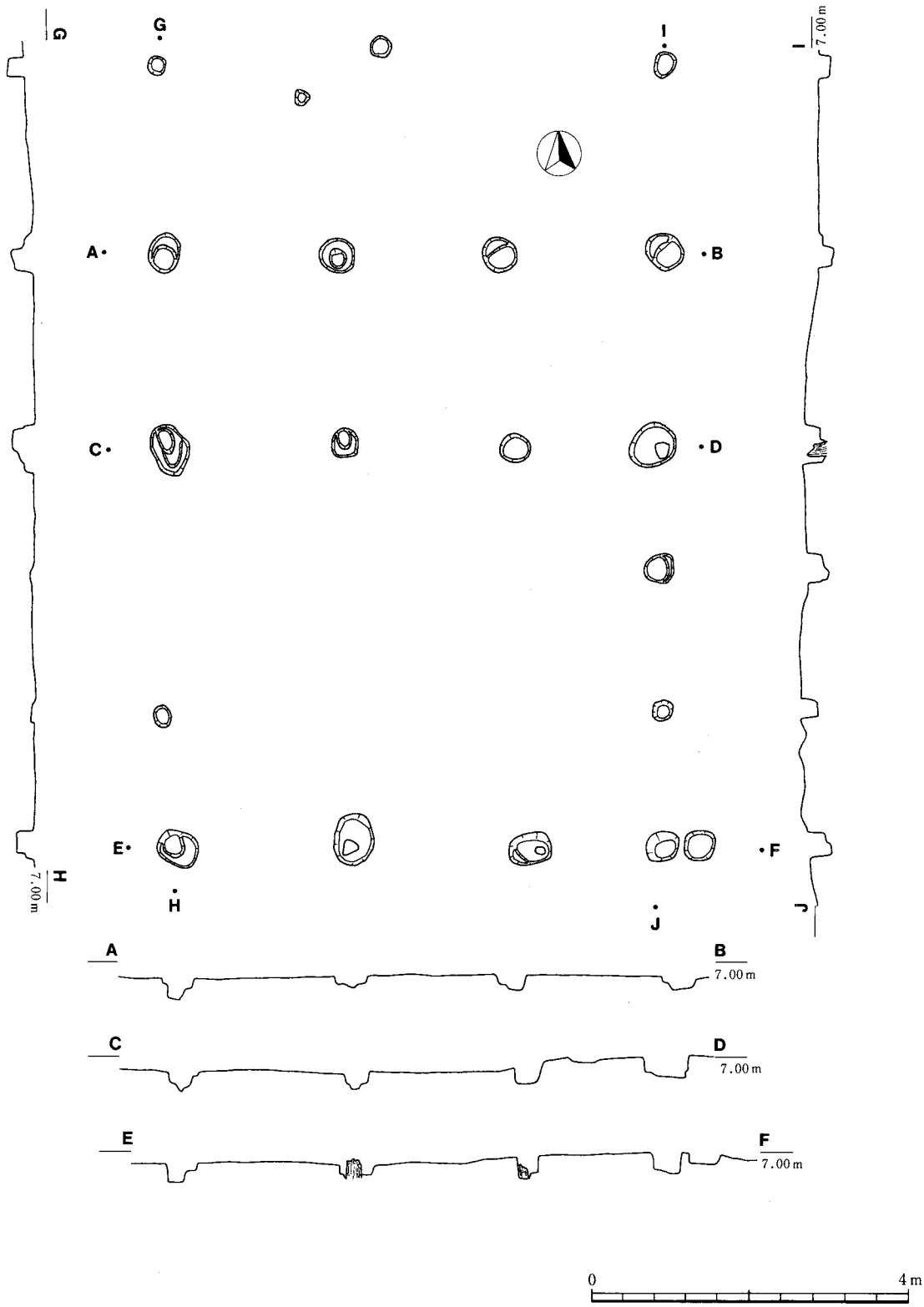
第15図　SB03実測図（S＝1／80）



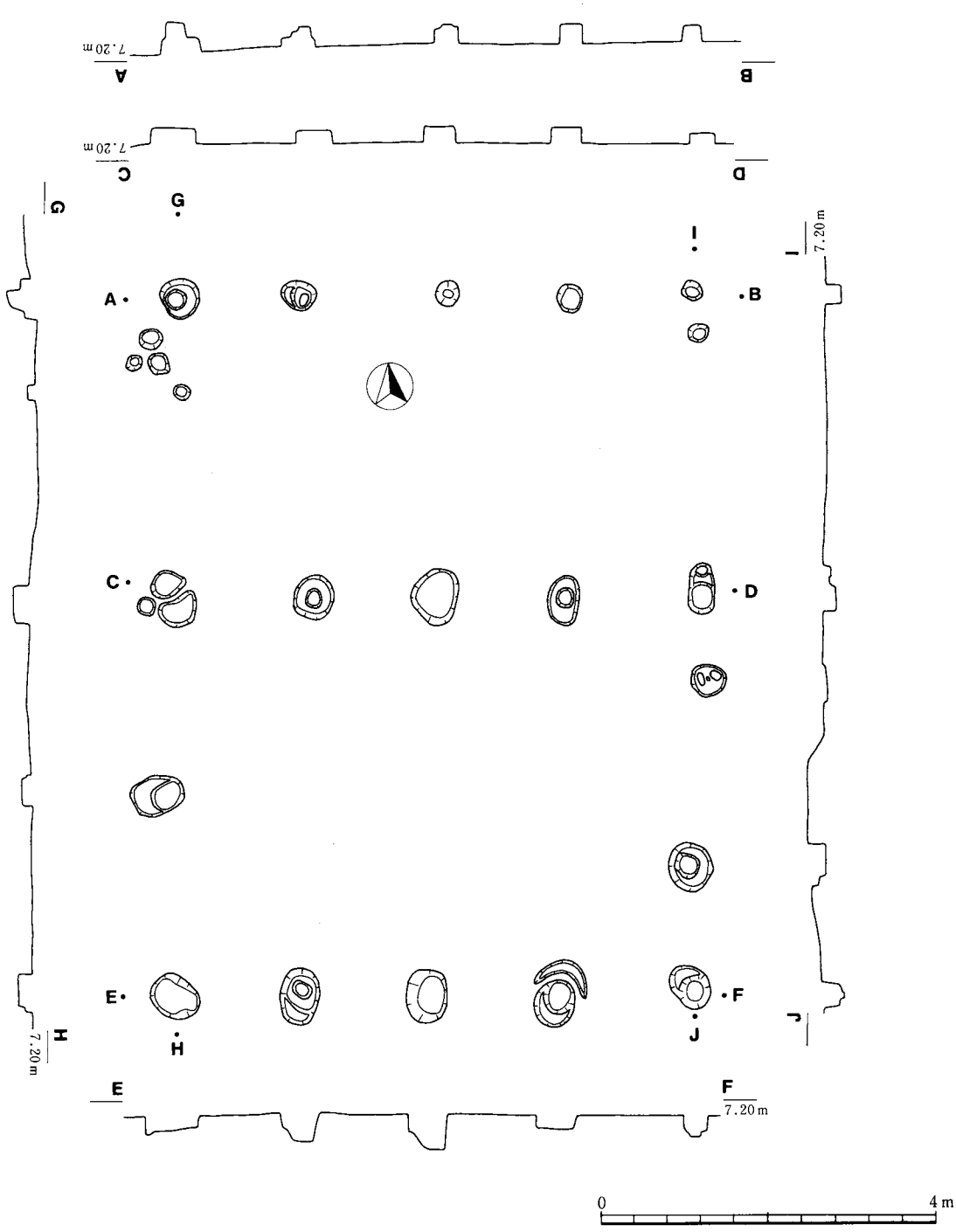
第16図　SB06実測図（S＝1／80）



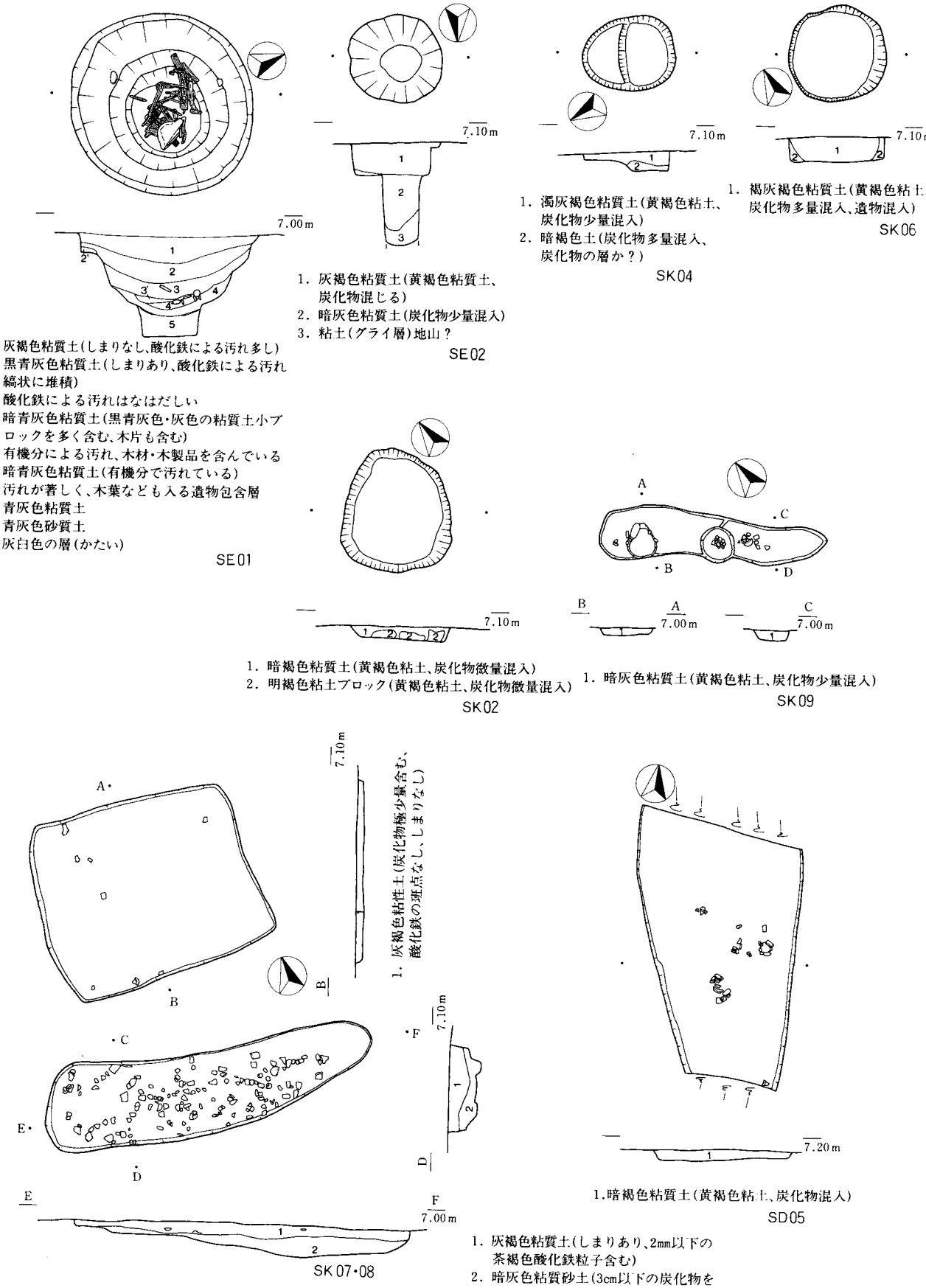
第17図　SB04実測図（S＝1／80）



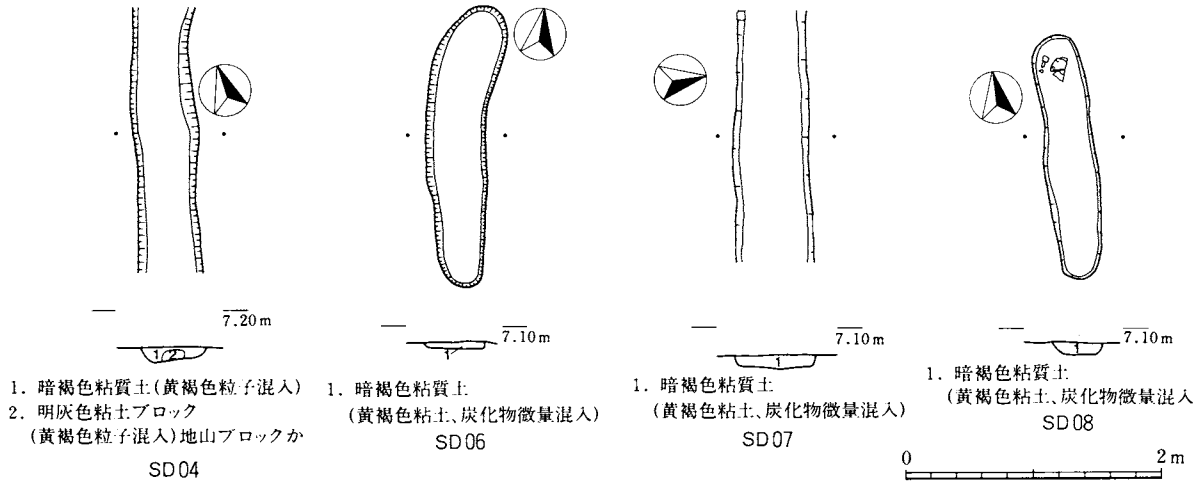
第18図　SB05実測図（S＝1／80）



第19図　SB07実測図（S＝1／80）



第20図　遺構実測図（S＝1／60）



第21図　遺構実測図（S＝1／60）

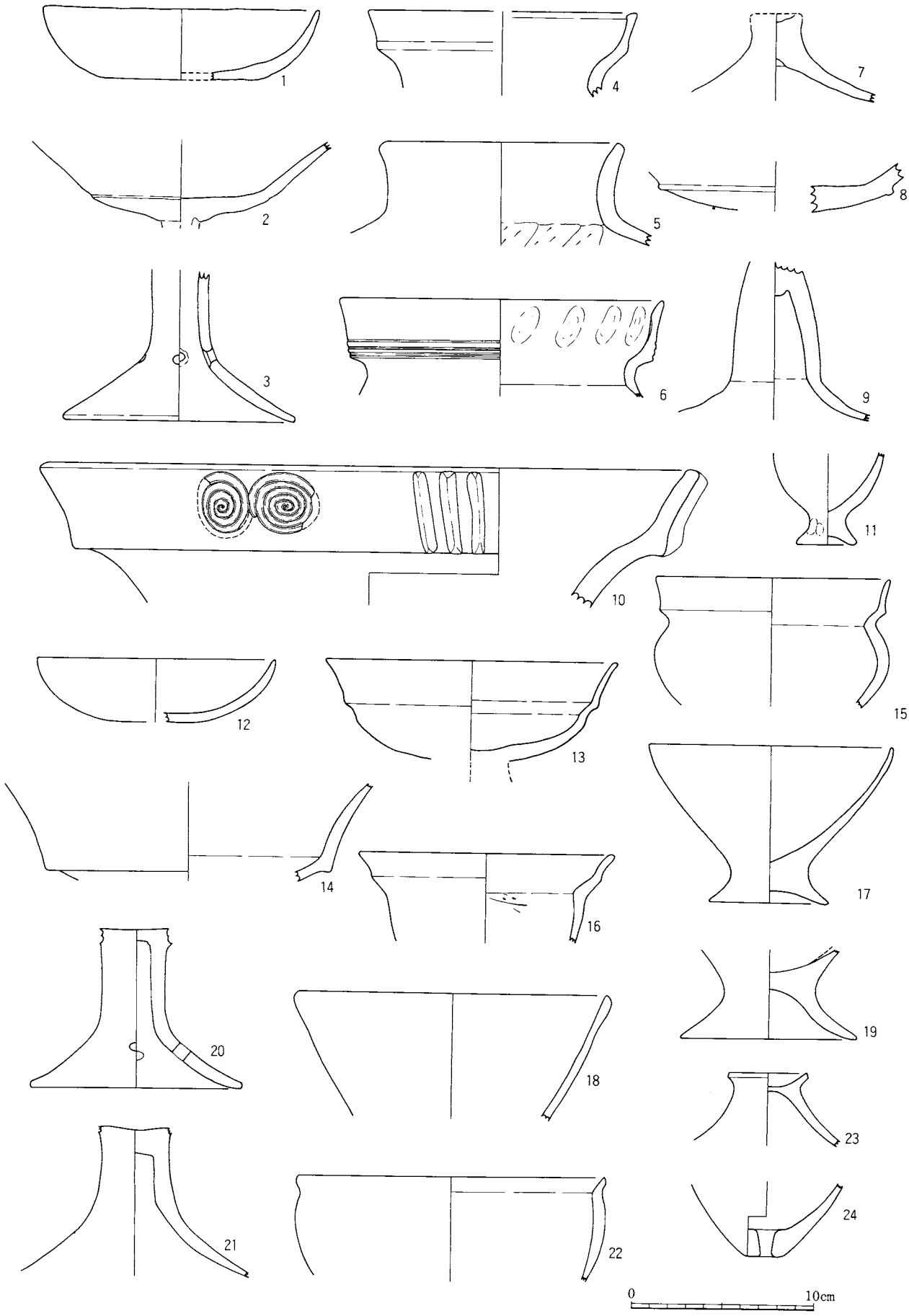
は、12世紀末から13世紀前半代に遺物が見られるようになる。そして14世紀後半から15世紀前半代の遺物があり、17世紀前半代以降のものもある。

(6) 小結

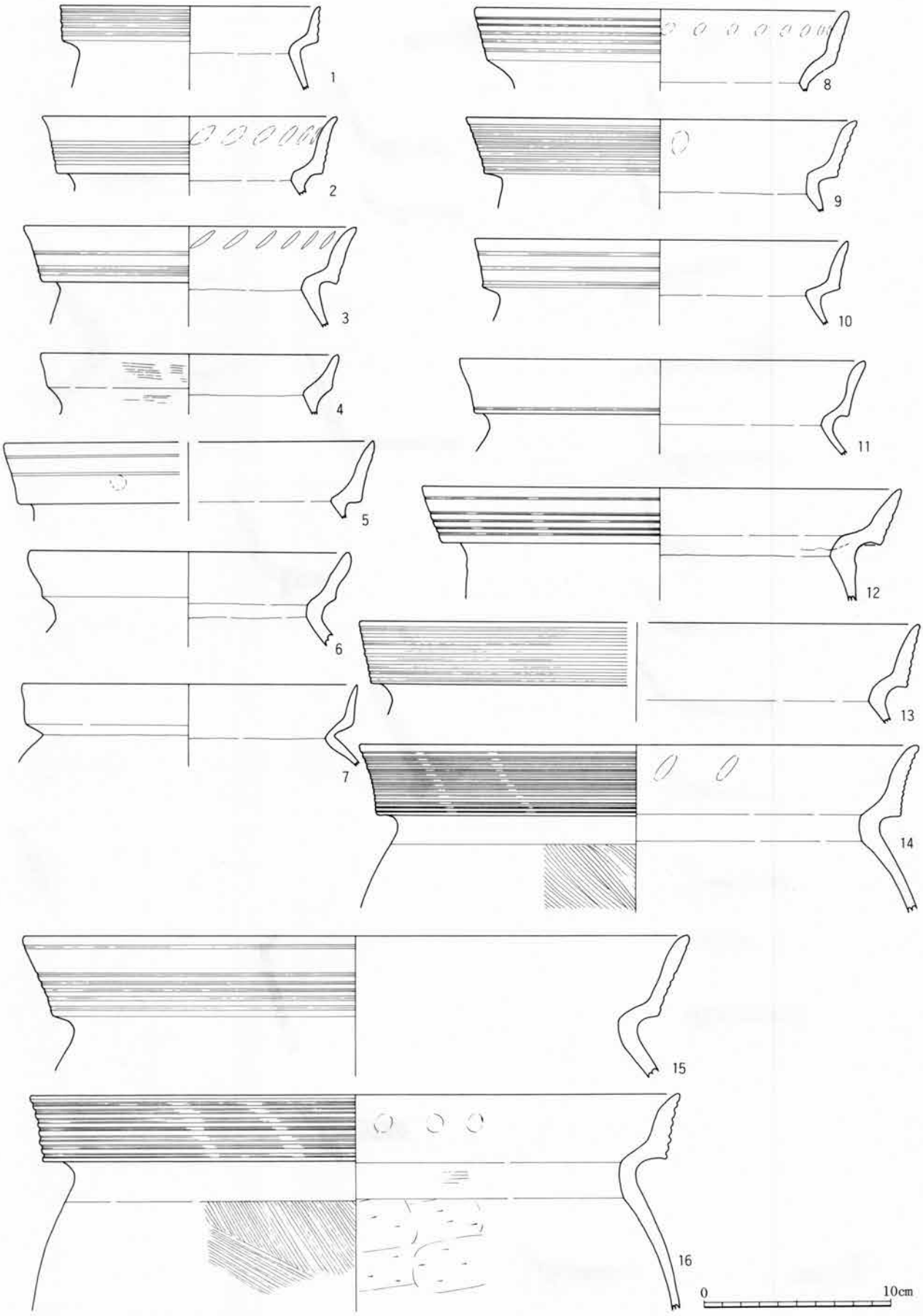
第１次調査では、建物等の遺構は検出されていないが、溝等から出土する遺物から、弥生時代末頃に集落が成立し、いったんは途絶えているようである。また同じく明確に建物等の遺構は検出されてはいないが、出土遺物から見れば７世紀後半に再び集落が形成されていると思われる。そしてまた遺物から見ればいったん途絶えて、再び８世紀半ば以降集落が形成され、９世紀末から10世紀前半代頃まで継続しているようである。調査区内で検出された掘立柱式建物跡は、そのほとんどが当期に属しているものと考えられる。その後は建物跡はわからないものの、中世段階と考えられる井戸跡が見られることから、当期の集落が形成されたものと思われる。そして14世紀後半から15世紀前半代頃に中世段階における一つのピークがあったものと思われる。これは遺跡の南東側の丘陵部にある軽海中世墓群とも関連が考えられる。近世に入るとおそらく集落域というよりも生産域に変化しているものと考えられる。

第３節　馬鞍雨乞石の調査

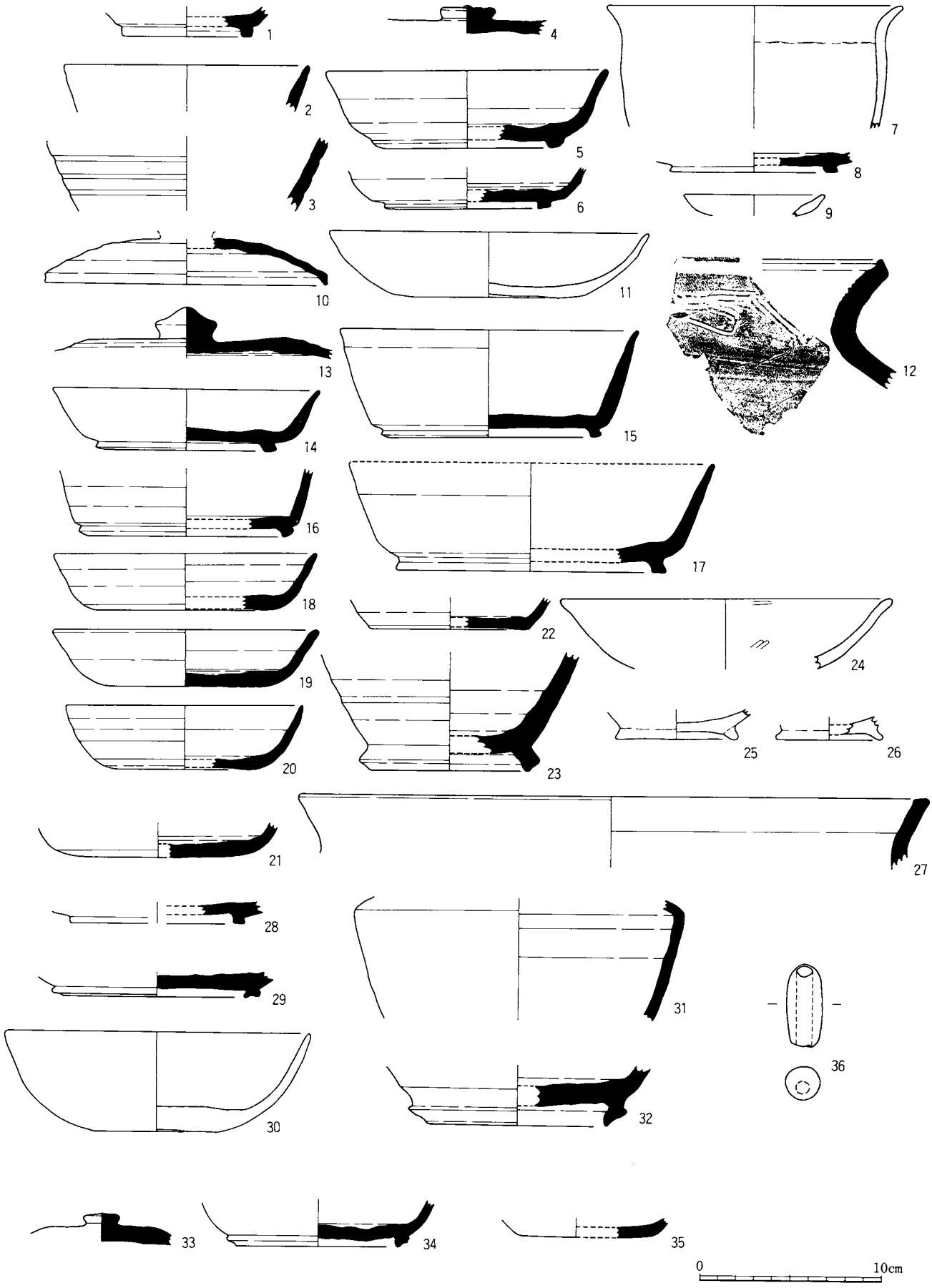
馬鞍雨乞石は、伝承によれば清水寺の僧兵が訓練の際に鞍を掛けた石であると言われている。清水寺は「浄水寺」の墨書土器が多数出土した浄水寺跡のことと考えられ、馬鞍雨乞石から南西約350mの地点に位置する。浄水寺跡は８世紀後半から15世紀後半まで続く山林寺院と考えられており、そこで行われていたであろう宗教儀礼等が、寺院が廃絶後も浄水寺の池に祈りを捧げ、馬鞍雨乞石を動かして雨乞いをするという、雨乞い信仰に受け継がれてきたと思われる。調査の結果、水利施設の一種であることが判明している（第28図）。



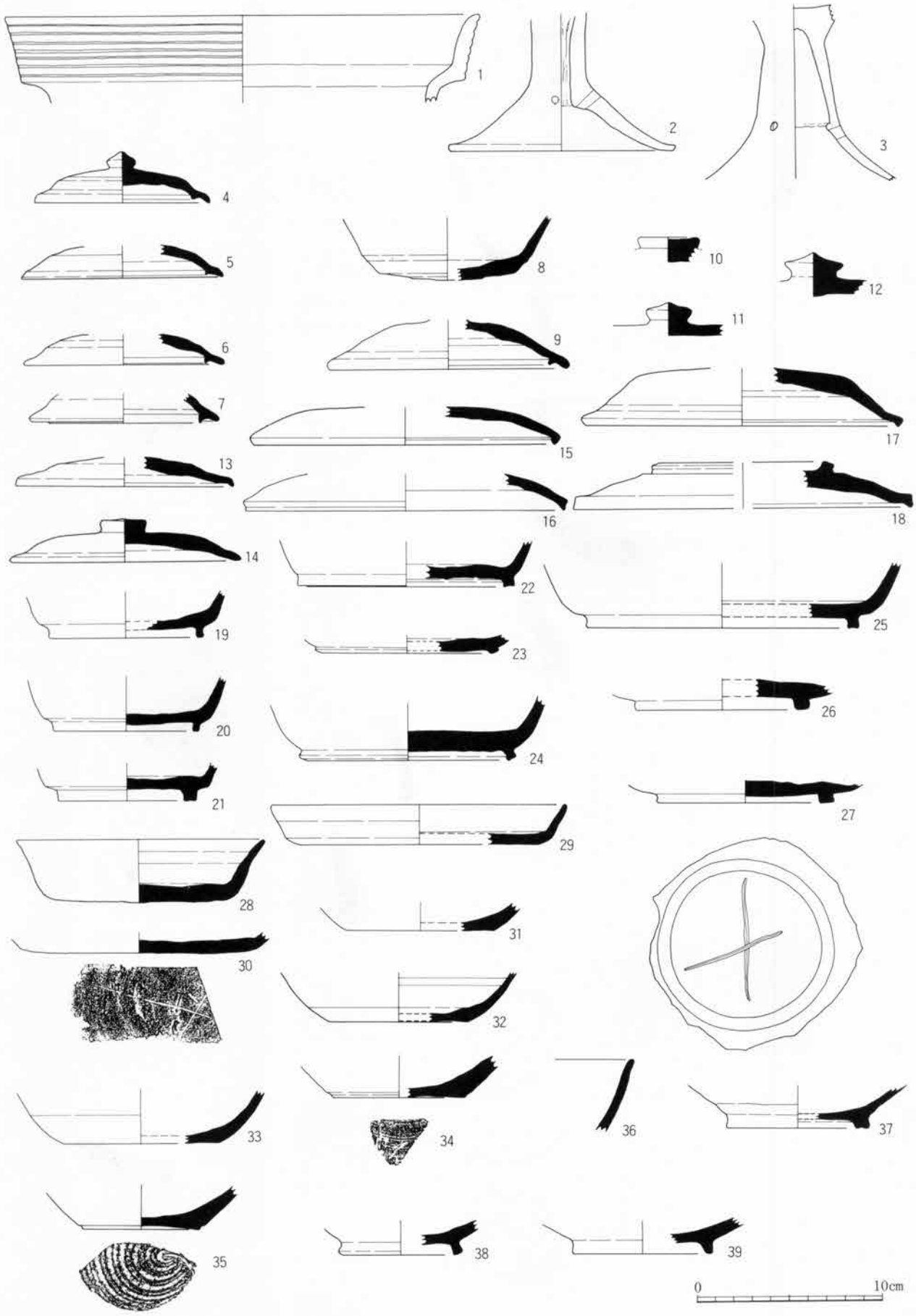
第22図　遺物実測図（S＝1／3）



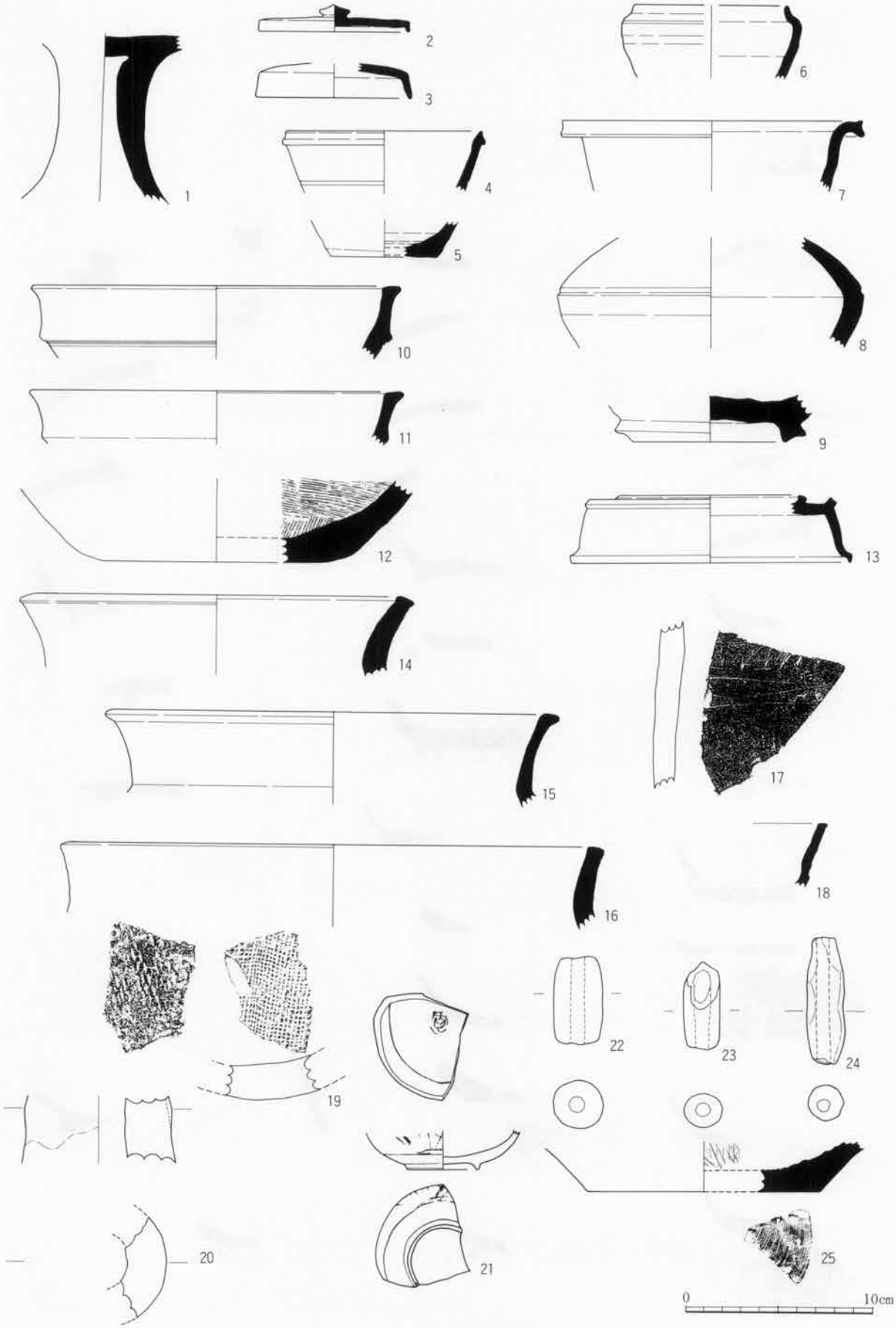
第23図　遺物実測図（S＝1／3）



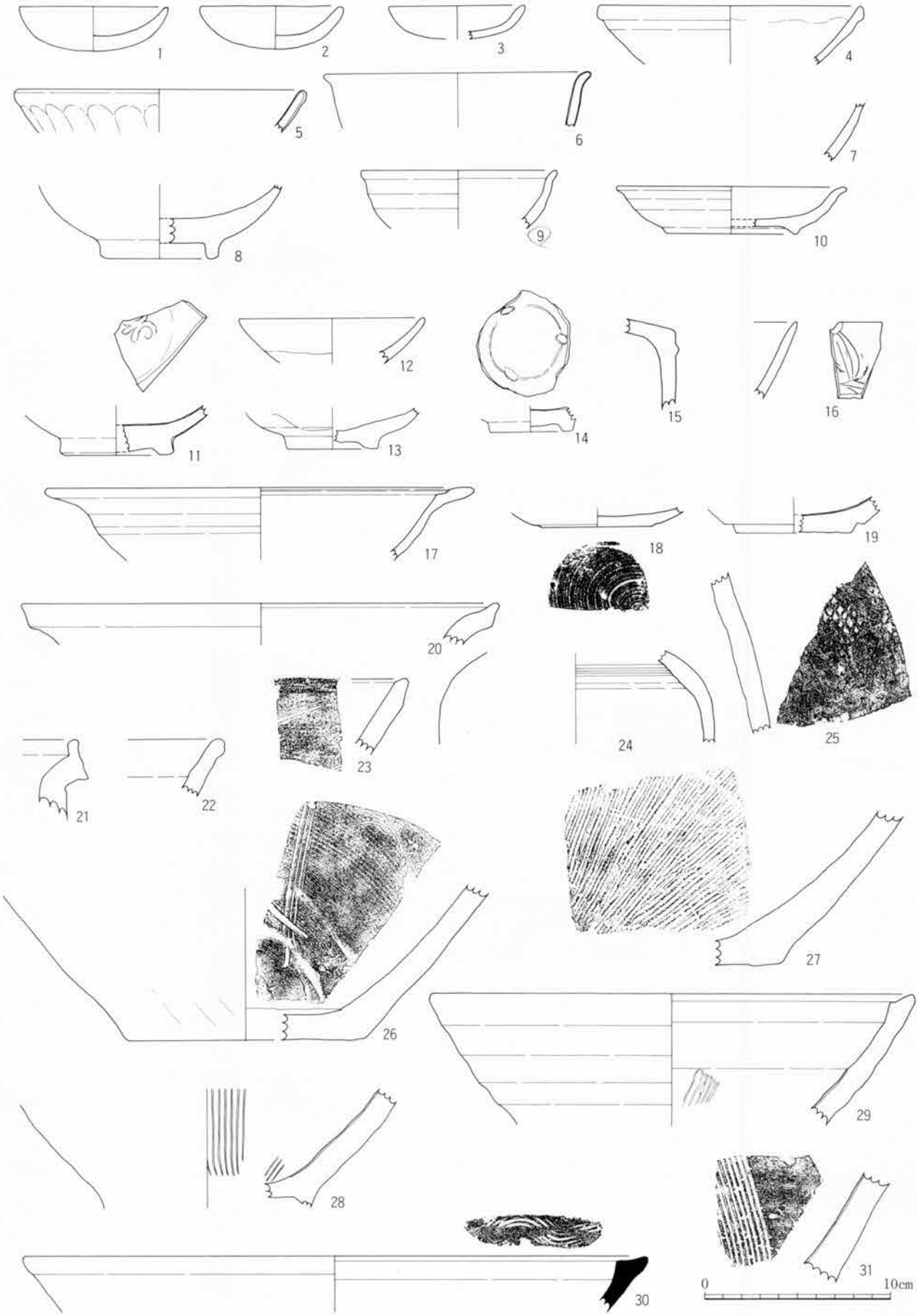
第24図　遺物実測図（S＝1／3）



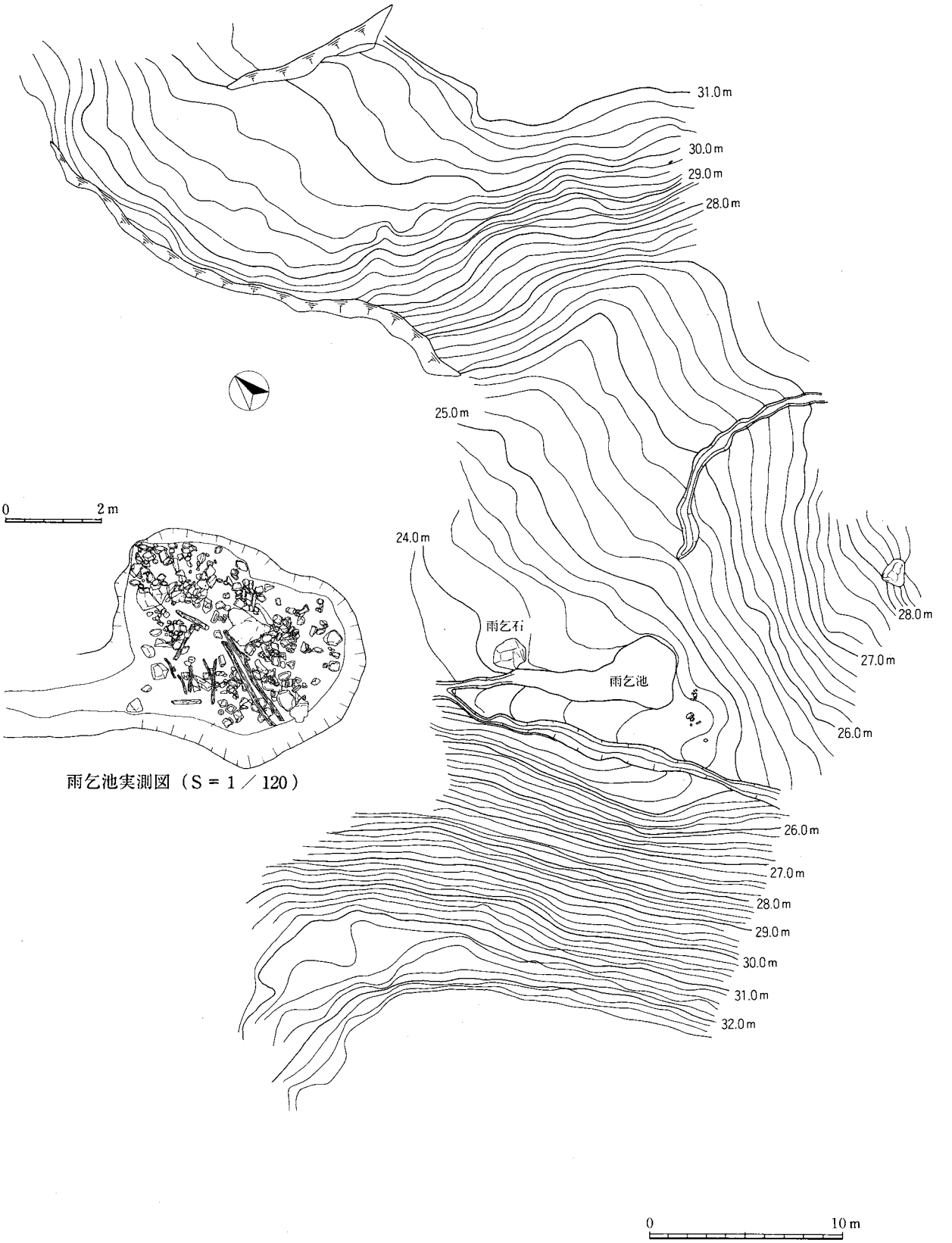
第25図　遺物実測図（S＝1／3）



第26図　遺物実測図（S＝1／3）



第27図　遺物実測図（S＝1／3）



第28図　雨乞石付近地形図（S＝1／300）

第22図

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
1	SK07	土 椀	口：15.1 高：3.9	混入（8世紀代） フ－5
2	SK07	高杯		か－10
3	SK07	高杯	脚：12.3	か－3
4	SK07	壺	口：14.9	か－4
5	SK07	壺	口：12.9	か－6
6	SK07	甕	口：17.9	か－5
7	SK07	蓋		か－8
8	SK07	高杯		か－9
9	SK07	高杯		混入 か－7
10	SK04	壺	口：35.6	こや－2
11	弥生溝	弥 台付鉢	脚：3.0	ミニチュア 横－18
12	弥生溝	土 椀	口：13.0	混入（8世紀代） 横－24
13	弥生溝	弥 高杯	口：16.1	フ－2
14	弥生溝	弥 器台		横－10
15	弥生溝	弥 鉢	口：12.7	横－15
16	弥生溝	弥 鉢	口：14.1	横－11
17	弥生溝	弥 台付鉢	口：13.2 高：8.4 脚：6.0	フ－1
18	弥生溝	弥 鉢	口：17.1	横－23
19	弥生溝	弥 台付鉢	脚：9.3	横－9
20	弥生溝	弥 高杯	脚：11.1	横－1
21	弥生溝	弥 高杯		横－25
22	弥生溝	弥 鉢	口：16.9	横－4
23	弥生溝	弥 蓋	摘：4.2	横－14
24	弥生溝	弥 鉢		底部穿孔 横－13

第23図

1	弥生溝	弥 甕	口：14.1	横－20
2	弥生溝	弥 甕	口：15.9	横－5
3	弥生溝	弥 甕	口：18.0	横－2
4	弥生溝	弥 甕	口：16.0	横－8
5	弥生溝	弥 甕	口：20.0	横－6
6	弥生溝	弥 甕	口：17.3	横－3
7	弥生溝	弥 甕	口：18.1	横－7
8	弥生溝	弥 甕	口：20.0	横－17
9	弥生溝	弥 甕	口：21.0	横－21
10	弥生溝	弥 甕	口：20.0	横－12
11	弥生溝	弥 甕	口：21.7	横－16
12	弥生溝	弥 甕	口：25.6	か－2
13	弥生溝	弥 甕	口：30.1	横－19
14	弥生溝	弥 甕	口：30.0	こや－1
15	弥生溝	弥 甕	口：35.9	横－22
16	弥生溝	弥 甕	口：35.2	か－1

第24図

1	C－106 SB4－5P	須 杯B	台：6.0	こや－10
2	SB6－4P	須 杯B	口：13.5	か－17
3	D－109 SB6－1P	須 瓶		こや－11
4	SB7－4P	須 蓋	摘：3.0	か－19
5	E－112 SB7－?P	須 杯B	口：15.5 高：4.2 台：9.0	こや－38
6	D－112 SB7－11P	須 杯B	台：7.8	こや－9
7	167P	土 甕	口：15.9	か－20
8	SE01	須 杯B	台：7.8	フ－15
9	SE01	土 皿	口：7.7	フ－16
10	SK08	須 蓋	口：15.6	フ－9
11	SK09	土 椀？	口：17.8 高：3.6 底：10.5	か－12
12	C－106 ピット内	陶器 甕		加賀焼 こや－13

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
13	B－102 SD01	須 蓋	摘：3.3	こや－14
14	D－102 SD01	須 杯B	口：14.7 高：3.3 脚：8.7	か－15
15	SD01	須 杯B	口：16.5 高：5.9 脚：11.1	か－13
16	D－102 SD01	須 杯B	台：10.6	こや－8
17	SD01	須 杯B	口：19.8 高：5.9 脚：13.2	か－14
18	D－102 SD01	須 椀A	口：14.5 高：3.1 底：9.9	こや－5
19	B－102 SD01	須 椀A	口：14.5 高：3.1 底：8.4	こや－39
20	D－102 SD01	須 椀A	口：13.0 高：3.6 底：7.5	こや－3
21	B－102 SD01	須 椀A	底：8.4	こや－6
22	D－102 SD01	須 椀A	底：8.4	こや－4
23	SD01	須 甕	台：8.4	こや－7
24	D－102 SD01	土 椀	口：18.0	内面黒色 こや－15
25	SD01	土 椀B	台：6.3	内面黒色 か－16
26	D－102 SD01	土 椀B	台：5.4	内面黒色 こや－16
27	B－102 SD01	須 甕	口：34.7	こや－12
28	C－109 SD04	須 杯B	台：8.4	か－18
29	SD05	須 杯B	台：9.6	フ－6
30	SD05	土 椀A	口：16.8 高：5.4 底：6.6	か－11
31	SD05	須 瓶		フ－11
32	SD05	須 瓶	台：9.6	フ－8
33	SD08・09	須 蓋	摘：1.9	フ－3
34	SD08・09	須 杯B	台：8.7	フ－7
35	SD08・09	須 杯A	底：6.9	フ－4
36	SD06	土 土錘		重：14.2g フ－13

第25図

1	C－104 床土内	弥 甕	口：25.9	斉－12
2	B－111 床土内	弥 高杯	脚：12.0	斉－10
3	C－105 床土内	弥 高杯		斉－11
4	F－104 床土内	須 蓋	口：9.5 高：2.7 摘：1.5	横－31
5	F－113 床土内	須 蓋	口：10.8	横－26
6	E－104 床土内	須 蓋	口：10.8	斉－23
7	C－109 床土内	須 蓋	口：9.2	か－26
8	F－103 床土内	須 杯G	底：7.2	斉－26
9	E－110 床土内	須 蓋	口：12.9	斉－15
10	C－110 床土内	須 蓋摘み	摘：3.3	か－25
11	C－104 床土内	須 蓋摘み	摘：2.4	か－43
12	B－109 床土内	須 蓋摘み	摘：3.0	か－42
13	E－108 床土内	須 蓋	口：11.9	斉－25
14	E－110 床土内	須 蓋	口：12.4	斉－13
15	E－110 床土内	須 蓋	口：16.4	斉－14
16	C－109 床土内	須 蓋	口：17.3	か－24
17	E－108 床土内	須 蓋	口：16.9	斉－22
18	E－110 床土内	須 蓋	口：18.1	斉－30
19	D－108 床土内	須 杯B	台：8.1	か－39
20	B－108 床土内	須 杯B	台：7.5	か－37
21	B－106 床土内	須 杯B	台：6.3	か－38
22	D－102 床土内	須 杯B	台：10.5	こや－17
23	D－102 床土内	須 杯B	台：9.0	こや－18
24	C－107 床土内	須 杯B	台：10.8	斉－5
25	C－109 床土内	須 盤B	台：13.5	斉－6
26	C－113 床土内	須 杯B	台：8.1	か－40
27	C－111	須 杯B	台：8.1	ヘラ記号「X」 横－32
28	B－105 床土内	須 杯A	口：13.2 高：3.5 底：9.0	か－19

第2表　昭和58（1983）年度調査出土遺物観察表

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
29	D－108 床土内	須 盤A	口：16.0 高：2.1 底：12.6	こや－19
30	C－107 床土内	須 盤A	底：12.6	ヘラ記号「X」 か－32
31	C－112 床土内	須 椀A	底：7.8	底部ロクロ削り か－28
32	D－108 床土内	須 椀A	底：7.5	底部ロクロ削り こや－20
33	C－109 床土内	須 椀A	底：8.2	底部ロクロ削り か－29
34	不明 床土内	須 椀A	底：7.0	底部糸切り か－44
35	不明 床土内	須 椀A	底：6.3	底部回転糸切り 横－38
36	C－109 床土内	須 椀		斉－3
37	E－105 床土内	須 椀B	台：6.3	斉－27
38	C－109 床土内	須 椀B	台：6.0	斉－8
39	C－104	須 椀B	台：7.2	斉－7

第26図

1	C－110 床土内	須 高杯		斉－9
2	E－110 床土内	須 蓋	口：8.1 高：1.4 脚：1.6	斉－16
3	E－110 床土内	須 蓋	口：8.3	斉－24
4	D－112 床土内	須 瓶	口：10.6	こや－24
5	C－109 床土内	須 小壺		か－27
6	D－108 床土内	須 小壺	口：8.1	こや－23
7	E－107 床土内	須 瓶	口：16.1	斉－17
8	E－103 床土内	須 瓶		斉－19
9	C－109 床土内	須 壺	脚：7.9	か－41
10	D－112 床土内	須 甕	口：19.6	横－43
11	E－113 床土内	須 甕	口：20.0	斉－20
12	B－106 床土内	須 壺		か－31
13	E－103	須 円面硯		横－35
14	B－109 床土内	須 甕	口：20.0	か－35
15	E－111 床土内	須 甕	口：23.7	斉－21
16	B－109 床土内	須 甕	口：28.9	か－36
17	D－110 床土内	須 甕		か－33
18	B－109 床土内	須 瓶		か－23
19	G－111 床土内	平瓦		横－27
20	D－107 床土内	軒羽口		斉－54
21	C－106 近世溝	磁器 碗		フ－12
22	E－110	土 土錘		横－36
23	B－109	土 土錘		横－27
24	G－111 床土内	土 土錘		フ－25
25	B－106 近世溝	陶器 擂鉢		肥前 フ－14

第27図

1	B－102 床土内	土 皿	口：8.1 高：2.3	灯明痕 か－10
2	D－108 床土内	土 皿	口：7.6 高：2.2	灯明痕 斉－34
3	C－109 床土内	土 皿	口：7.4 高：1.8	斉－2
4	F－107 床土内	白磁 碗	口：13.8	斉－32
5	E－107 床土内	青磁 碗	口：15.4	斉－31
6	C－102 床土内	青磁 碗	口：14.3	斉－1
7	D－108 床土内	白磁 碗		横－42
8	D－108	青磁 碗	台：5.4	横－33
9	F－109	瀬戸美濃 天目碗	口：10.6	横－34
10	E－105 床土内	瀬戸美濃 端反皿	口：12.2 高：2.5 底：6.6	斉－29
11	E－105 床土内	青磁 碗	台：4.8	斉－33
12	D－105 床土内	陶器 皿	口：10.0	肥前 横－40
13	D－108 床土内	陶器 皿	台：3.3	肥前、砂目、灰釉 か－46
14	D－103 床土内	陶器 皿	台：3.3	肥前、砂目、灰釉 か－47
15	F－105 床土内	瓦質土器 火鉢		横－39
16	G－104 床土内	青磁 碗		横－29
17	E－104 床土内	瀬戸美濃 折縁皿		斉－28

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
18	D－114 床土内	瀬戸美濃 緑釉小皿	底：5.8	横－41
19	C－110 床土内	瀬戸美濃 平椀	底：6.0	か－22
20	D－103 床土内	陶器 甕	口：25.7	加賀焼 こや－25
21	F－113 床土内	陶器 甕		加賀焼 横－30
22	D－110 床土内	陶器 鉢		越前焼 こや－21
23	D－103 床土内	陶器 擂鉢		越前焼 こや－22
24	D－110 床土内	瀬戸美濃 瓶		こや－27
25	B－111 床土内	陶器 甕		加賀焼、押印あり か－34
26	F－113 床土内	陶器 擂鉢	底：12.6	加賀焼、ハケメ 斉－35
27	D－108 床土内	陶器 擂鉢		珠洲焼 斉－36
28	E－103 床土内	陶器 擂鉢		加賀焼 横－28
29	F－108	陶器 擂鉢	口：26.0	珠洲焼 斉－18
30	D－112 床土内	陶器 擂鉢	口：33.7	珠洲焼 こや－26
31	C－102 床土内	陶器 擂鉢		珠洲焼 斉－4

第3表　昭和58（1983）年度出土遺物観察表

第５章　昭和59(1984)年度の調査

第１節　概　　要

前年に引き続いて調査が行われている。調査面積は4,300㎡で、調査区は軽海用水を挟んで北・南の二つの調査区に分けられている。現地調査は８月17日から12月17日まで行われた。調査区内には10ｍグリッドを設定し、北東杭をグリッド名としている。調査担当者は垣田修児・越坂一也である。

北調査区では、調査区の北半部に溝を中心として掘立柱建物跡・井戸跡等の遺構が見られるが、南半部では遺構密度が薄くなり、ほとんど遺構が確認されていない。南調査区では、上層と下層の二面の調査が行われており、上層からは溝を中心として弥生時代以降の遺構・遺物が検出されている。その下層からは縄文時代の遺構・遺物が検出されている。また調査区は拡張され、拡張区が設定されている。拡張区にはテラス状の部分が存在し、中世段階と思われる総柱建物跡が検出されている。

北調査区・南調査区に分けてその概要を次節より述べることとする。

第２節　北調査区の遺構・遺物

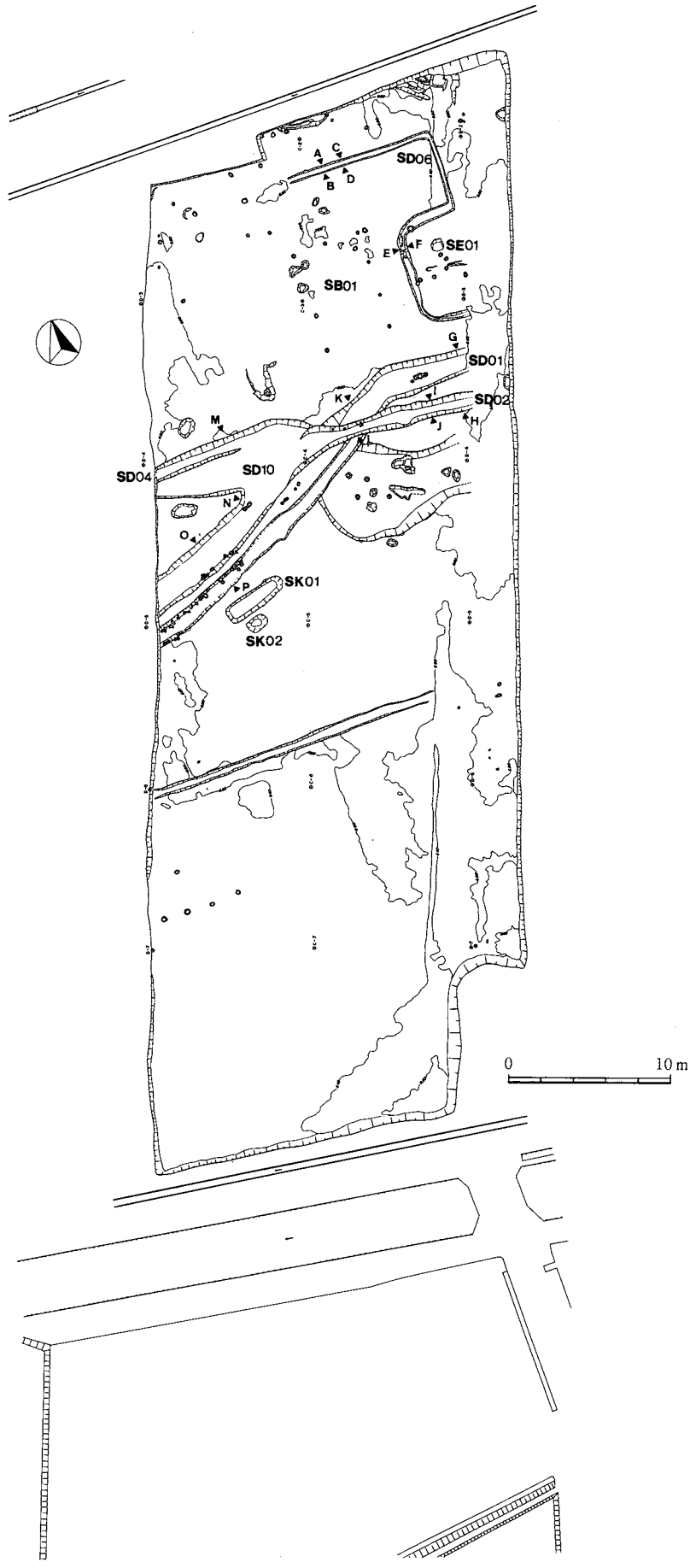
掘立柱建物跡１棟、井戸跡１基、溝跡６条程度検出されている。遺構密度は前年度の調査区と比較すると薄く、集落の縁辺部に当たるものと思われる。南調査区との間には鞍部が見られ、少なくとも古代の軽海西芳寺遺跡はこの鞍部で画されていると考えられる。

ＳＢ０１（第29･30図）　調査区の北部分に位置する、２×３間の側柱式の掘立柱建物であると思われる。その面積は24.7㎡を測る。方位は梁行を北にほぼ揃えている。建物の時期は明確にしがたいが、おそらく古代に属するものと思われる。これは前年度の調査区で検出された、掘立柱式建物の主軸方位とほぼ同一であることから推定できる。

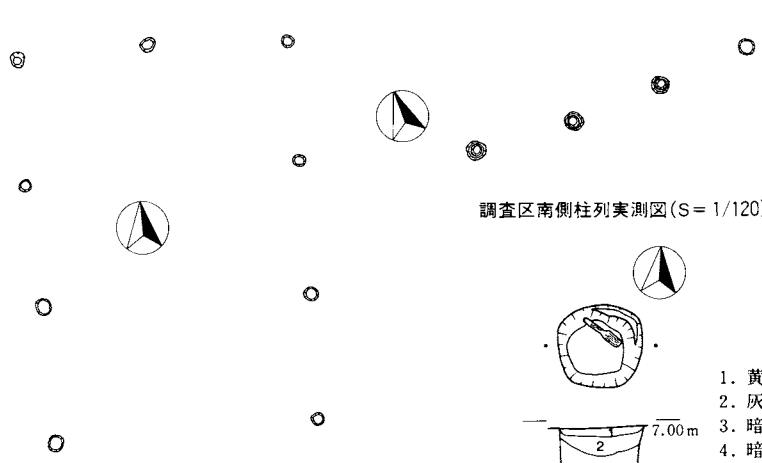
ＳＥ０１（第30図）　調査区の北東部に位置している。検出面では直径約1.2ｍの隅丸方形の平面形を呈する。深さは約1.7ｍを測る。土師器皿や網代・箸・曲物底板・杓子が出土している（第32図）。12世紀末～13世紀初頭頃の時期とみられる。

ＳＤ０６（第30図）　調査区の北東部に位置し、調査区内をクランクして東から西へ流路をとる溝である。

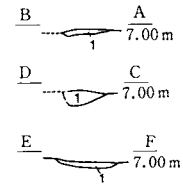
ＳＤ１０（第31図）　調査区を東西に流路をとる溝であり、幅約２ｍ、深さ約0.7ｍを測る。比較的まとまって遺物（第31図－1～20）が出土している。若干混じりが見られるものの、溝が機能していた時期は遺物の年代から、白江式期から漆12･13群に当たるものと思われる。このＳＤ１０の上部には、ＳＤ０１・０２・０４等溝が錯綜している。また近世の溝も重なっている。古墳時代以来近世まで用排水路として機能していたものと考えられよう。



第29図　昭和59 (1984) 年度北調査区全体図（S＝1／400）

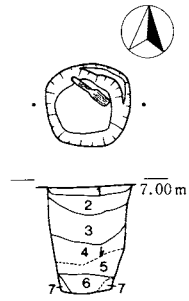


調査区南側柱列実測図(S＝1/120)



SD06セクション　(S＝1/60)

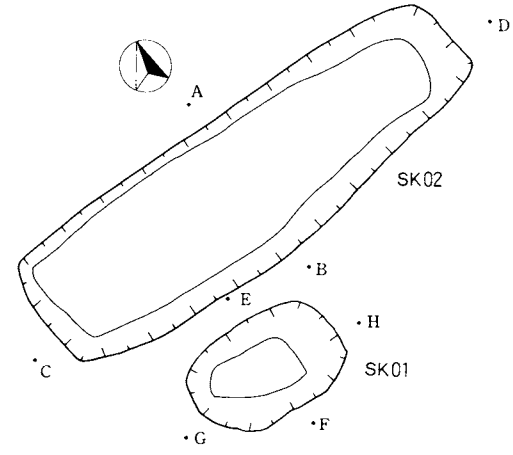
1. 灰褐色粘質土



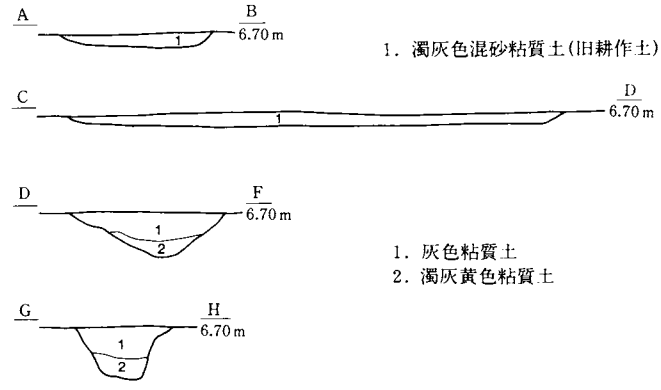
SB01 実測図(S＝1/120)

1. 黄褐色混砂粘質土(締まりよい)
2. 灰褐色粘質土(鉄分沈着多い、締まりよい)
3. 暗灰褐色粘質土(地山に似た土が混入、鉄分沈着多い、締まり悪い)
4. 暗灰青色粘質土(粘性強い、曲物・箸・木器を包含する)
5. 暗灰青色粘質土
6. 灰青色粘質土(箸が少量存在する)
7. 灰青色粘質土
8. 青色シルト(地山？)

SE01 実測図(S＝1/60)

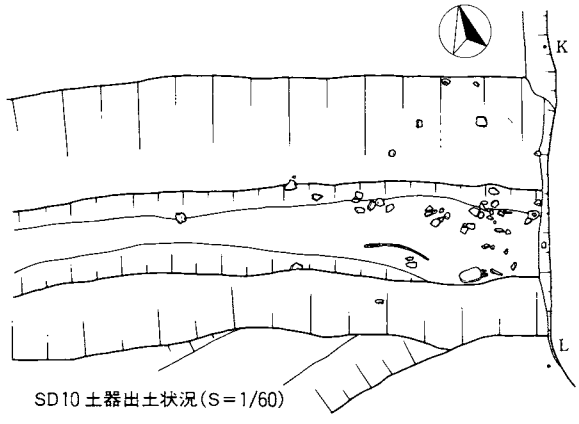


SK01・02 実測図(S＝1/60)

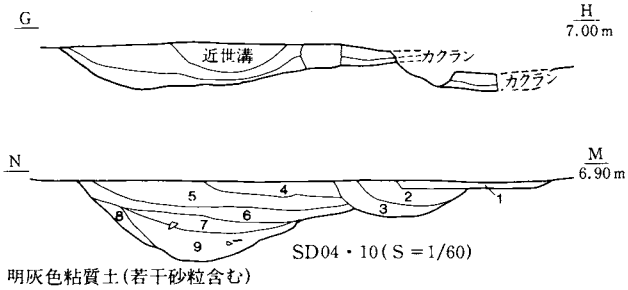


1. 濁灰色混砂粘質土(旧耕作土)

1. 灰色粘質土
2. 濁灰黄色粘質土

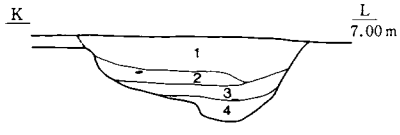


SD10 土器出土状況(S＝1/60)

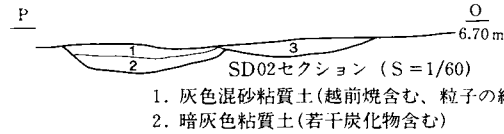


SD04・10(S＝1/60)

1. 明灰色粘質土(若干砂粒含む)
2. 暗灰色粘質土(包含層、鉄分の沈着多い)
3. 濁灰色粘質土(地山ブロックを少量含み、層全体にまばらに砂を含む)
4. 濁灰褐色混砂粘質土(若干炭化物を含む)
5. 濁灰褐色混砂粘質土(炭化物が上層に比べ多く含まれ、砂の混じる割合が高い)
6. 灰褐色混砂粘質土(粗い砂質、鉄分の沈着は右側で多い)
7. 灰黄褐色砂質土(若干ではあるが灰色粘質土が含まれる、遺物少量含む)
8. 黄灰色粘質土(鉄分の沈着が若干見られる)
9. 暗青灰色粘質土(遺物が最も多く含まれており、木器・木片等も含む)

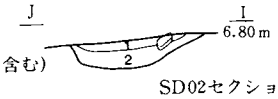


1. 暗灰褐色粘質土(近世溝？、鉄分炭化物含む)
2. 灰黄褐色粘性砂質土(布留式の土師器をわずかに包含する、鉄分炭化物を含む)
3. 黄褐色砂(粗い粒子、鉄分を多く含む、下位に遺物を多く包含する)
4. 灰褐色粘土(炭化物を含む、遺物をわずかに包含する)



SD02セクション　(S＝1/60)

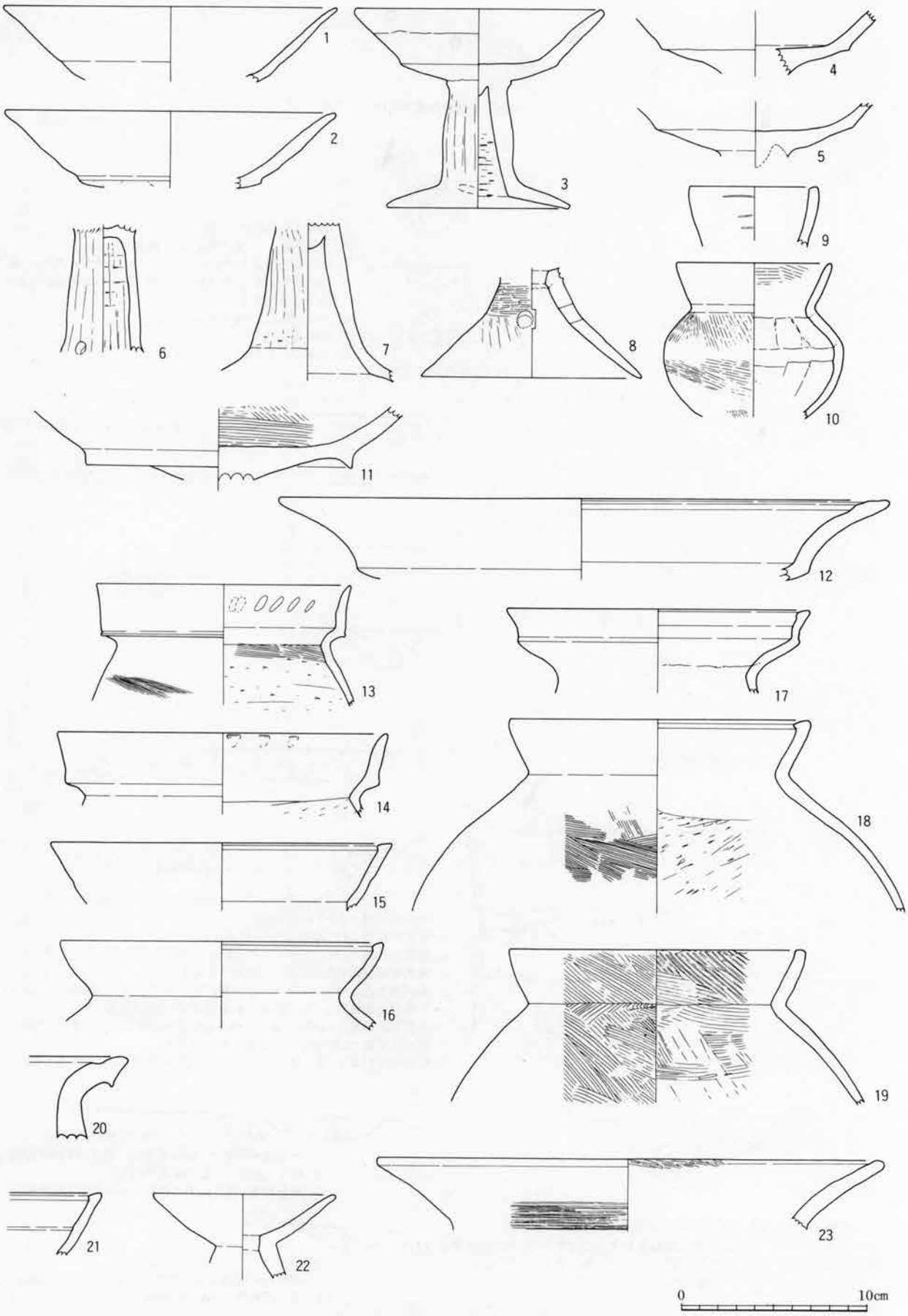
1. 灰色混砂粘質土(越前焼含む、粒子の細かい砂層含む)
2. 暗灰色粘質土(若干炭化物含む)
3. 灰色砂層(粗い粒子の砂層、下位に鉄分沈着多い)



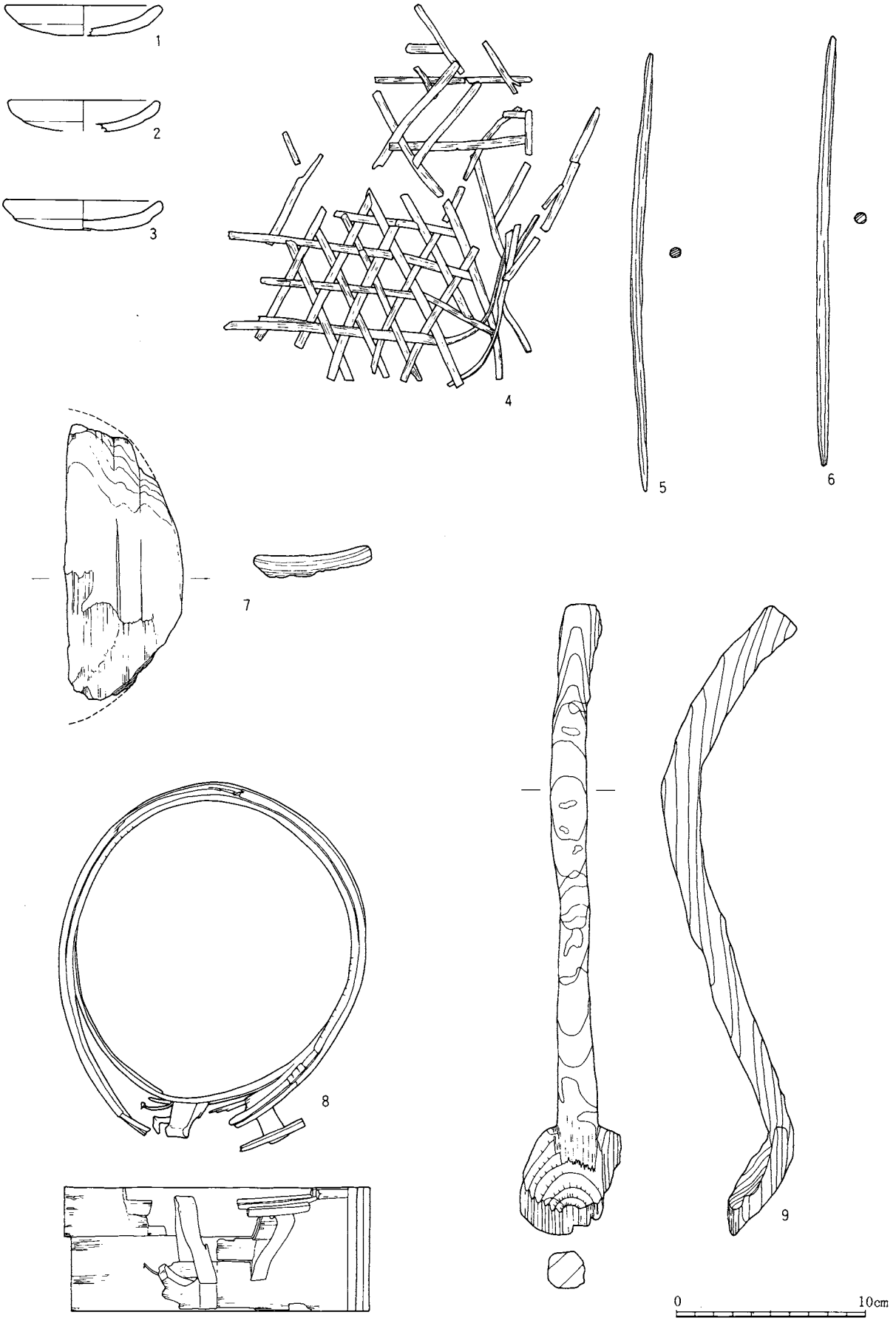
SD02セクション　(S＝1/60)

1. 灰色混砂粘質土(越前焼含む、粒子の細かい砂層含む)
2. 暗灰色粘質土(若干炭化物含む)

第30図　遺構実測図



第31図　遺物実測図（S＝1／3）



第32図　遺物実測図（S＝1／3）

第３節　南調査区の遺構・遺物

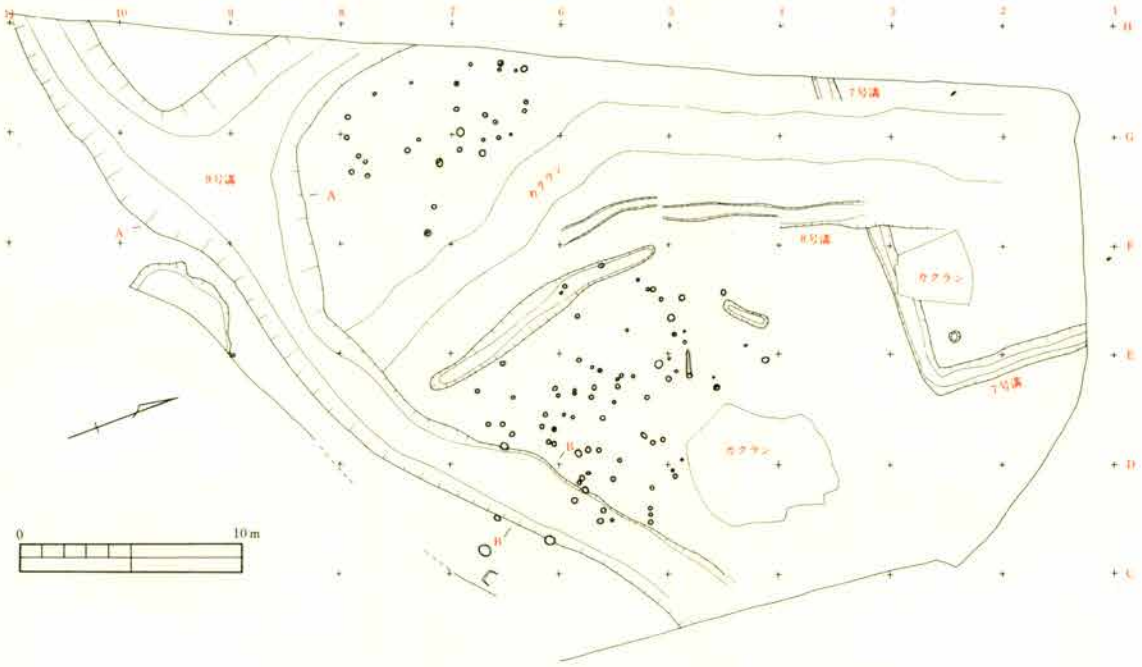
１．上層の遺構・遺物

調査は５ｍグリッドを設定し、北東杭をグリッド名として行われている。調査の結果、主に溝跡が中心に検出されている。掘立柱建物跡などの遺構は検出されていないが、Ｄ－５・Ｇ－６区周辺にはピット群が多数検出されており、いつの時代に属するかはわからないが、建物跡が存在する可能性は考えられる。

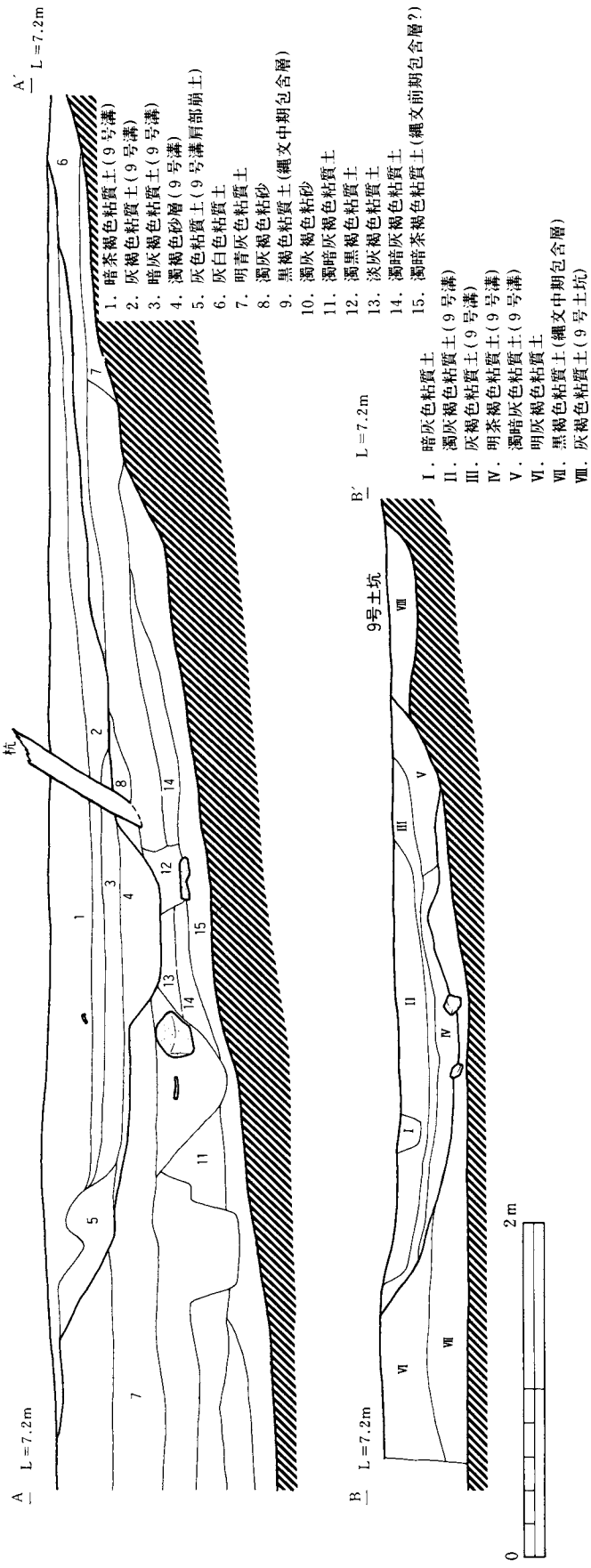
７号溝は調査区の北端部でＬ字型に検出されている。幅約1.2ｍ、深さは調査区西際の浅いところで0.1ｍ以下、東側の深いところで0.3ｍを測る。何らかの区画溝とも考えられるが判然としない。居住域の区画とすれば、建物は調査区外ということになろうか。

９号溝は調査区を西から東に流路を取る大きな溝である。土層断面図（第34図）からその幅と深さを見ると、Ａ－Ａ’ラインでは幅約7.6ｍ、深さ約0.7ｍを測る。断面は二段堀状を呈し、南側から杭が打たれている。護岸のためのものと思われるが、１・２・３層すべてを貫いていることから、９号溝そのものの護岸となるかはわからない。Ｂ－Ｂ’ラインでは幅約3.7ｍ、深さ約0.36ｍを測る。溝の上部はかなり削平を受けているようで、その幅及び深さともかなり狭くかつ浅くなっている。

出土した遺物を見ると、図化されたものの大半は９号溝上層からの出土である。時期はおおむね漆９・10群を中心とした時期の土器と見られる。また、Ｇ－８区で合流する大溝からもほぼ同時期であろうと見られる土器が出土している。９号溝上層からは他に古代や中世の遺物も出土している。これは単なる混入というよりは、９号溝上面に別時期の溝が重なっていた可能性が高いと思われる。おそらく、水の道として中世まで機能していたものと考えられよう。



第33図　昭和59（1984）年度南調査区上層全体図（Ｓ＝１／300）



第34図　9号溝断面図（S＝1／40）

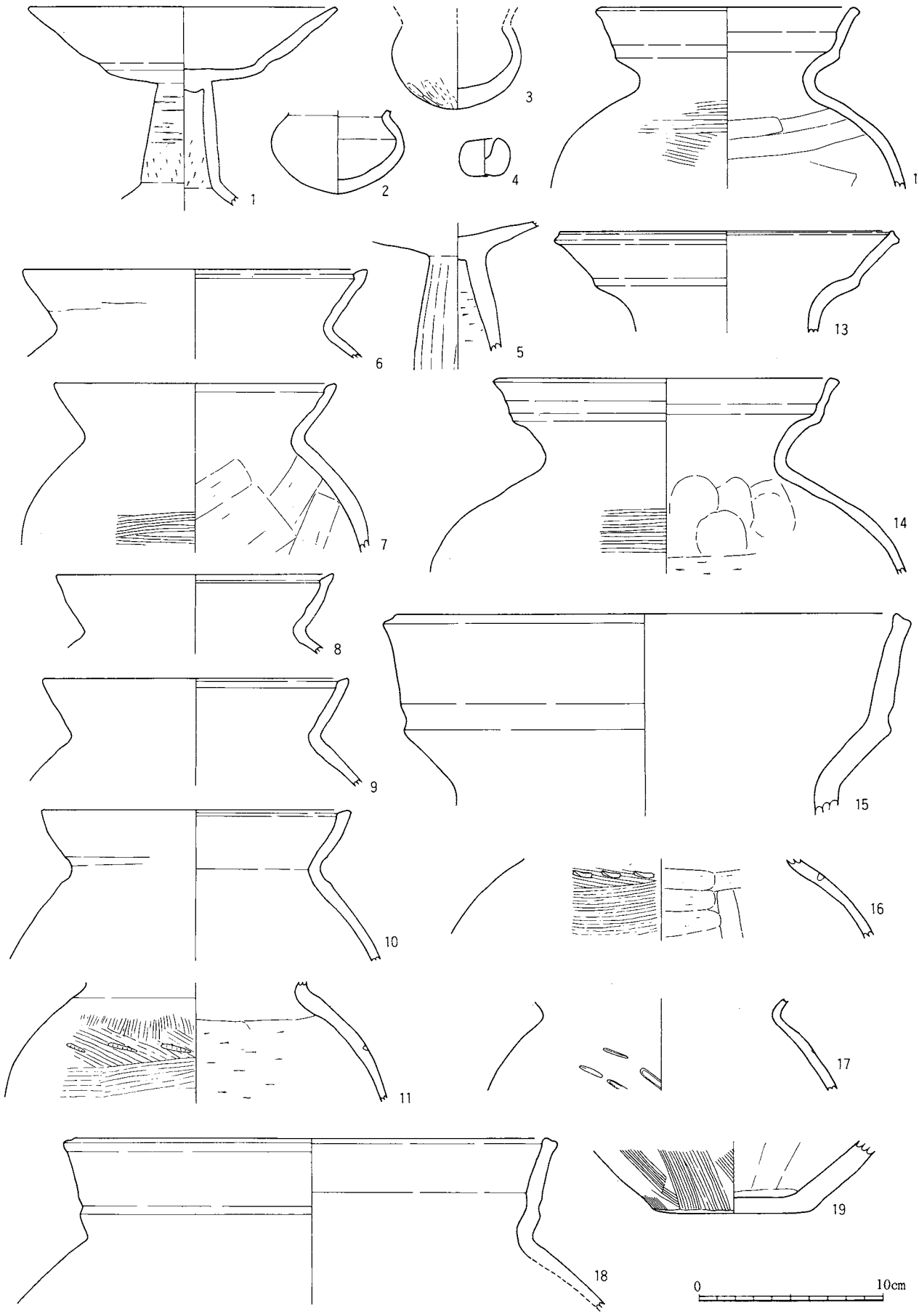
第31図

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
1	SD10オチコミ	高杯	口：17.9	斉－50
2	SD10下層	高杯	口：17.7	こや－37
3	SD10	高杯	口：13.4 高：10.9 脚：9.7	横－44
4	SD10	高杯		斉－48
5	SD10	高杯		斉－49
6	D－2 SD10	高杯		か－57
7	SD10	高杯		斉－51
8	SD10	器台	脚：12.0	4方透 斉－52
9	SD10	壺	口：6.7	か－58
10	SD10	壺	口：8.2	口～体部明瞭黒斑 斉－47
11	SD10	高杯		横－46
12	SD10下層	高杯	口：31.9	こや－36
13	SD10	甕	口：13.7	頸部内：汚れ、外：煤 斉－46
14	SD10	甕	口：17.8	頸部内：汚れ、外：煤 斉－40
15	SD10	甕	口：18.1	斉－37
16	SD10	甕	口：17.4	斉－38
17	SD10	壺	口：16.2	斉－45
18	SD10	甕	口：16.0	口～肩部外面煤 横－45
19	SD10	甕	口：15.4	口～肩部外面煤 横－47
20	SD10オチコミ	陶器 甕		加賀焼 斉－53
21	D－2 包含層	甕		斉－39
22	D－2 包含層	器台	口：9.7	斉－41
23	D－2 包含層	高杯	口：27.0	斉－42

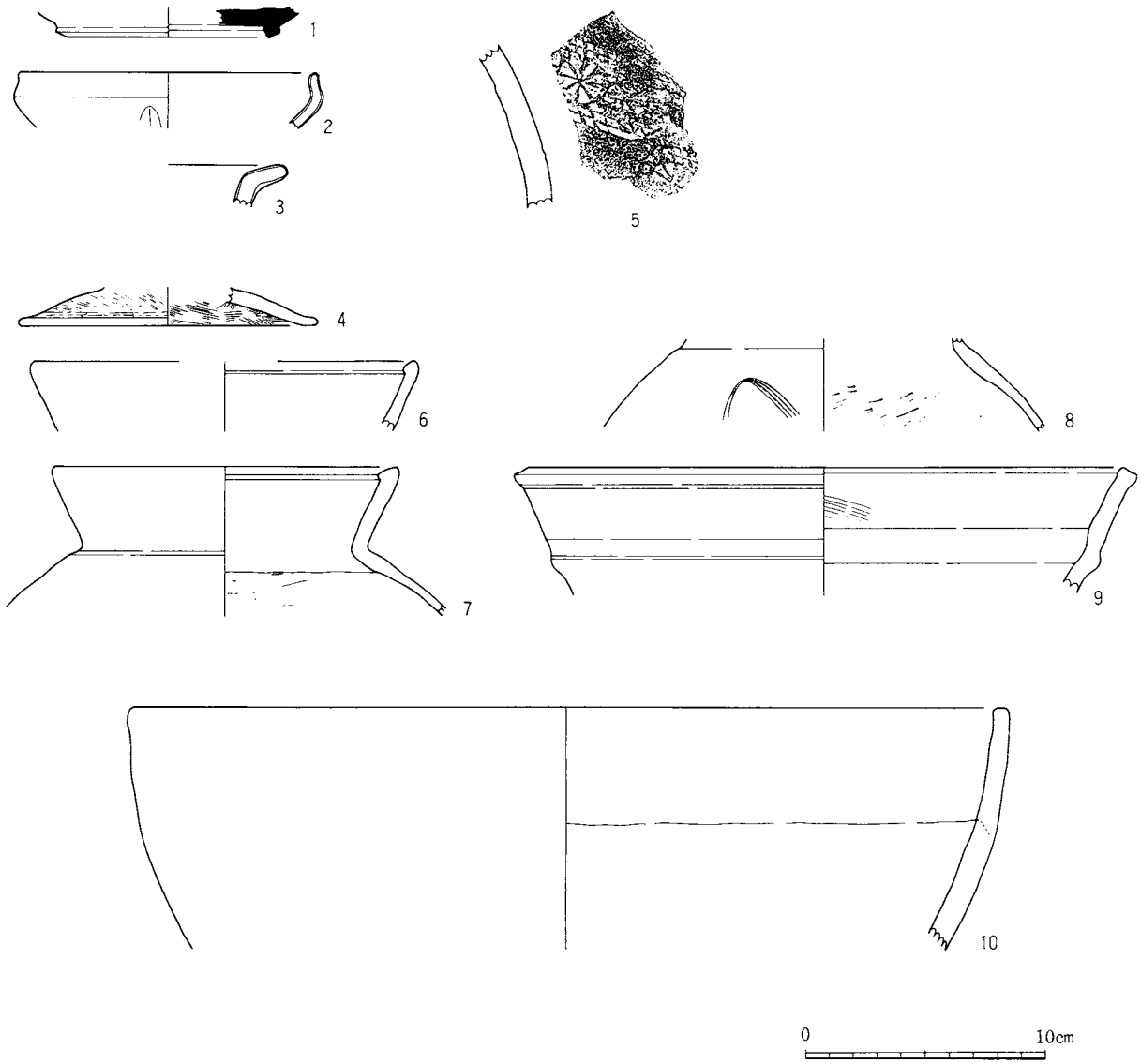
第32図

1	SE01	土 皿	口：8.2	斉－44
2	SE01	土 皿	口：7.8	斉－44－B
3	SE01	土 皿	口：8.3	灯明痕5ヶ所 斉－43
4	SE01	網代		か－2
5	SE01	箸	長：23.7 幅：0.6	斉－21
6	SE01	箸	長：23.4 幅：0.6	斉－22
7	SE01	曲物底板		斉－23
8	SE01	曲物底板		斉－24
9	SE01	杓	長：34.2 幅：1.9	

第4表　昭和59（1984）年度調査遺物観察表



第35図　遺物実測図（S＝1／3）



第36図　遺物実測図（S＝1／3）

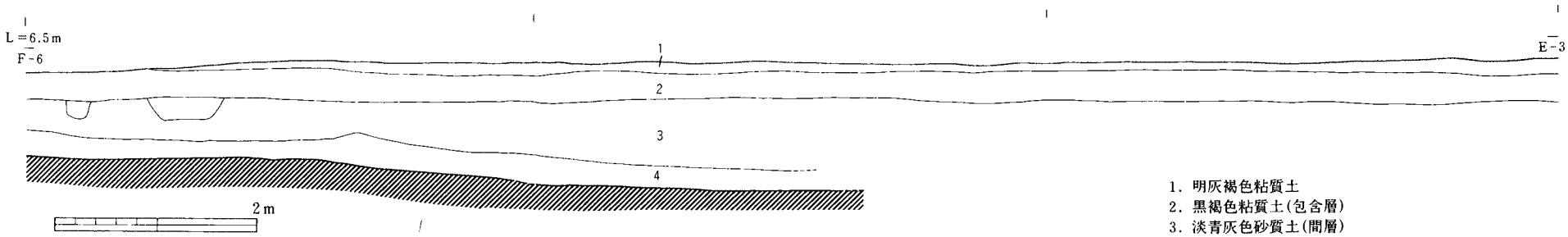
第35図

番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
1	D－7 SD09上層	高杯	口：16.6	か－51
2	F－8 SD09上層	壺		フ－23
3	D－6 SD09上層	壺		底部外面明瞭黒斑 こや－29
4	C－6 SD09上層	ミニチュア	口：1.8 高：2.1	フ－22
5	D－6 SD07	高杯	-	か－55
6	B－4 SD09上層	甕	口：18.5	こや－31
7	C－6 SD09上層	甕	口：15.2	こや－33
8	E－8 SD09上層	甕	口：15.1	口～肩部外面煤 か－53
9	E－8 SD09上層	甕	口：16.6	か－52
10	D・E－8 SD09上層	甕	口：16.7	フ－17
11	D－6 SD09上層	甕		外：煤、内：汚れ か－48
12	C－6 SD09上層	壺	口：13.7	こや－30
13	F－8 SD07・09	壺	口：18.0	フ－18
14	D－6 SD09上層	壺	口：18.2	か－50
15	C－5 SD09上層	壺	口：27.1	こや－34
16	C－5 SD09上層	甕		こや－32
17	D・E－8 SD09上層	甕		フ－21
18	F－8 SD09上層	甕	口：25.6	頸部内面にコゲ か－54
19	C－5 SD09上層	壺		こや－35

第36図

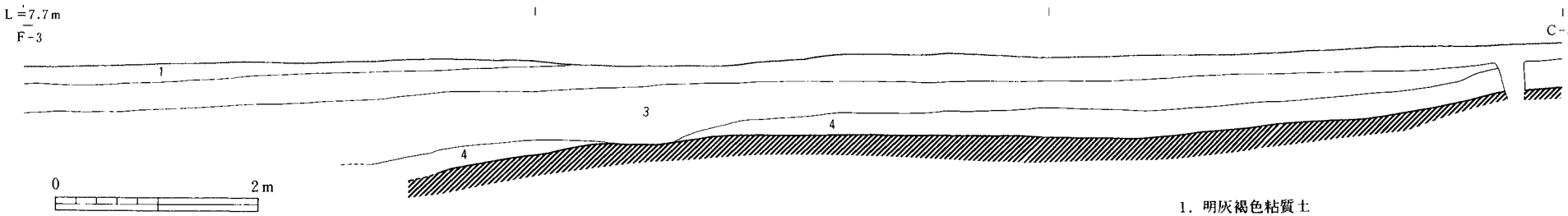
1	D－6 SD09	須 杯B	台：8.4	フ－19
2	D－6 SD09上層	青磁 碗	口：12.4	フ－20
3	E－8 SD09上層	青磁 碗		こや－40
4	G－11 SD09上層	陶器 甕		加賀焼、押印 か－56
5	G－8 大溝	土 高杯	脚：11.4	横－48
6	G－8 大溝	土 甕	口：16.0	横－50
7	G－8 大溝	土 甕	口：14.4	横－51
8	G－8 大溝	土 甕		横－52
9	G－8 大溝	土 甕	口：24.8	横－49
10	F－6 包含層	? 鉢	口：36.4	斉－20

第5表　昭和59（1984）年度調査出土遺物観察表



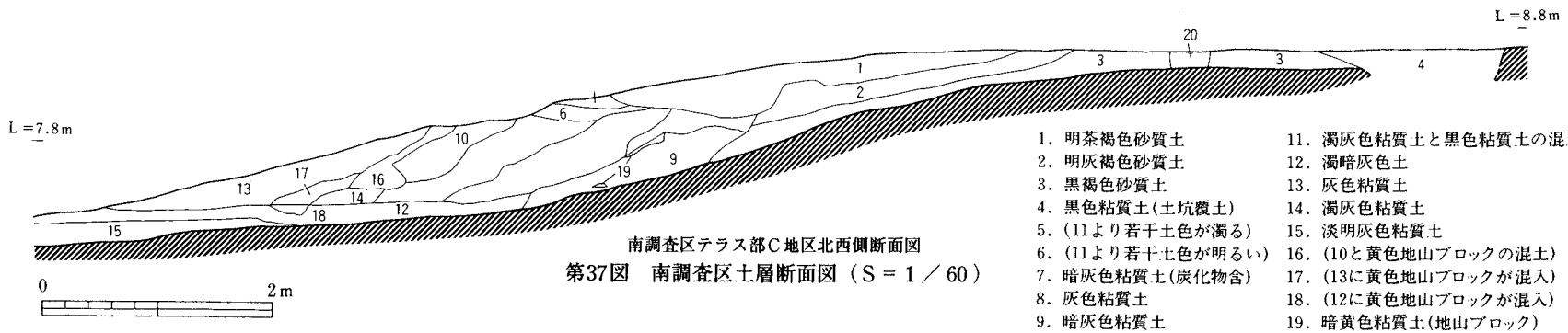
1. 明灰褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土(包含層)
3. 淡青灰色砂質土(間層)
4. 黒褐色粘質土(包含層)

南調査区(Fライン)南北軸



1. 明灰褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土(包含層)
3. 淡青灰色砂質土(間層)
4. 黒褐色粘質土(包含層)

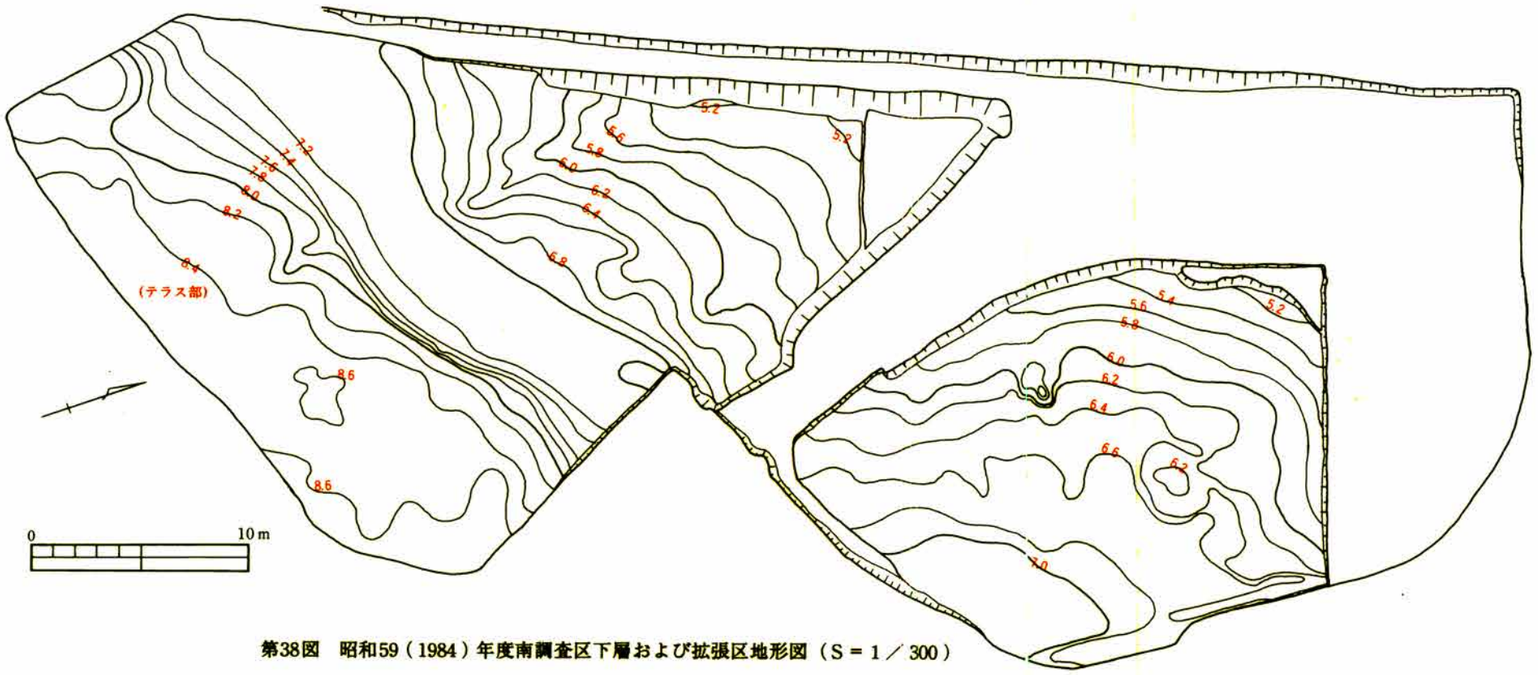
南調査区(3ライン)東西軸



1. 明茶褐色砂質土
2. 明灰褐色砂質土
3. 黒褐色砂質土
4. 黒色粘質土(土坑覆土)
5. (11より若干土色が濁る)
6. (11より若干土色が明るい)
7. 暗灰色粘質土(炭化物含)
8. 灰色粘質土
9. 暗灰色粘質土
10. 濁灰色粘質土
11. 濁灰色粘質土と黒色粘質土の混土
12. 濁暗灰色土
13. 灰色粘質土
14. 濁灰色粘質土
15. 淡明灰色粘質土
16. (10と黄色地山ブロックの混土)
17. (13に黄色地山ブロックが混入)
18. (12に黄色地山ブロックが混入)
19. 暗黄色粘質土(地山ブロック)
20. (カクラン)

南調査区テラス部C地区北西側断面図

第37図　南調査区土層断面図（S＝1／60）



第38図　昭和59（1984）年度南調査区下層および拡張区地形図（S＝1／300）

第39図　昭和59（1984）年度南調査区下層および拡張区全体図（S＝1／300）

2　下層の遺構・遺物

縄文時代の遺構

(1) 住居址

1号住居址（第40・41図）

上層の9号溝の直下、C－6区西側に位置する。竪穴状の掘り込みをもつものと推定されるが、必ずしも確認はされていない。方形の石組炉が1基伴い、周囲に石が散在する。炉石は二辺4個が原位置に残されているが、他の二辺の石は抜き取られたか、あるいは失われている。炉内部には焼土が認められる。

柱穴については二通りの配置が認められる。一つ目は、柱穴1～8の直径約4mのものであり、調査担当者のメモに基づいている。平面図には記録されていないが、写真による限りにおいては炉址検出の段階では竪穴のプランが残っていた可能性があるので、これに基づくものであると思われる。二つ目は図上での検出であり、柱穴1～4・9・10の長径約3m・短径約2mのものであり、柱穴の下場のレベルは柱穴2・3・9・10がh=6.3m～6.4m前後、柱穴1・4がh=6.5m～6.6m前後で対応する。いずれの場合も炉は主軸あるいは中心からはずれた位置になる。あるいは、拡張を伴う建て替えが行われたことも考えられるが、竪穴のプランが記録に残されていないために、即断はできない。なお柱穴6～10は明らかに土坑の覆土を掘り込んでおり、したがって、土坑群にすべて連関性があるとすれば、1号住居址は、これらより年代的には新しいものと考えられる。

出土遺物は、土器（第45図7・第49図112）・石鏃など（第6表参照）がある。

(2) 土坑群（第42～44図）

7・8・9号土坑

C－6区東側、1号住居に近接する。7・8号土坑は重複しており、覆土の状況から同じ場所を二度掘ったか、あるいは一つの土坑であると考えられる。9号土坑は肩部から深鉢形土器（第53図240）が出土している。

10・11号土坑

C－6区南東隅、9号土坑の南側に隣接する。10号土坑を11号土坑が切っている。遺物は、10号土坑より出土した土器1点（第46図38）を図示した。

23号（A・B）土坑

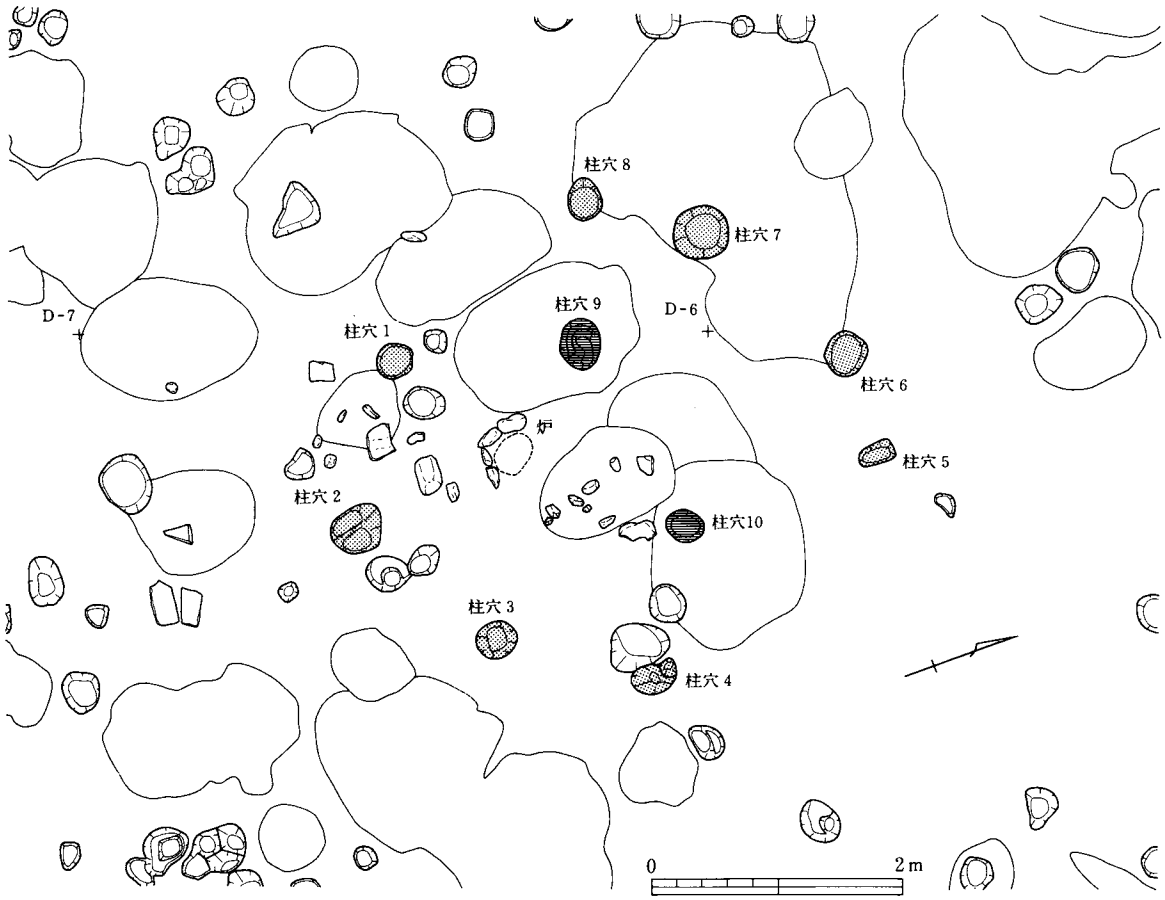
切りあう二つの土坑であり、23号B土坑を23号A土坑が切っている。23A土坑の肩部から土器（第56図277）が出土している。その他にも出土状態は不明であるが、土器2点（第47図78・第48図85）・石鏃（第6表参照）が出土している。

33号土坑

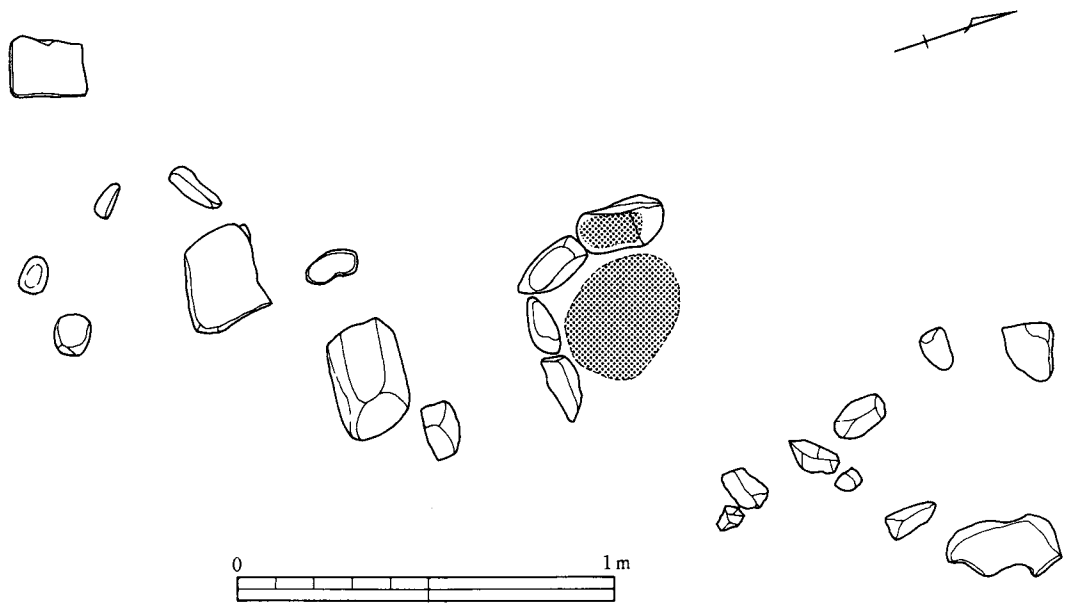
D－4区西側、土坑群から北にやや外れた場所に位置する。覆土の記録は残っていない。確認面は斜面となっており、確認面からみれば、きわめて浅い。ここからは大型の樽形土器（第57図279）が横位に土圧に押し潰された状態で出土している。従って、土坑自体はもっと規模の大きなものであったと考えられる。

34・35号土坑

D－6～E－6ラインに位置する。35号土坑を34号土坑が切っている。図の上方に3基並んでいるピットは、上述の1号住居址の柱穴となる可能性のあるピットであり、左から順に柱穴6・7・8に対応する。なお、遺物は出土していない。



第40図　1号住居址平面図（S＝1／60）



第41図　C－6区炉石等平面図（アミフセは被熱部分）（S＝1／20）

38号土坑

D－6区南側、土坑群の西側縁辺部に位置する。土坑群の中では最も平面積の小さい土坑の一つであるが、肩部より、胴下半を欠く深鉢形土器（第56図278）が逆さの状態で出土している。覆土の記録は残っていない。確認面からはきわめて浅い。これも、33号土坑と同様にもっと規模の大きな土坑であったと思われる。その他出土状態は不明であるが、土器（第50図165・第51図182）・石錘など（第6表参照）が出土している。

43号土坑

C・D－5区北側、D－5杭そばに位置する。覆土の記録は残っていない。確認面からはきわめて浅い。肩部より有文の浅鉢形土器（第56図276）が俯せの状態で出土している。

44・45号土坑

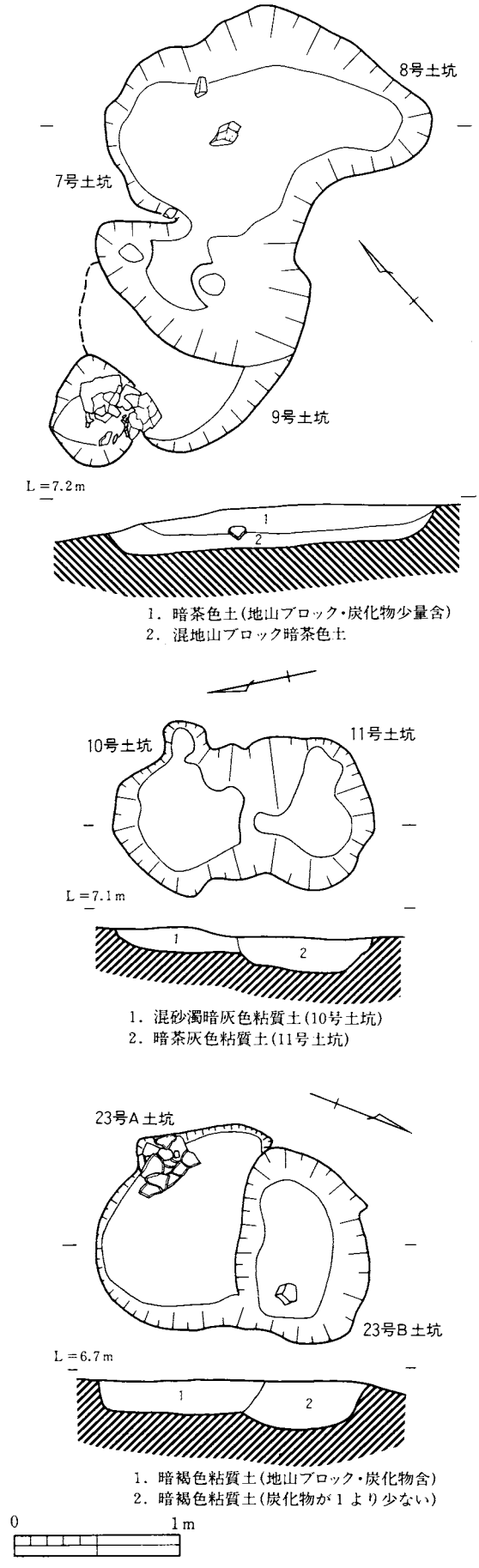
D－5区東側、34・35・43・51号土坑に囲まれる場所に位置する。45号土坑を44号土坑が切っている。45号土坑は確認面から下場までの比高差が約70cmとかなり深い。44号土坑の肩部付近からは口縁部を欠く深鉢形土器（第55図275）、45号土坑からは、出土状態は不明であるが、やはり深鉢形土器（第51図185）が出土している。なお、後者は口縁部を隆帯により加飾しており、43号土坑出土の浅鉢形土器とともに注目される。

51号土坑

D－5区のほぼ中央、44号土坑に隣接する。確認面から下場までの比高差が約40cmと、土坑群の中では深いものである。土坑内にはさらにピット状の掘り込みがあり、この上場付近より硬玉製の大珠（第67図87）が出土している。その他、ツマミ状の突出部をもつ土器（第51図180）も出土している。

53号土坑

C・D－6区、1号住居址の炉に近接する。断面には覆土を掘り込むピットが認められ、第40図の柱穴9も本土坑の覆土を掘り込んでいる。出土状態は



第42図　土坑平面図および断面図（S＝1／40）

不明であるが、土器（第54図270）が出土している。

土坑群のまとめ

土坑群は、①残存部分の多い土器が単体で出土する土坑、②土器片や石器などが出土する土坑に概ね分類することができる。前者については遺物は確実に遺構につくものであろうが、後者については、出土状態にもよるが、埋没あるいは埋め戻し時の混入である可能性がある。

ここで取り上げた土坑は、主な遺物を出土したものであり全体の一部に過ぎないが、特に土器が単体で出土した9・23A・33・38・43・44・45号土坑では、33号土坑と45号土坑を除いては土器が肩部に寄った位置から出土するという共通点が認められる。また土器も逆位または横位であり、残存部分の多い土器に関しては逆位をとる傾向にある。これらの共通性を重視すれば、これらの土器の出土状態は人為的な埋納行為があったことを示すものと推定される。33号土坑に関しては出土した土器の状態や土器自体の大きさ・特異な器形から、土器棺埋葬に伴うものであると考えられるので、上述の土坑群の土器の出土状態も含めて、すべての土坑があてはまらないにせよ、この土坑群は、墓域を形成するものと推定する。

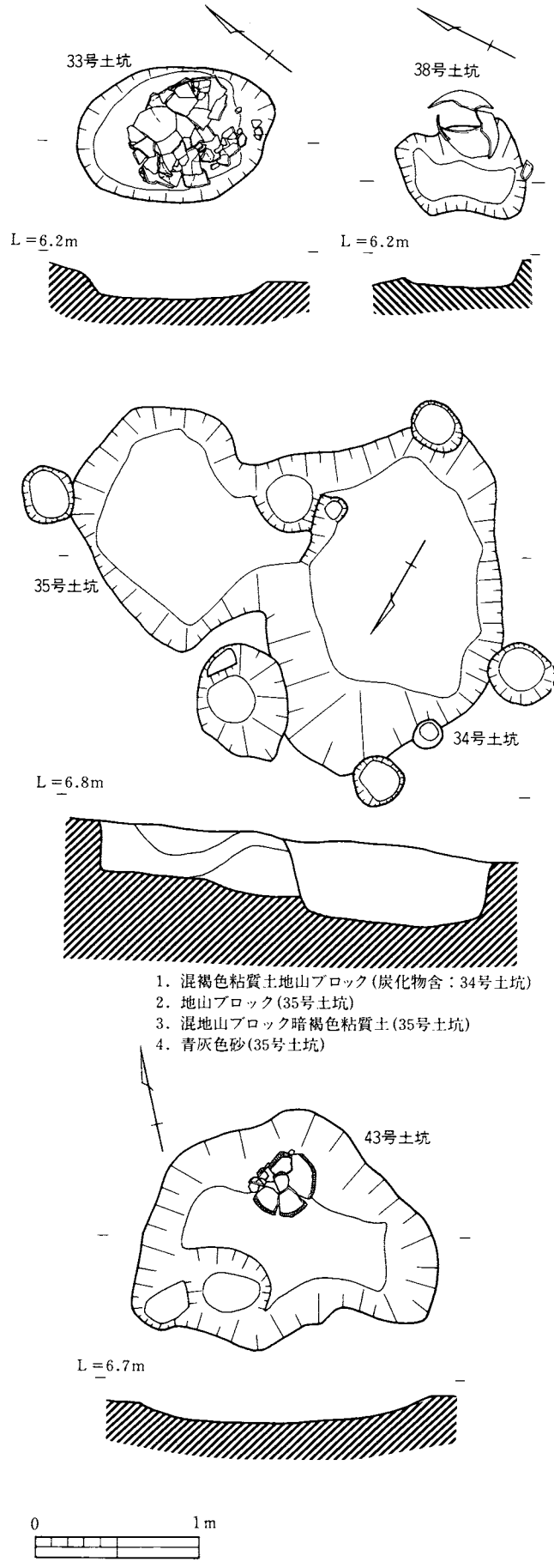
縄文時代の遺物

(1) 土器

1群　刻みを施す明瞭な隆帯をもつ土器群（第45・46図1～29）。

1類a　隆帯を基隆帯とし、半隆起線でなぞるものである（1～3）。2では地文に撚糸文をもつ。3では口縁端部に隆帯を貼付し、口唇部には沈線を施している。隆帯上の刻みは1・2では箆状の原体、3では半截竹管を用いている。

1類b　隆帯を基隆帯とし、半隆起線を代替した平行沈線でなぞるものである（4～7）。5では隆帯が一部剥落しており、単節の縄文を施したあとに隆帯を貼付していることが分かる。加賀市藤ノ木遺



第43図　土坑平面図および断面図（S＝1／40）

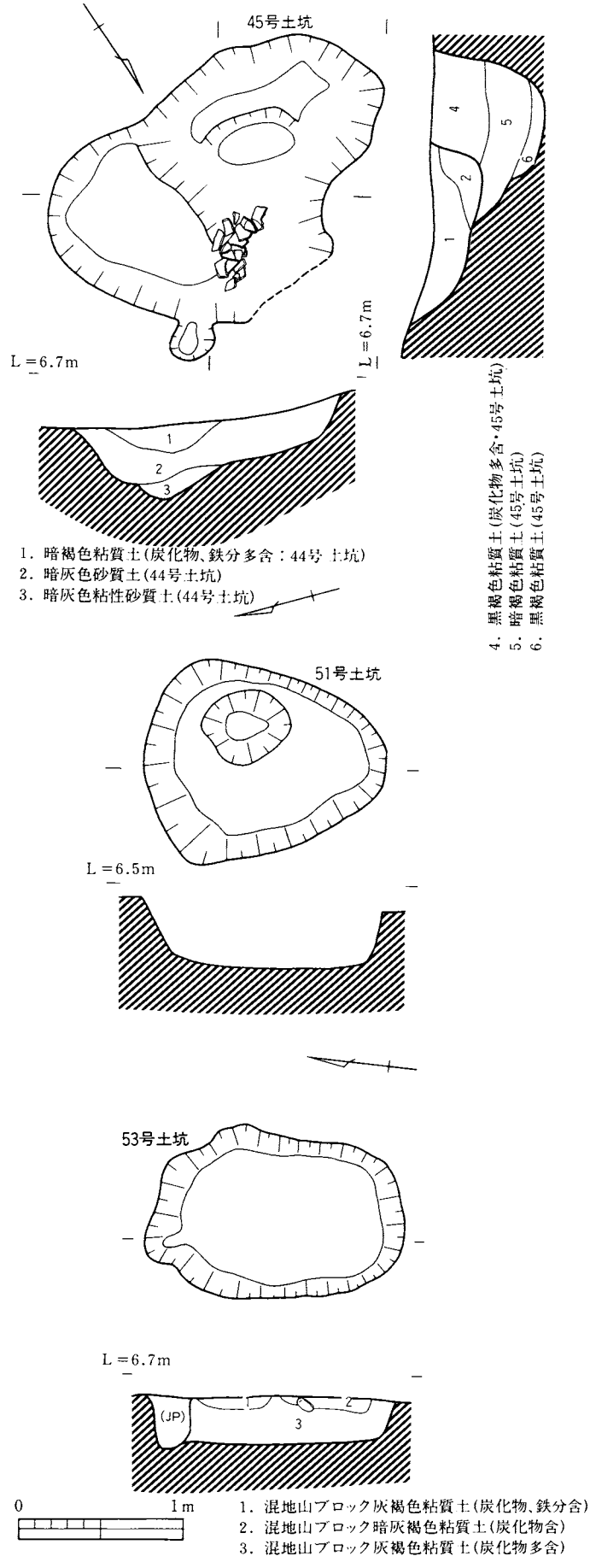
跡Ⅲ群27類などに類例が認められる。隆帯上の刻みは、6・7では半截竹管を用いた爪形文、4では草本茎を用い、5ではおそらく縄文の原体を押しつけていると考えられる。

2類　隆帯で区切った文様帯に沈線文を施すものである（8～10・28・29）。8では長楕円の間に縦線および小渦巻を配するモチーフを描いている。9では縦線を連ね、口縁部の2隆帯を結んで単位化している。28は列点により何らかの単位文様を描き、それを弓なりの沈線で結ぶ構成をとるものと考えられる。隆帯上の刻みは、8では細い半截竹管、9・10・29では箆状の原体、28では草本茎を用いている。

3類　垂下する特に発達した隆帯をもつものである（11～13）。13は隆帯をもたないが、その他の特徴が近似していることから本類に含めた。器形はおそらく脚台の付く鉢形であろう。口縁部は波状を呈し、これに沿って沈線と列点で加飾する。13の隆帯のつかない波頂部には何かの記号のようなものを刻んでいる。地文に撚糸文を施し、隆帯上の刻みは箆状の原体を用いている。

4類　隆帯の装飾が発達するものである（27）。口縁端部の隆帯を波頂部の両端でねじり、そこに別の隆帯を巻きつけたような構成をとる。隆帯上の刻みは箆状の原体を用いているが、非常に浅い。大野市右近次郎遺跡第8群に類例が認められる。

5類　隆帯のみの加飾を行なうものである（14～26）。17・18では地文に単節の縄文を施し、21では撚糸文を施していると考えられる。その他は無文である。隆帯上の刻みは、14では半截竹管を用いた爪形文、19では貝殻が用いられている可能性がある。25は縄文の原体を転がしていると考えられ、厳密には刻みとはいえないが、櫛状の原体を用いて刻んでいるようにもみえるのでここに含めた。その他のものでは箆状あるいは棒状の原体を用いている。また、隆帯は萎小となる傾向が認められる。



第44図　土坑平面図および断面図（S＝1／40）

2群　隆帯をもつものであるが、隆帯上を無文としたり、隆帯が不明瞭となる土器群（第46・47図30～51・第51図185・第56図276）。

1類　渦巻状の隆帯をもつものである（31・276）。31は山形の波頂部であり、隆帯は断面三角形の細隆帯である。地文に無節の縄文を施す。尾口村尾添遺跡第2群eに類例が認められる。276はほぼ完形で出土した浅鉢形土器である。口縁部は緩い波状を呈し、橋状の把手のつく山も橋状にしている。文様帯は垂下する渦状の低い隆帯を中央に配し、その両側に末端で蕨手状に渦を巻く沈線文に縦沈線を連ねる充填文を施す。把手にS字状文をもつ。

2類　隆帯による区画文をもつものである（46～48）。46では、周囲を彫り込むことにより作り出した隆帯の区画内に櫛状刺突文を充填している。単位文様として同様の隆帯による逆「の」字文を施すものと推定される。このタイプの土器は類例が多い。47も同様のものと考えられるが、隆帯上にも櫛状刺突文を施している。48は、複合口縁の鉢形土器であり、脚台がつく可能性もある。長方形に区画する隆帯は雑であるが、高さをもっている。区画内には無節の縄文を充填し、沈線で長方形区画文を描く。

3類　隆帯を伴う文様帯に沈線文を施すものである（30・50・51）。30では口唇部に突出をもち、ごく浅い沈線を施し、口縁部文様帯には横位の破線文を施す。50・51は縦沈線を連ねている。

4類　特異な隆帯をもつものである（49）。器形は浅鉢形か鉢形となると考えられる。隆帯は屈曲部につけられ、鍔状に近い断面形態である。隆帯間は草本茎を用いた沈線をめぐらせ、上方の隆帯の基部には同様の原体を用いた刺突をめぐらす。

5類　隆帯のみの加飾を行なうものである（32～45・185）。36～44では隆帯上を箆状あるいは棒状の原体で刻みを施しているが、隆帯自体はきわめて萎小である。185は口縁部が開く深鉢形土器であり、口縁部に貼付した弓なりの隆帯により突出を作り出している。

3群　隆帯をもたず、沈線文を施す土器群（第47図52～82・第51図186・第55図273・274）。

1類　口縁部の区画内に、縦あるいは斜めの沈線を充填するものである（52～57・273）。273では長楕円の区画内に右傾した斜線を引き並べるが、部分的に左傾する箇所や横線の入る箇所がある。

2類　大きく蛇行する沈線文や二沈線間に列点を施すものである（58～65）。58では沈線文の間に列点帯を配する。60では口縁部が外反し、緩い双頭波状様の口縁となるようである。64では二沈線間に二条の列点帯を施す。

3類　その他の沈線文をもつものである（66～68・73）。66は円形の圧痕を弧線で挟む構図をとり、67・73は波状口縁に沿った沈線を基調にした文様を施すものと考えられる。68は縦位に鋸歯状の沈線文を施す。

4類　平行沈線あるいは列点のみを施すものである（69～72・74～82・186・274）。70は凹線を施す例であり、71・72・186は破線文を施す例である。特に186では破線内に先端の鋭利な原体を斜めに当てて刺突を行なっている点に留意しておきたい。沈線内に刺突を施す例としては、他に81・82がある。

4群　葉脈状文あるいは矢羽根状沈線文といった名称で呼ばれる文様を特徴的にもつ土器群（第48・49図83～145）。

1類a　区画文内に刺突を充填するものである（83～87）。87は波頂部に円錐形の凹みを作っている。

1類b　区画文内に矢羽根状沈線文を充填するものである（88～96）。95の胴部の器形は、串田新式の波状口縁深鉢に特徴的に認められる器形と共通し、区画文の施文位置も胴部の下方であり、この種の文様をも

つ土器では特殊なものといえる。93・94では隆帯上を篦状の原体で刻んでいる。

1類c　区画文内を無文とするものである（97～110）。98～103では区画帯を刺突でなぞっている。また109では拓影の右隅に穿孔を行なっているのが認められる。104・105では隆帯上を篦状の原体で刻んでいる。

2類　口縁部に矢羽根状沈線文帯をもつものである（111～115）。

3類　矢羽根状沈線文をもつものを一括した（116～138）。137は脚部と考えられる。118・119は地文に単節の縄文を施しており、原体はいずれも縦位に転がしている。126では主脈に蛇行沈線をもつ。

4類　区画帯を刺突でなぞるものを一括した（139～145）。刺突は先端の丸い棒状の原体を用いて垂直に行なっている点であり、1類cと共通している。

5群　その他の有文土器を一括した（第50・51図146～184・187～194）。

146・147は斜位あるいは縦位に列点文を施している。

148～150は半截竹管の押し引き施文が行なわれている。

151～156は単節の縄文を地文にして沈線文を施している。原体の撚りの方向はいずれもＲＬであり、縦位あるいは斜位に転がしている。

157～166は磨消縄文を施す土器である。外来の特徴をもつ土器であり、加曽利Ｅ式後半から称名寺Ｉ式に併行する時期に比定できると考えられる。

167は半截竹管の背で押し引き施文を行なっている。これも外来の特徴をもつ土器であり、咲畑式系と考えられる。

168～170は半隆起線文と撚糸文をもち、1群1類aに伴うものと考えられる。

172は縦位に縄の圧痕をもつものであり、金沢市古府遺跡、白峰村東島遺跡、尾口村尾添遺跡第1群d、加賀市藤ノ木遺跡Ⅲ群15類Ｄに同様の手法をもつものが認められ、古府式の範疇で考えられている。

173は波頂部に斜格子状の沈線文を施し、中央を刺突している。

175は強い指ナデ痕の両端を篦状の原体を用いて刻んでいる。

178は櫛状の原体を用いて蛇行文を施している。

179はコブ状の貼付文をもつ。

180はツマミ状の突出部をもつ。

187～191は脚部、192～194は橋状の把手の破片である。

6群　無文土器を一括した（第52～54図195～272・第55図275・第56・57図277～279）。

1類　口唇部を刻まないものである（195～240・252～255・265・278）。地文を施さず、無文となるものが量的には主体を占め、縄文を施すものや条痕を施すものは少量である。器形は、深鉢では口縁部が直口するもの、外傾して立ち上がるもの、頚部でくびれて外反するものの三タイプを識別できる。265のような有段口縁のタイプは稀な類である。浅鉢形のものも少量認められる（215・254）。口縁部は、肉厚でしっかりした作りのものと先細りになるものの大きく二タイプを識別できる。

2類　口唇部を刻むものである（241～251・264・277）。刻みは指で行なうものと篦状の原体を用いて行なうものがある。器形は、277のような外反口縁のタイプが主体となると考えられる。各種地文の出現頻度は1類に準ずると見込まれる。

3類　波状口縁のものである（256～263）。緩い波状を呈するものが主体となると考えられる。259では口

唇部を極端に広くとり、凹線を施している。260は突起をもつ。

その他の口縁部を欠くものでは、272に木目状撚糸文が認められ、朝日下層式から新保式に比定されよう。266は縄文を磨り消すことにより、文様を描出している可能性がある。279は大型の樽形の土器であり、全面に撚糸文を施している。

底部（第58～61図）

1類a　平底の底部から外傾して胴部が立ち上がるもののうち、底縁の真上あるいは外側から粘土を積み上げていくタイプのものである（275・276・280～304・312～317）。底部は、前者では外方向にせり出し、後者では垂直に立ち上がる傾向がある。底部圧痕には網代圧痕が顕著であり、1本越え1本潜り1本送り（275・280・285・287・288・290・291・298～301・ 304）と2本越え2本潜り1本送り（281・286・294）の2種類が認められる。その他に条線のつくものも認められるが（282・292）、282を見る限りでは圧痕であると考えられる。

1類b　平底の底部から外傾して胴部が立ち上がるもののうち、底縁よりやや外側にずれた位置から粘土を積み上げていくと考えられるタイプのものである（273・305～311）。底部圧痕には網代圧痕が認められ、1本越え1本潜り1本送り（273・306・308～310）、2本越え2本潜り1本送り（305）の2種類である。なお、310の内面には赤色顔料の付着が認められる。

2類　平底の底部から直立して胴部が立ち上がるものである（95・318～324）。底部圧痕は、95に木の葉圧痕が、322に網代圧痕が認められる。なお後者については編み方は不明である。

3類　丸底を呈するものである（325）。

土器のまとめ

1群と2群は隆帯加飾の土器群である。中期後半段階のものが主体を占めると考えられるものであり、古手のものとしては1群1類・4類が古府式に比定される。2群2類に含めた46は、古串田新式に代表的な浅鉢であり、北陸の広い範囲に斉一性の強い土器である。1群2類の6に認められる沈線文は串田新式の工字状文に系譜を求めることができる。1群と2群の5類は隆帯で器面を割り付けるものであり、中期後葉段階に位置付けられる土器群である。串田新式に組成する土器の中にこれに類似するタイプのものが認められるのに対し、大杉谷式に組成する土器には認められないようである。また、加曽利E式の微隆起線文土器に類縁性を認めるものも含むが、胎土を見る限りではすべて在地で製作されたものと考える。2群1類に含めた276は、器形的には北陸の中期中葉段階では通有の器形であるが、文様構成には在地的は要素は不明瞭であり、むしろ曽利Ⅱ～Ⅲ式系の土器に類縁性が認められるのではないかと考える。

3群は沈線文加飾の土器群である。中期末葉から後期初頭段階のものが主体を占めると考えられる。1類に含めた60の口縁部の形態は串田新Ⅱ式との関連性も留意される。

4群は概ね大杉谷式に比定される土器群であり、中期後葉段階に位置付けられる。本遺跡では量的に主体を占める土器群である。細片資料が大部分であるために様相は把握しかねるが、区画文様が口縁部と一体化するような古相を示すものは少数であり、新相を示すものが顕著である。本遺跡の所在する位置は大杉谷式の分布圏の縁辺に当たるためか、隣接地域の土器の影響を受けて変容している例も認められ、1類bに含めた95のような資料は串田新式の器形の影響を受けている可能性がある。

5群については、様相不明の土器群が中心であるので省略する。

6群は文様を施さない、粗製土器の範疇で理解される土器群である。地文をもたないものが主体を占め、縄文・撚糸文をもつものがこれに次ぐ。器形的には直口あるいは外傾口縁のものが主体であり、頚部がくびれるようなものは少量にとどまる。口唇部も素縁となるものが主体であり、刻みなどの口唇加飾を施すものは少量である。時期的には1～4群に見るように、中期後葉を中心とする時期に比定される。従って、直口あるいは外傾口縁であって地文をもたず、口唇部に加飾を施さないものは最も多量であり、この時期の粗製土器はきわめて単純な作りであったと考えられる。大野市右近次郎遺跡において大杉谷式に伴う粗製土器では、通有の特徴として口唇部の刻みが指摘されているが、本遺跡ではあまり行なわれない手法ではあるが、共通する特徴を示す。

(2) 土製品（第61図326～331）

326・327は蓋形土器の鈕部のように見えるものであるが、逆さに見ると袖珍土器のようなものかもしれない。隣接する中海遺跡に同類と考えられるものがあるが、それによれば、後者の可能性が高い。

328・329は小型のスタンプ形土製品である。いずれのものも円形の平坦面に粗い沈線の渦巻を描く。

330は袋形を呈する土製品である。

331は表面に刺突を施す何等かの土製品の破片である。

(3) 石器

石槍・石鏃（第62図1～19）

1は木の葉形の石槍、もしくは尖基鏃であり、その他は茎をもたない石鏃である。石鏃の基部の形態は、3～5は平基、その他は凹基であるが、2・6・7は基部の抉りが弱く、19は基部が鋭く抉られるといったバリエーションがある。鏃身の平面形態も細身のものからズングリしたものまで様々であり、特に大型のものでは調整剥離が丁寧に施されている。なお、1・3～10・13～15は流紋岩製であり、この石材は器種を問わず最も多い。

石匙（第62図20・21）

いずれも横形である。20は鈕部を丁寧に作り出し、体部の調整も行き届いているが、21では鈕部が辛うじて識別されるのみであり、破損した痕跡も確認できないことから、果たして石匙と見做してよいものかは判断しかねる。

石錐（第63図22）

流紋岩製であり、錐部が短く不明瞭である。しかしながら調整は先端部を意識していると考えられる。

スクレイパー（削器・掻器）・その他の剥片（第63図23～34）

23は凝灰岩製であり、縁辺に刃部を作り出し、両刃である。24・27はともに流紋岩の大型剥片を利用したものと考えられ、刃として機能したと考えられる部分は片刃であり、細かな剥落が認められる。25・26・28～30は同様に細かな剥落が認められる剥片であり、これらが使用痕であるとすれば、掻器として用いたものと考えられる。したがって、観察表では一応、掻器として扱った。

31は黒色頁岩の大型剥片であり、縁辺に二次加工を意図したものと考えられる剥離が顕著であるが、刃を作り出したわけでもなく、道具として用いたものかどうかは不明である。32～34は使用痕と考えられる剥落が認められなかった剥片であるが、形状から判断して、掻器としての機能は十分果たすことができるものと考える。

磨製石斧（第64図35～39）

すべて定角式であり、刃部は両刃である。39が流紋岩質凝灰岩製である他はすべて流紋岩製である。大小を問わず斧身に相対的な厚みはなく、刃部は広がらない。また、刃部の損傷は激しく、38でわすかに刃縁が残存する以外は刃部の殆どが失われており、軟質の石材を用いた39では基部で折れている。

打製石斧（第64・65図40～55）

40～50が短冊形、51～54がバチ形、55が分銅形であり、短冊形が多数を占める。石材の中心は流紋岩であるが、その中でも、明色を呈する軟質のものから暗色を呈する硬質のものまでバリエーションが認められる。その他の石材としては、安山岩（40・54）、頁岩（42）、砂岩（50）がある。斧身は相対的に厚いものと薄いものの二者があり、後者は大型剥片の縁辺に調整を加えただけの簡便なものである。なお、49・50は火熱を受けている。

磨石類（第65・66図56～70）

自然礫を利用した磨石・叩石・凹石を、三者の使用痕が同居することから磨石類として一括して扱う。利用する自然礫は、偏平なものと球形に近いものの二者があり、前者は磨石・叩石・凹石であり、後者は磨石・叩石であって凹石には利用されない。石材としては流紋岩が大多数を占め、その他目立つものとしては、赤味を帯びた角閃石安山岩（56・66・69）がある。

石皿（第67図78・79）

いずれも破片であり、全形を知ることはできないが、かなりの大型になると考えられる。共によく似た形態であることから、かなりの規格性をもっていると考えられる。石材は78が凝灰岩、79が流紋岩であり、共に軟質である。

石錘（第66図71～76）

76は、自然礫の二箇所に切込みを入れた、いわゆる切目石錘に分類されるものであり、その他は、二箇所を打ち欠いただけのいわゆる礫石錘である。石材は、前者が安山岩、後者が流紋岩である。礫自体は整形のための加工を受けていないが、71に関しては半截されている可能性がある。

石核（第67図80～84）

これらは大きな剥離が認められるものであり、特に加工した痕跡が認められないことから、ここから剥片と取ったものと見做して石核と判断した。80は凝灰岩、82は鉄石英、84は珪質頁岩であり、その他は流紋岩である。

（4）石製品

石冠（第66図77）

凝灰岩製の石製品であり、形態としては三角壔形土製品に近似する。境A遺跡において石冠11類とされたものと同類と見做して石冠として分類した。

玉類（第67図85～87）

85は断面形が略長方形の管玉様の玉であり、両方向から穿孔を行なっている。黒色頁岩製である。87は硬玉製の大珠であるが、形態は不整形であるようであり、原石をそのまま磨いたものであると考えられる。穿孔は一方向から行なっている。86は勾玉様の形態をしているが、穿孔がなく、玉類であるかどうかは不明である。

小結

縄文時代の遺構に関しては、１号住居址に伴う柱穴と土坑との切りあい関係から、大きく二時期に分けることができる。すなわち、墓域を形成する時期と居住域を形成する時期である。この両者の間には一定の断絶期が存在したものと推定されるが、それらを土器の検討からは明確にすることができなかった。ただ、土器の様相は１・２群と４群の間には系統性は見出せないので、しいていえばここに断絶期を求めたいのであるが、１・２群に関しては編年的な位置付けは必ずしも明確ではなく、しかも、１号住居址の炉内から出土した土器は１群１類ｂに属するもので本遺跡では最も古い時期のものであり、その他には時期の分かる遺物の出土はないため、住居址の時期は確定しかねる。

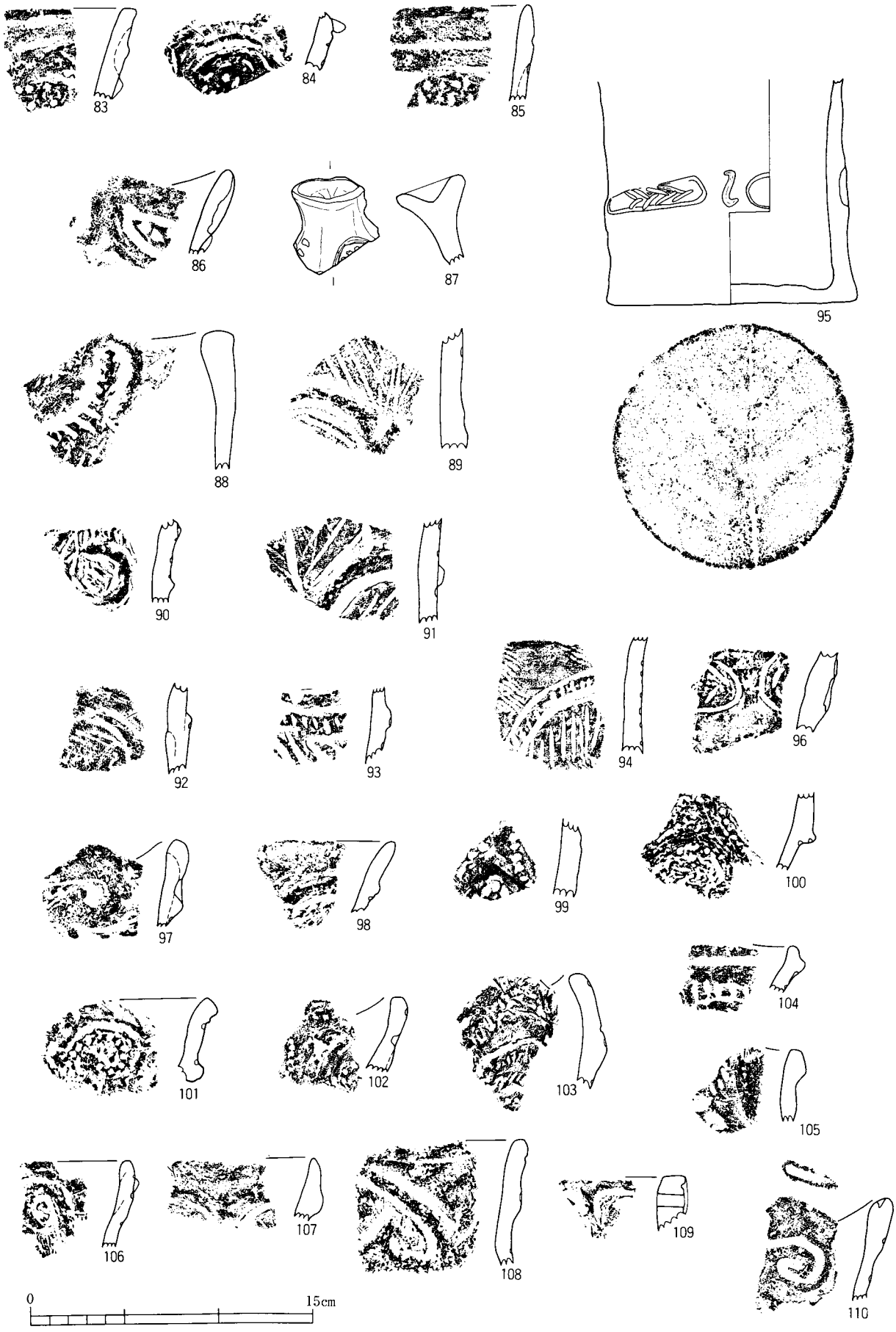
本遺跡の土器はその大半が包含層出土である。縄文時代の遺構確認面は斜面となっているが、特に土器の出土した土坑では、検出段階では土器が露出していることから、土坑の掘り込み面はもっと高いレベルに存在したものと考えられる。本遺跡の立地する場所は自然の浸食・堆積の著しい場所であったと考えられることから、自然の浸食作用により削平された可能性がある。無論、後世の耕作活動などの様な人為的な削平の影響も考えられる。包含層出土の土器が多いことも、このような削平の結果であると捉らえることも可能であろう。また、遺構出土の土器も主なものは単体で出土しており、しかも無文土器であることから、組成を捉らえることも時期を確定することも容易ではない。しかしながら、43・45号土坑から出土した土器をてがかりとするならば、曽利Ⅱ～Ⅲ式に併行する段階が土坑群すなわち墓域の形成された時期、すなわち古府式～古串田新式の時期である可能性が高く、一定の断絶期をへたのち、中期末あるいは後期初頭頃までが居住域の形成された時期と考えたい。ただ、ある時間幅をもった断絶期を認めることについては、出土遺物からは必ずしも認められず、墓域と考えられる場所に住居を営んでることを考慮した上での解釈である。

また、少なくとも丘陵裾に沿った限られた場所に遺構が集中していることは事実として確実であり、この点に注意すると、あまり年間を通じて生活をする場所としてふさわしいとはいえない。従って、拠点的な集落は別の場所にあり、本遺跡は、集落から離れた場所に営まれた共同墓地であり、居住施設を伴う生業活動の拠点であったと考えられる。後者の場合は、立地的に川に近い場所であり、水上交通の便のよい場所であったことが考えられるので、交易活動や漁労活動の拠点となり得たであろう。ただし、石器の組成を考慮すると、狩猟・採集活動に関係するものも少なくないので、恐らくは、多目的な活動拠点であったと考えられる。

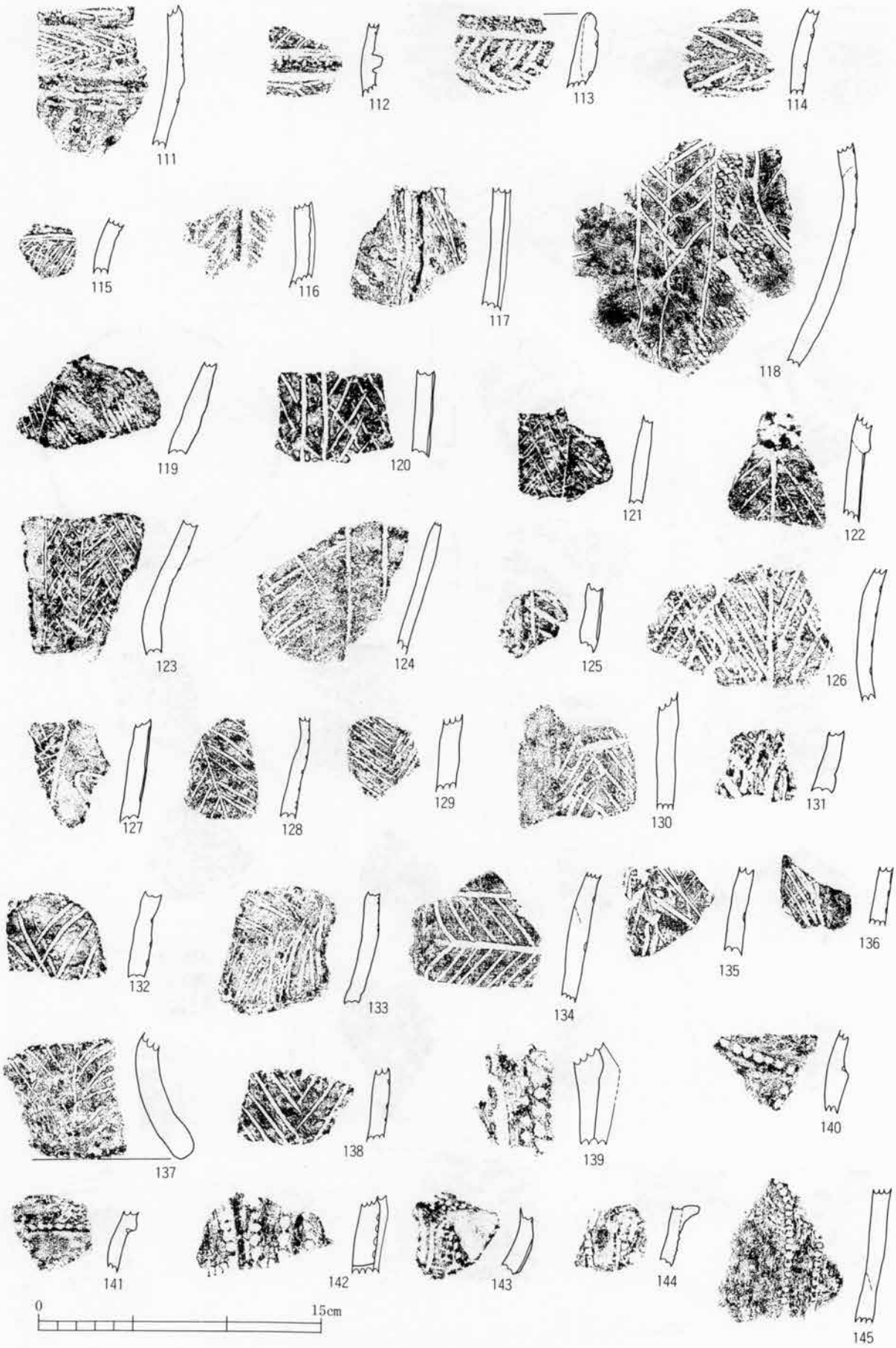
第45図　1群 縄文土器（S＝1／3）

第46図　1群（28・29）・2群（30～49）縄文土器（S＝1／3）

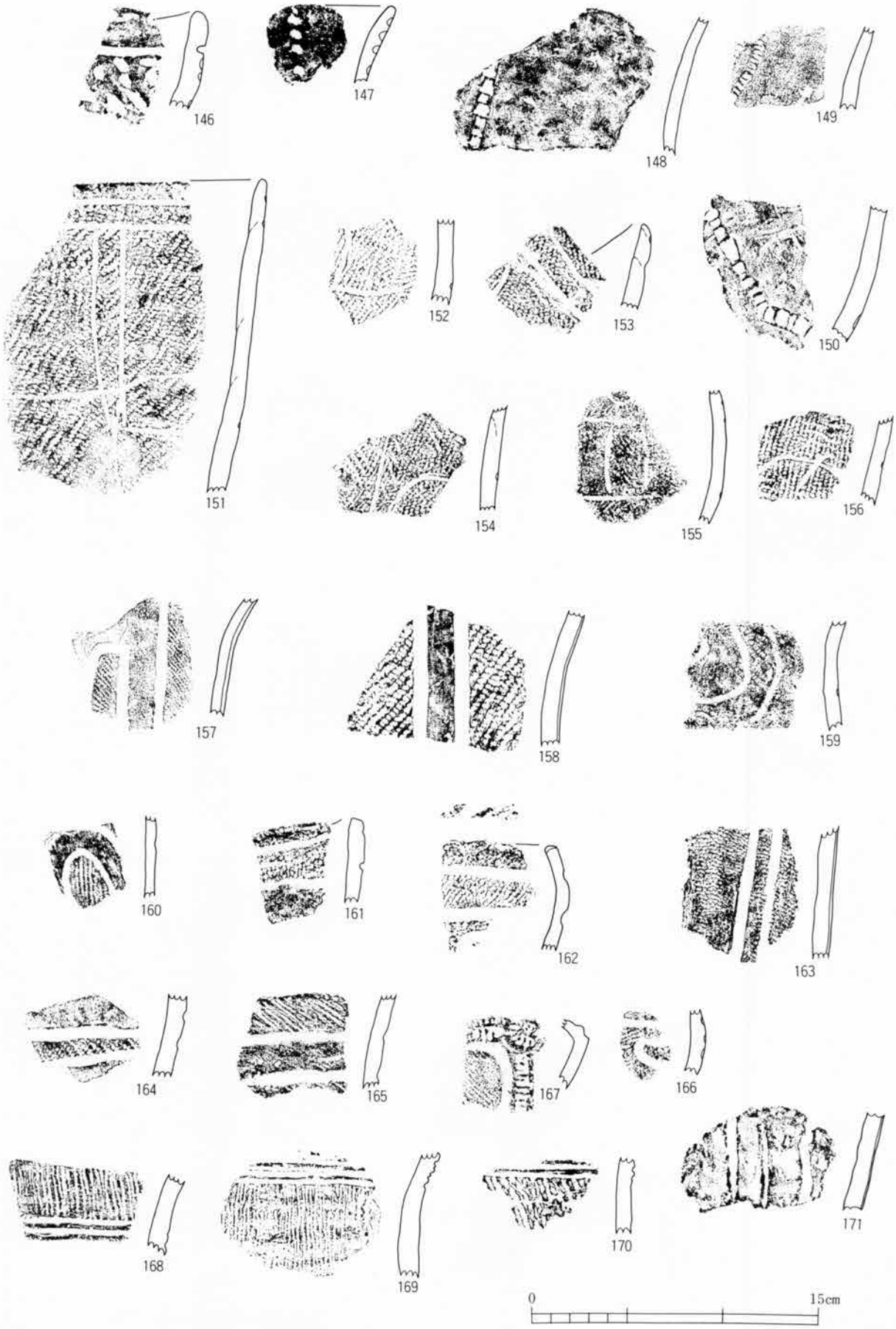
第47図　2群（50・51）・3群（52～82）縄文土器（S＝1／3）



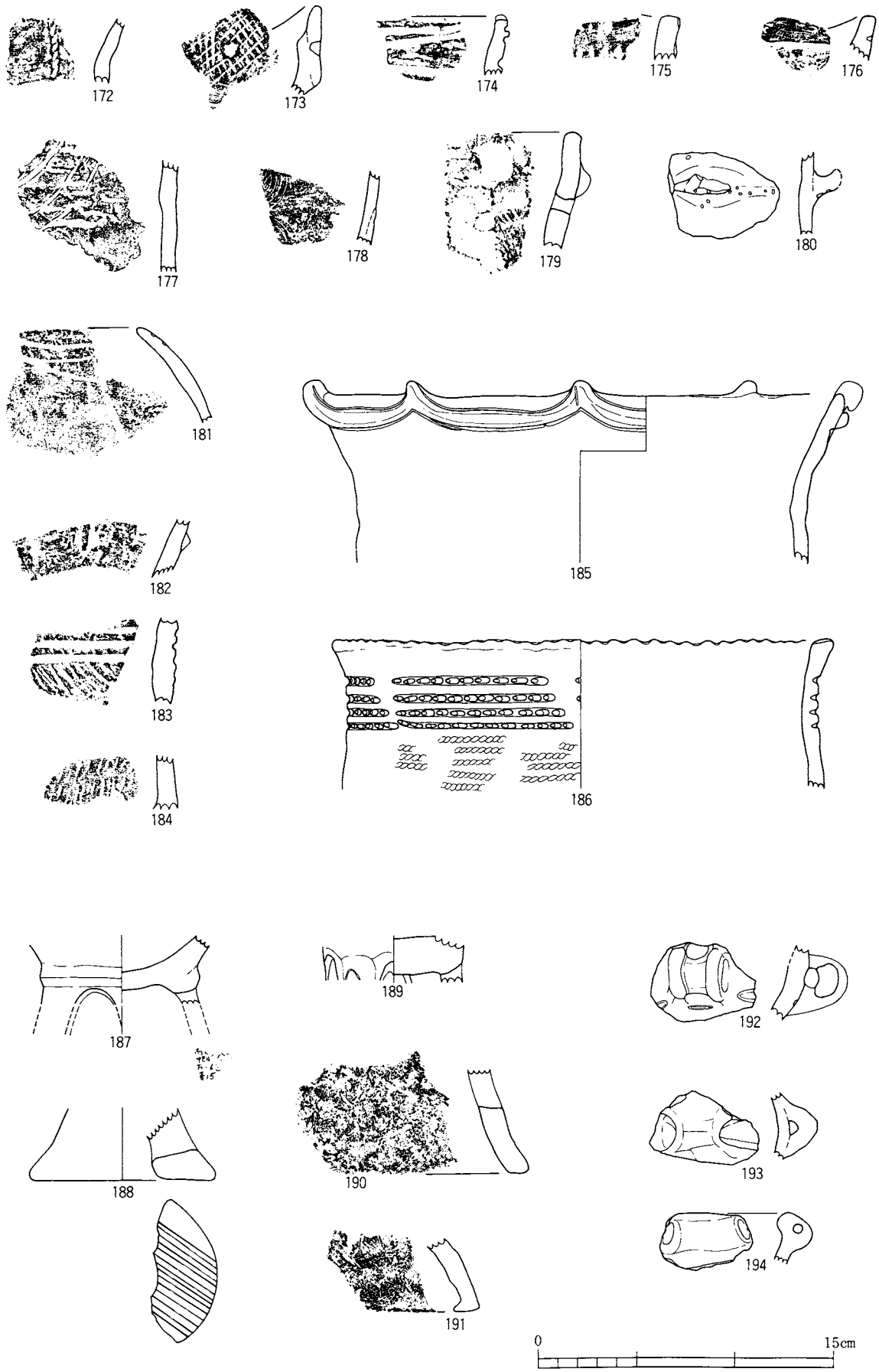
第48図　4群 縄文土器（S＝1／3）



第49図　4群 縄文土器（S＝1／3）

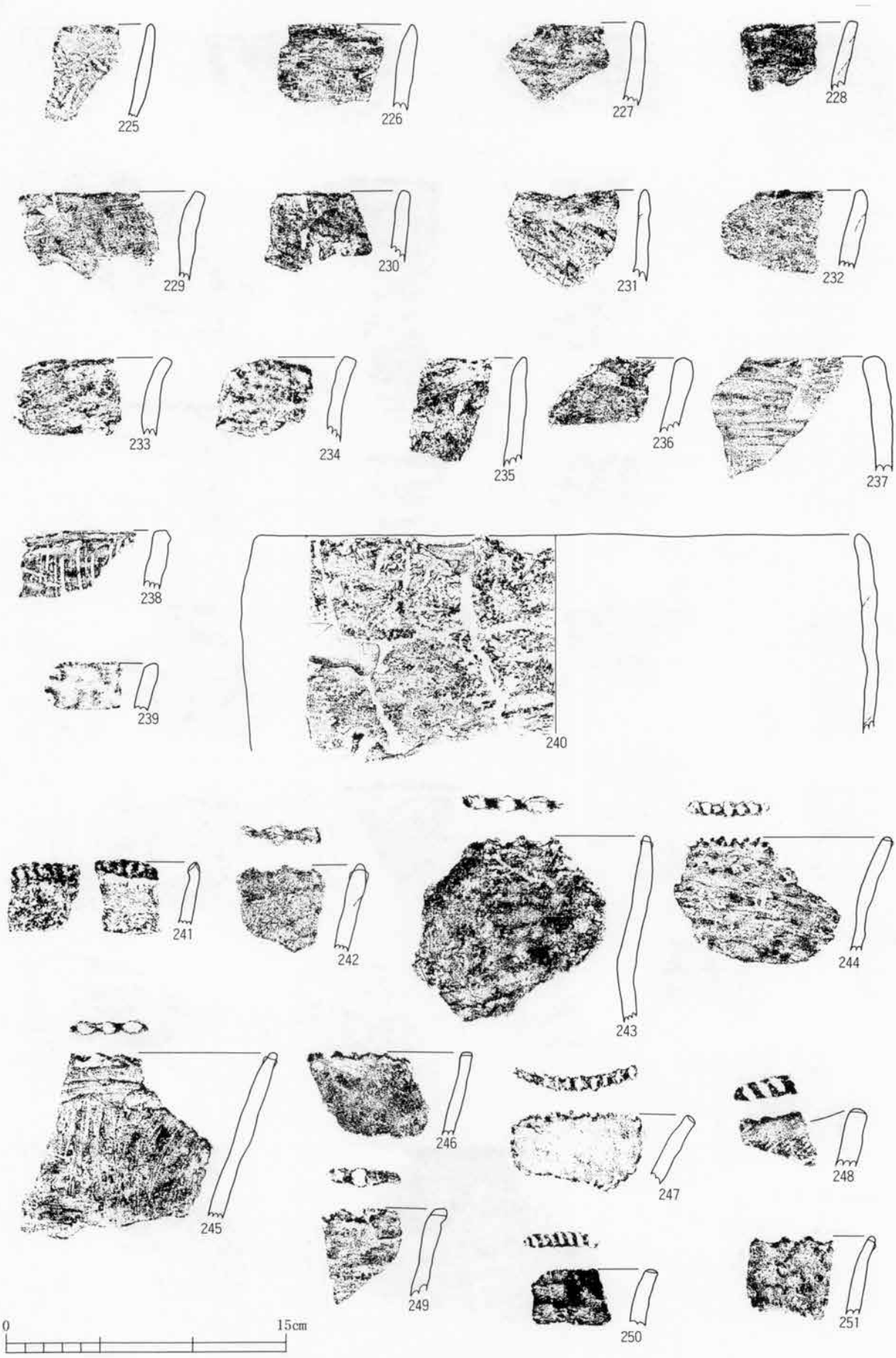


第50図　5群 縄文土器（S＝1／3）

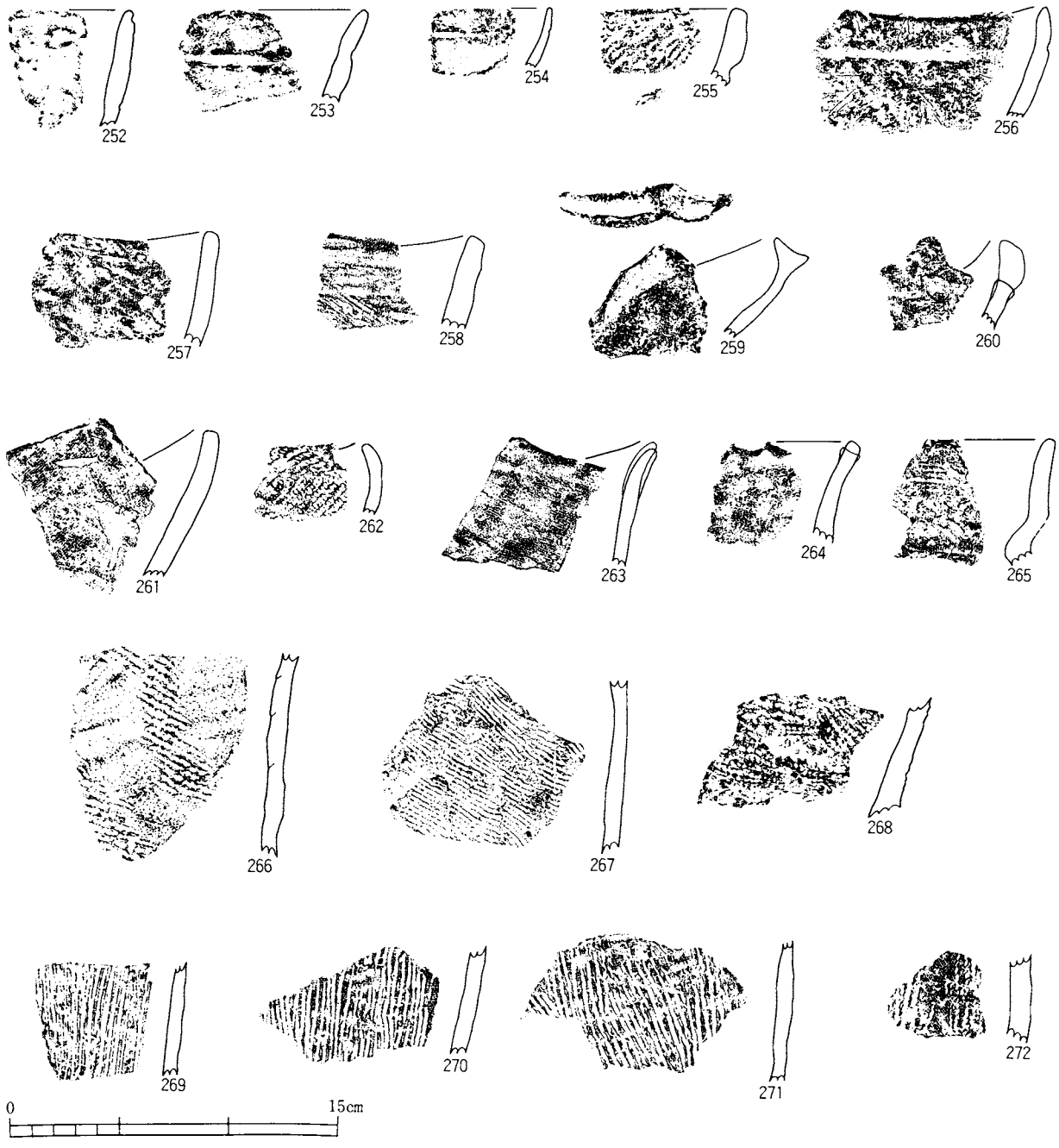


第51図　2群（185）・3群（186）・5群（172～184）他 縄文土器（S＝1／3）

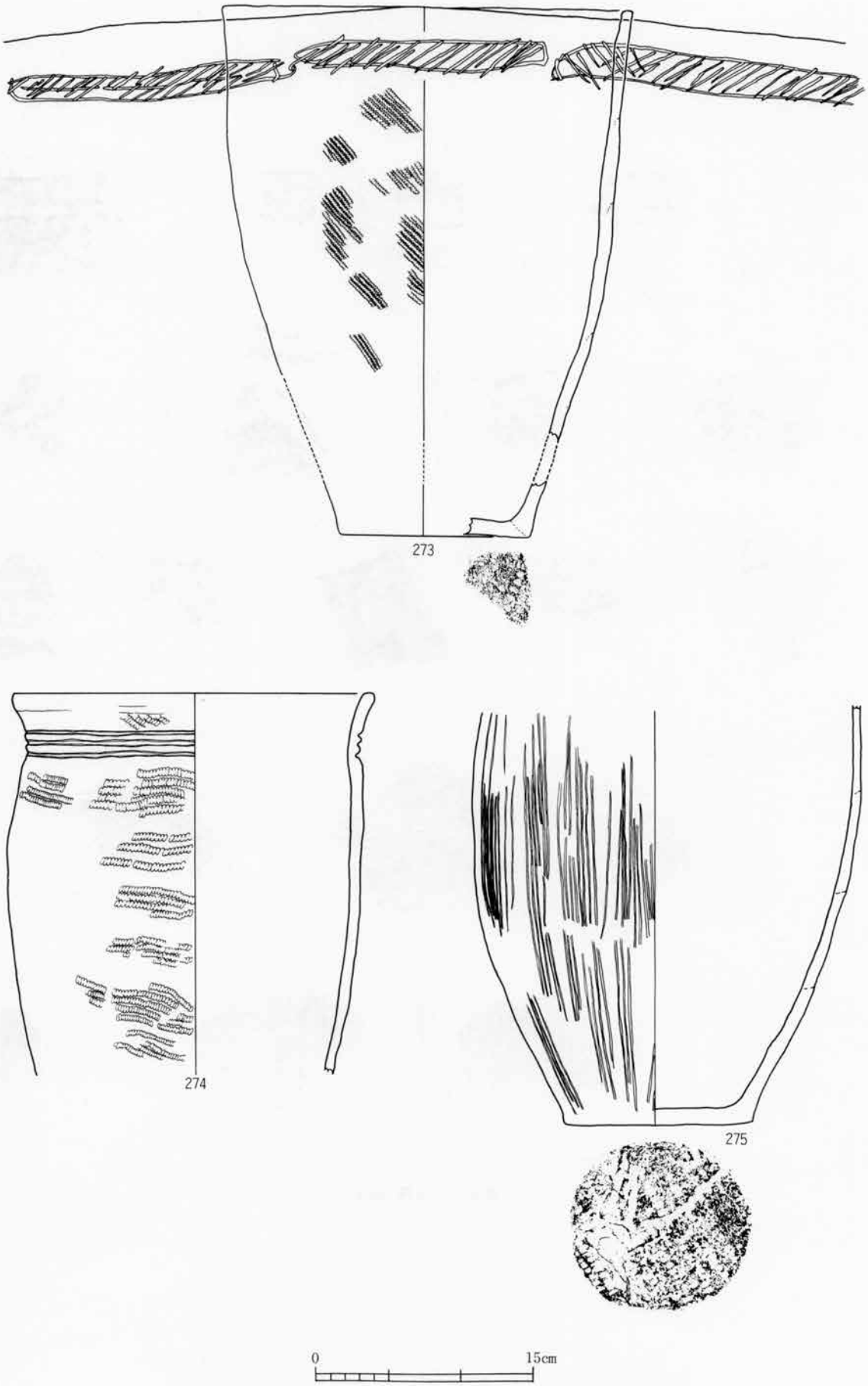
第52図　6群　縄文土器（S＝1／3）



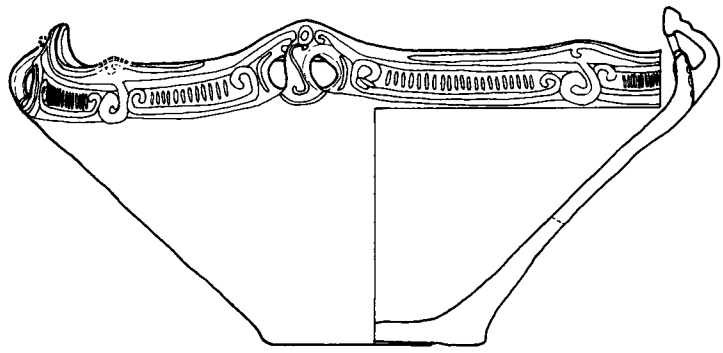
第53図　6群 縄文土器（S＝1／3）



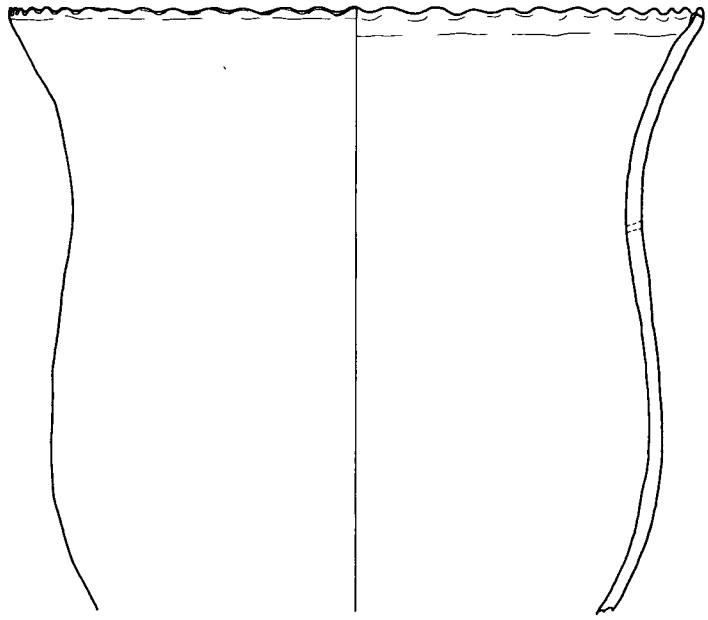
第54図　6群 縄文土器（1／3）



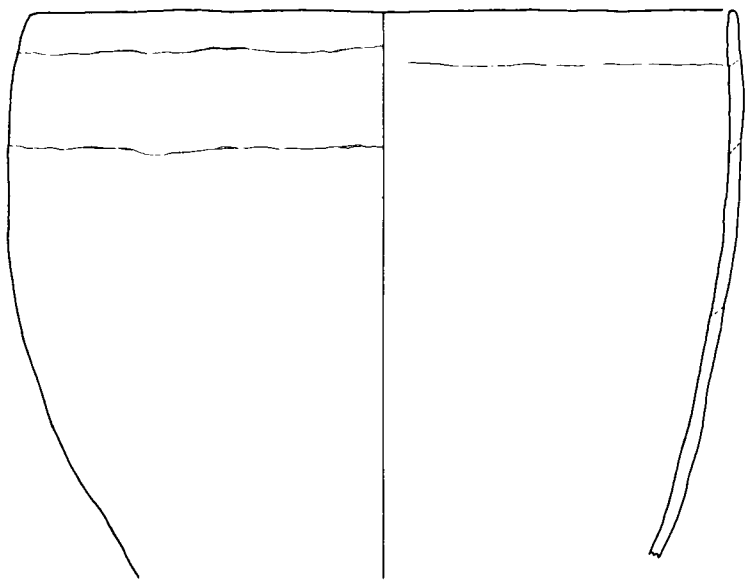
第55図　3群（273・274）・6群（275）縄文土器（S＝1／4）



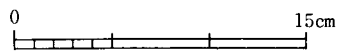
276



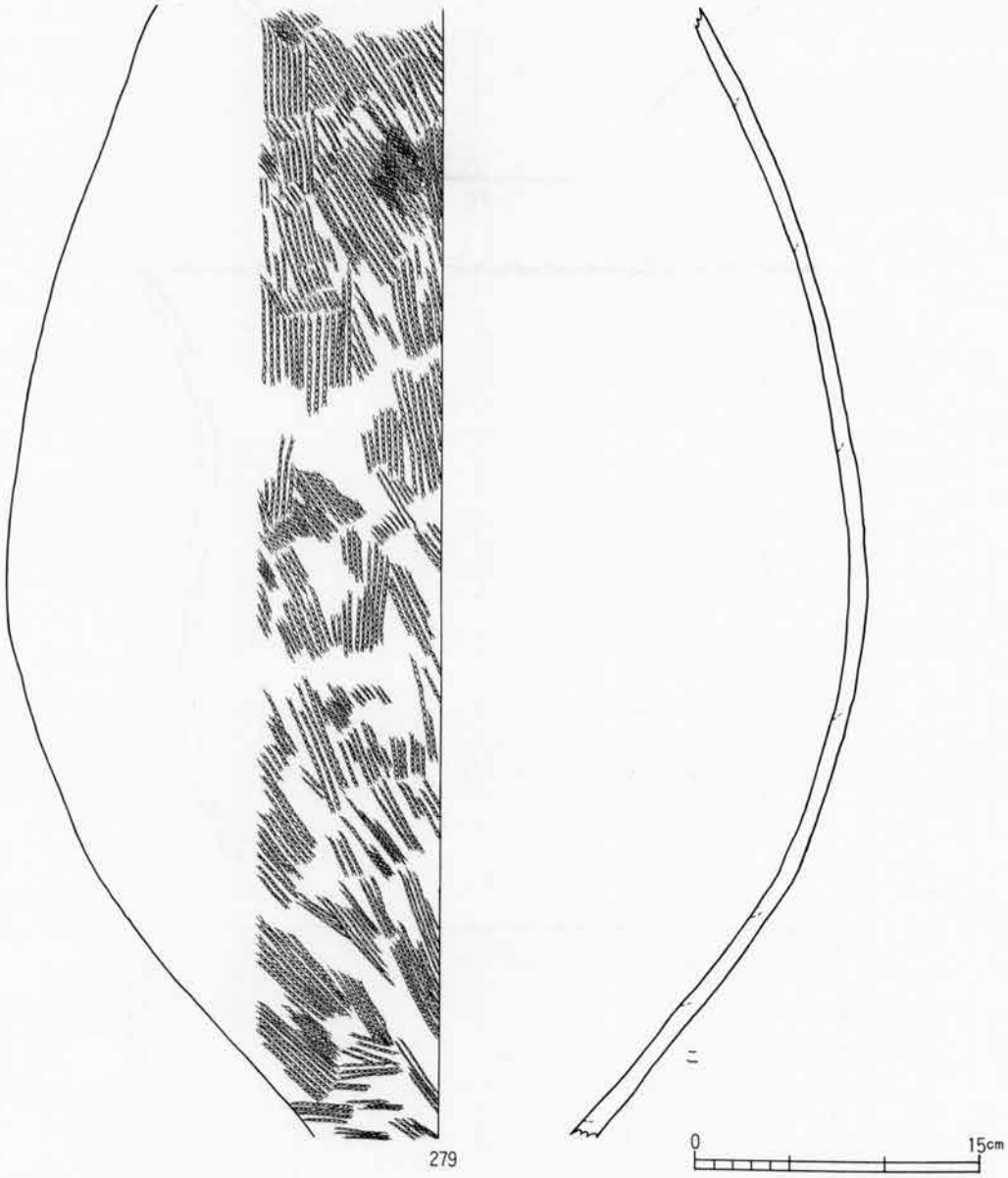
277



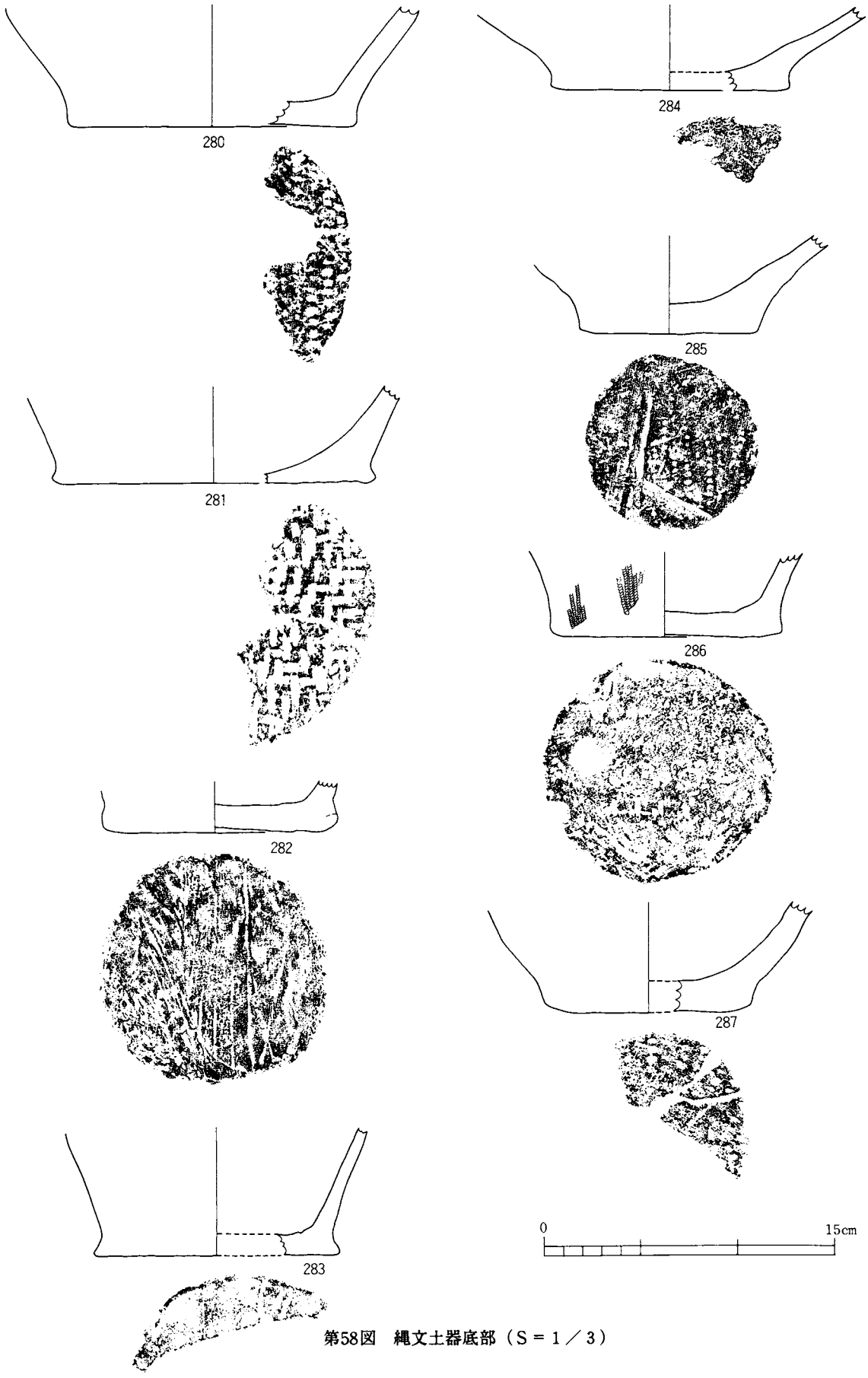
278



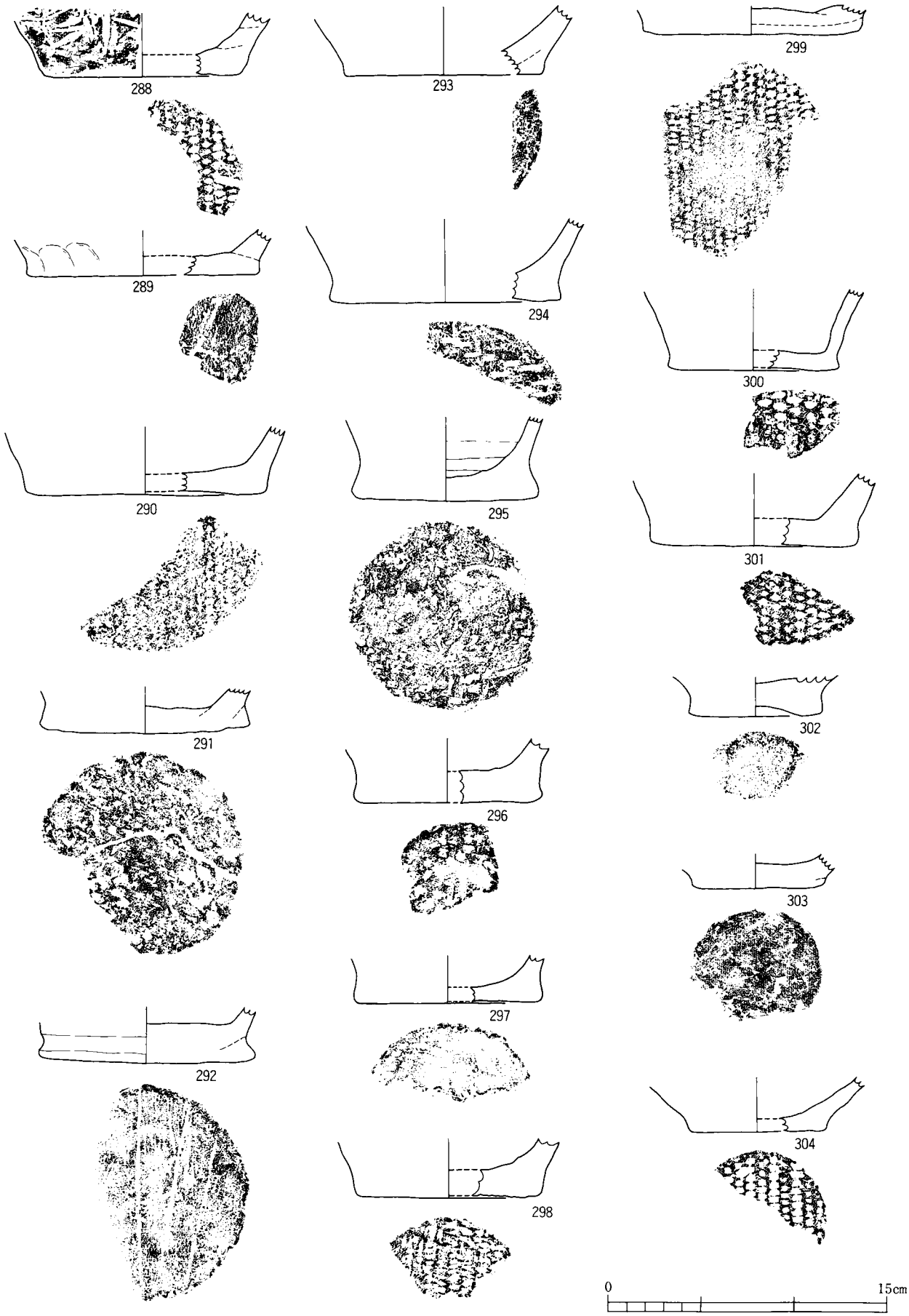
第56図　2群（276）・6群（227・278）縄文土器（S＝1／4）



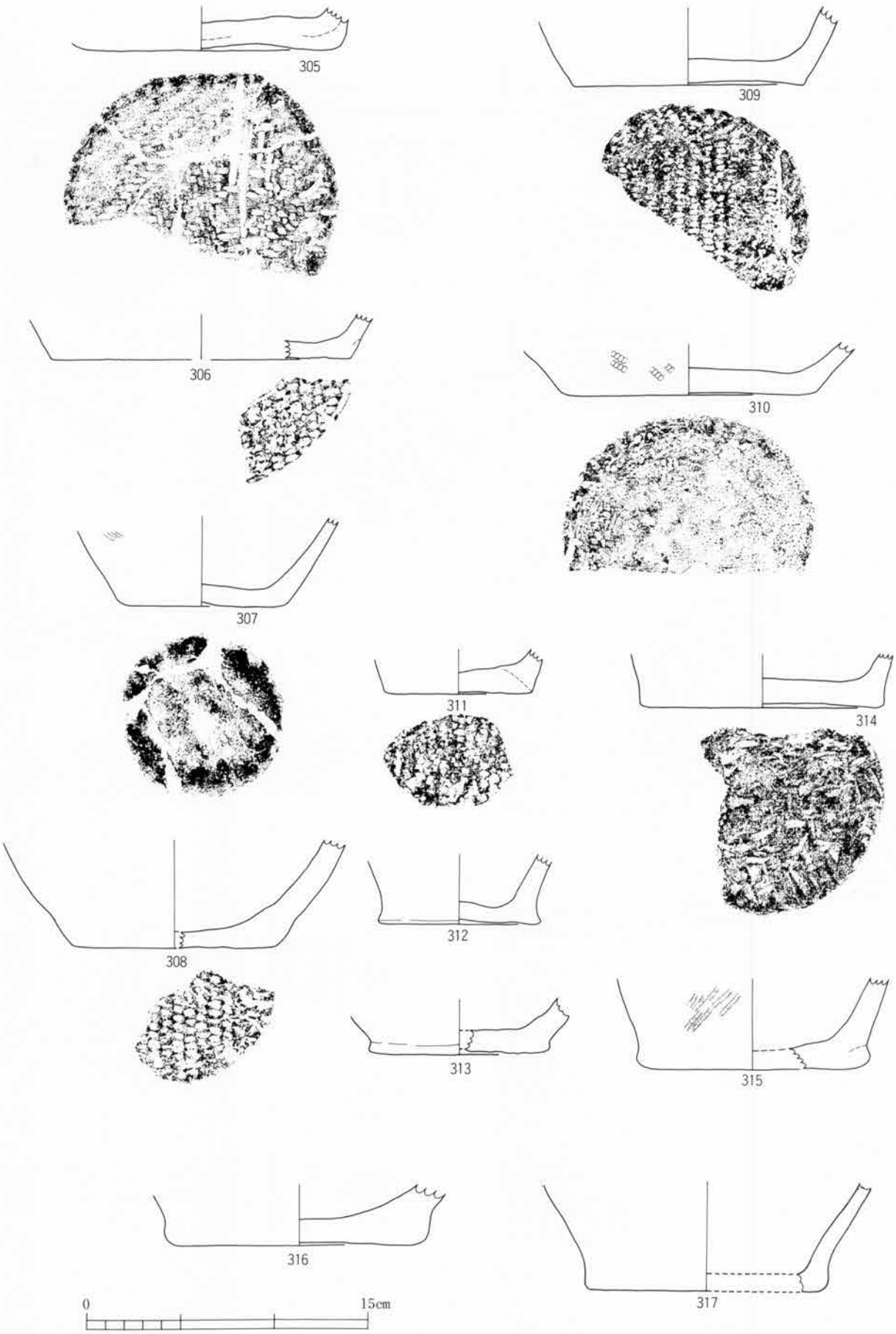
第57図　6群 縄文土器（S＝1／4）



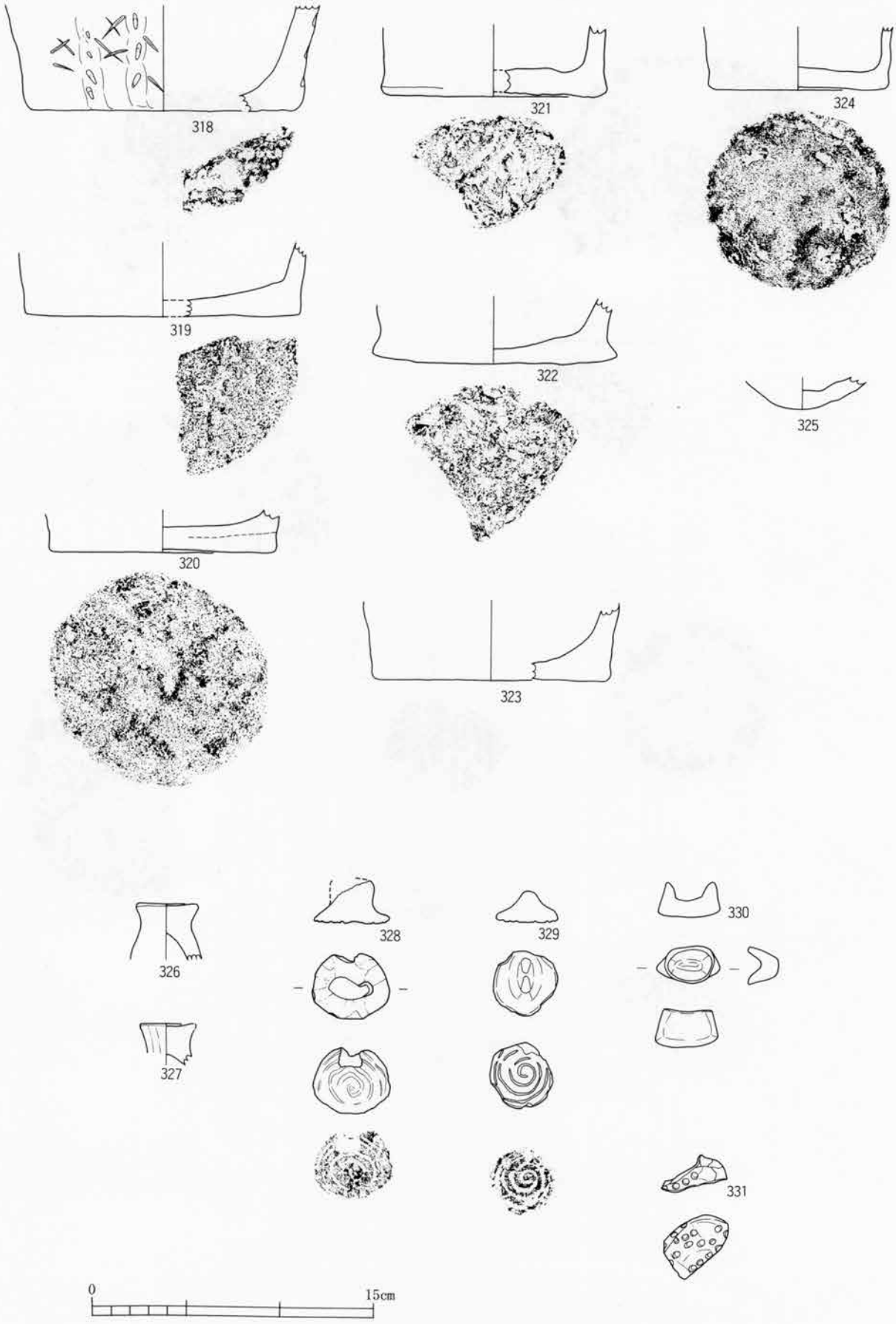
第58図　縄文土器底部（S＝1／3）



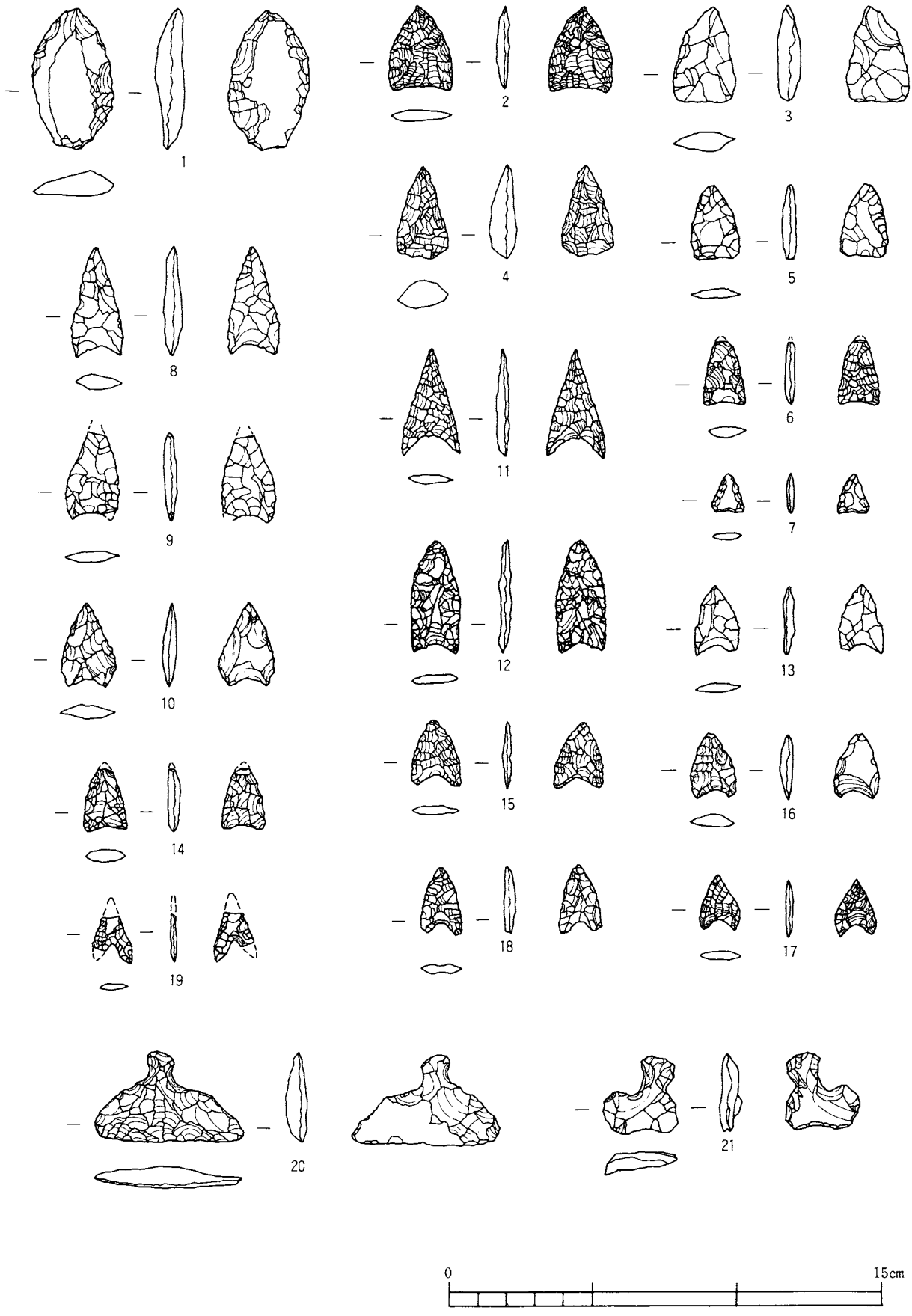
第59図　縄文土器底部（S＝1／3）



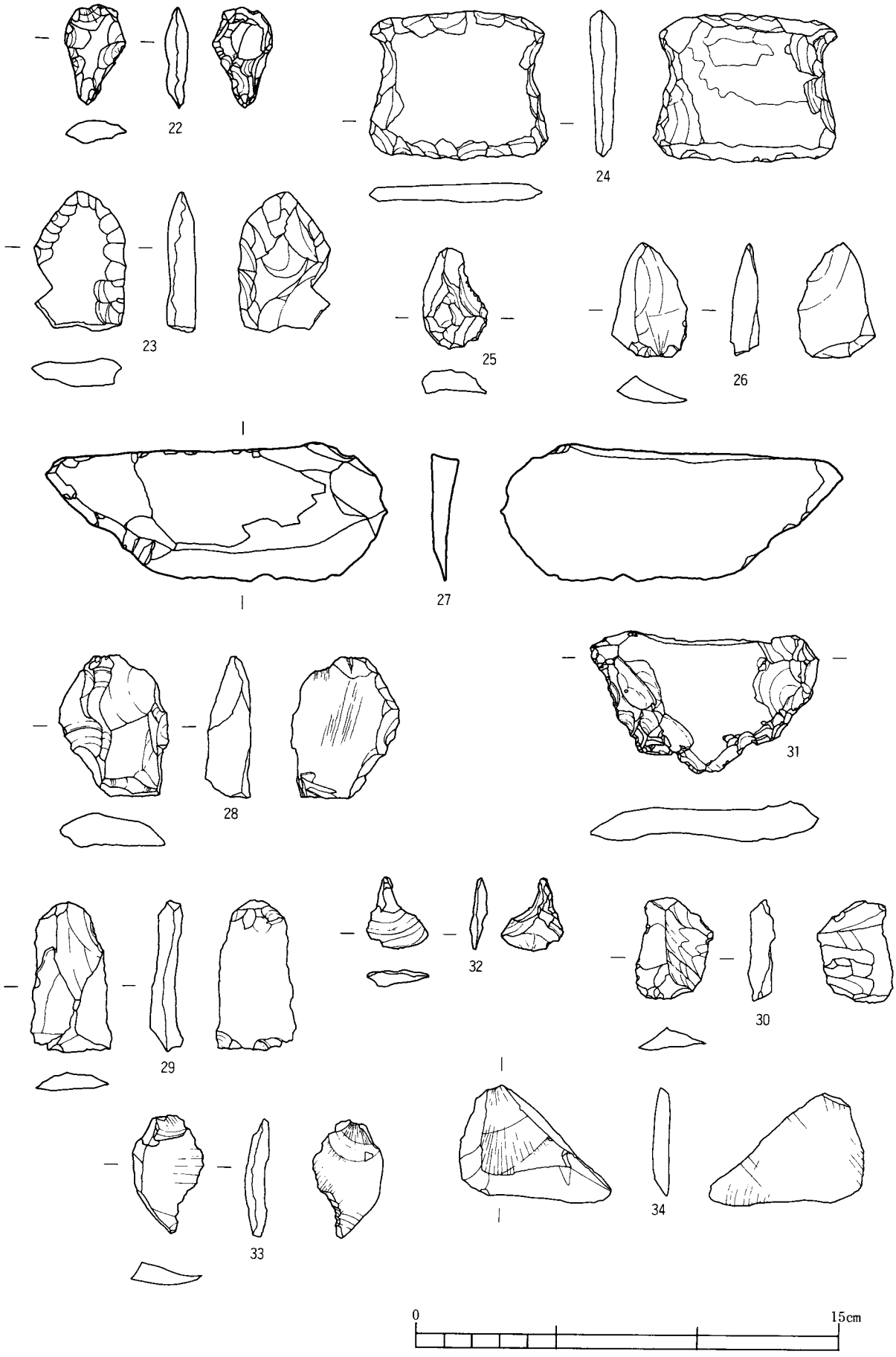
第60図　縄文土器底部（S＝1／3）



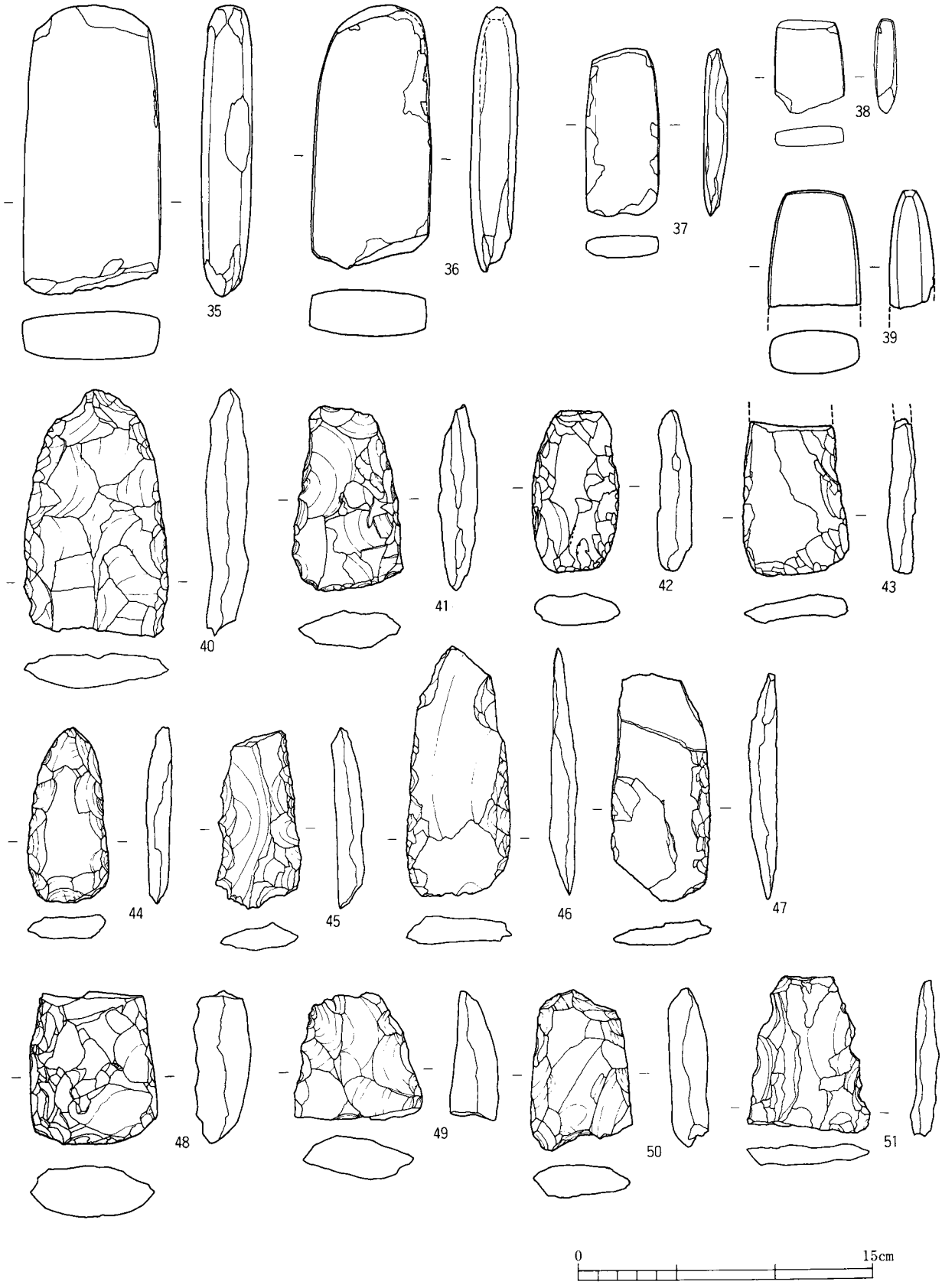
第61図　縄文土器底部（318～323）・土製品（326～331）（S＝1／3）



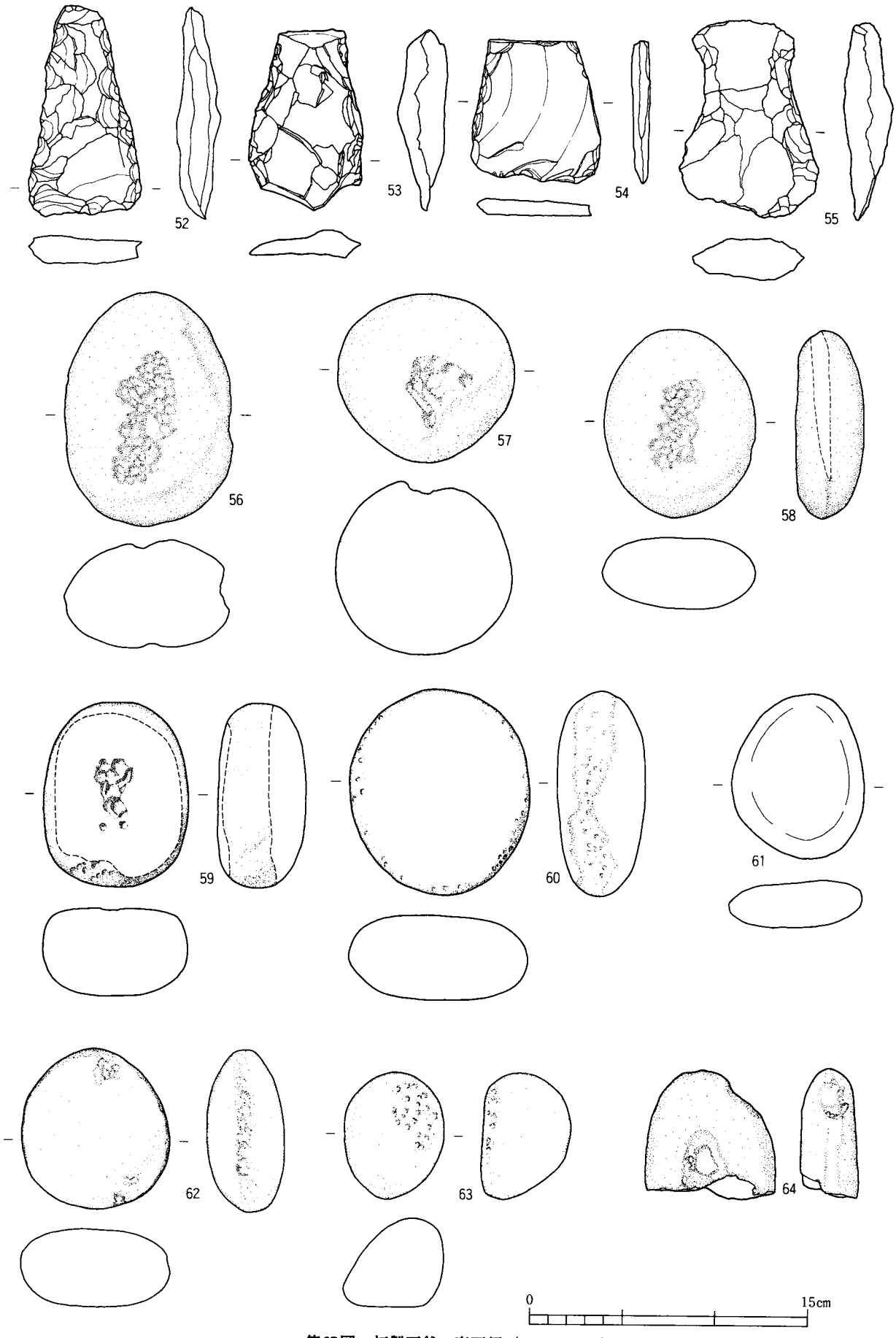
第62図　石槍・石鏃・石匙（S＝1／2）



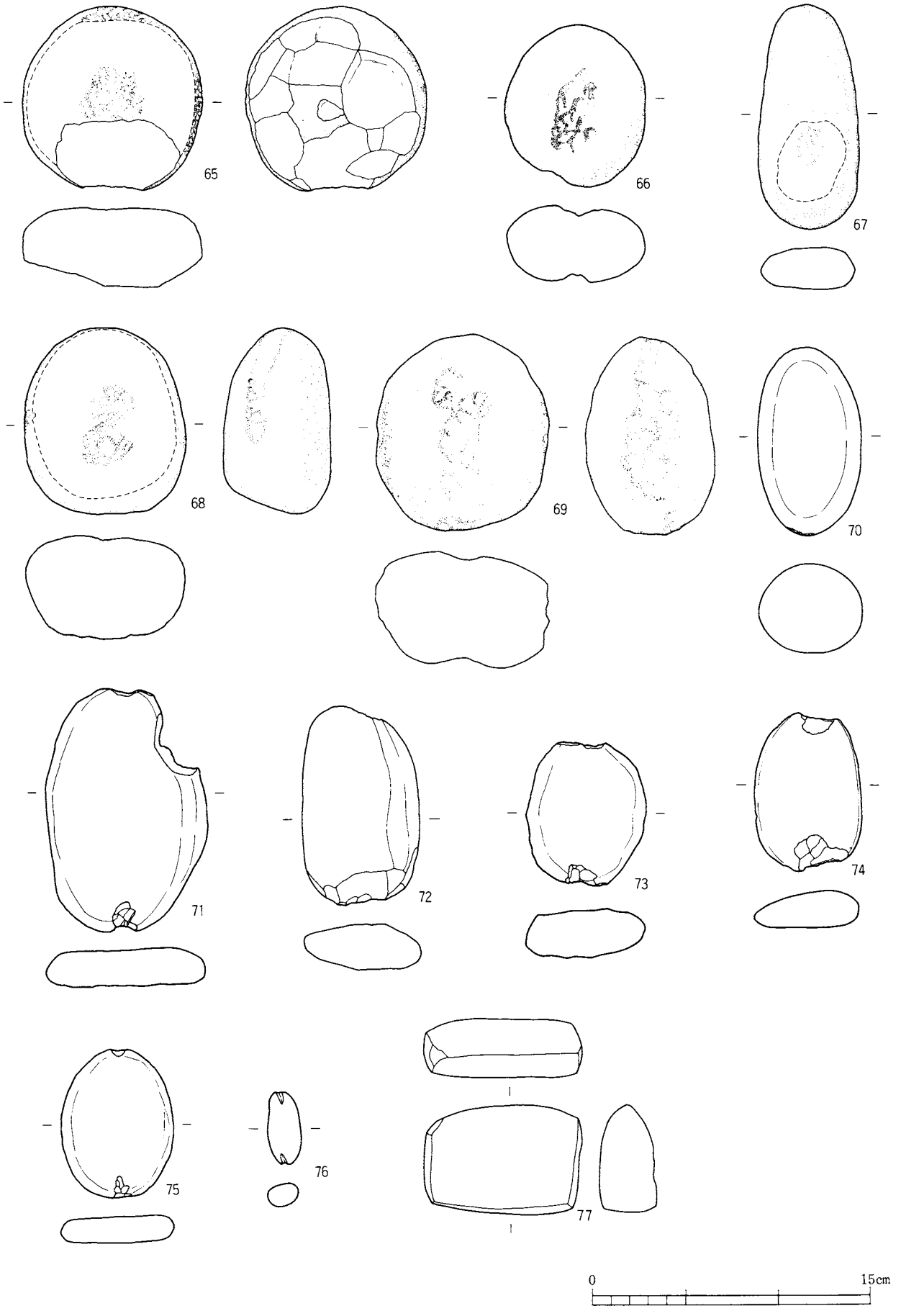
第63図　石錐、スクレイパー、その他（S＝1／2）



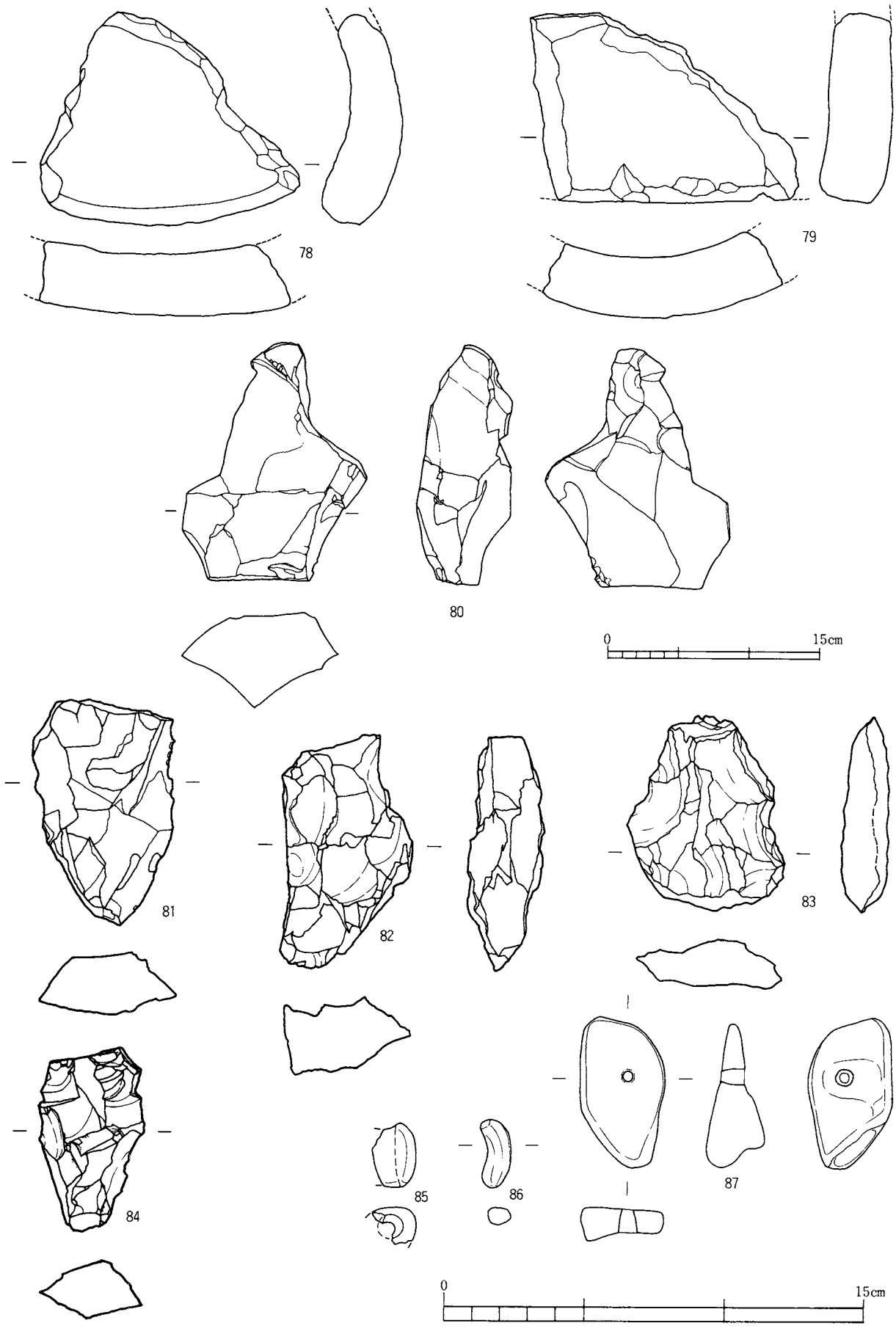
第64図　磨製石斧・打製石斧（S＝1／3）



第65図　打製石斧・磨石類（S＝1／3）



第66図　磨石類・石錘・石冠（S＝1／3）



第67図　石皿・石核・玉類、その他（上段S＝1／4、下段S＝1／2）

図番号	グリッド	遺構等	器種	石質	色調	光沢	形態	残存	長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
1	F－11	25土坑	石槍	流紋岩	明色	無	木葉形	完形	5.0	2.9	0.9	11.4	
2		9溝	石鏃	鉄石英	赤褐色	有	凹基無茎	完形	3.0	2.3	0.5	2.8	
3	B－5	9溝	石鏃	流紋岩	明色	無	平基無茎	完形	3.4	2.2	0.9	5.3	
4	D－6	1住周辺	石鏃	流紋岩	明色	無	平基無茎	完形	3.2	1.9	0.9	4.5	
5			石鏃	流紋岩	明色	無	平基無茎	完形	2.6	1.7	0.5	1.8	
6	D－6	包含層	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	欠損	2.4	1.5	0.5	1.2	残存長
7	C－6	炉址	石鏃	流紋岩	暗色	無	凹基無茎	完形	1.5	1.2	0.3	0.4	
8	C－3	包含層	石鏃	流紋岩	暗色	無	凹基無茎	完形	3.9	1.9	0.6	3.2	
9	D－6	包含層	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	欠損	3.2	1.9	0.5	2.5	残存長
10			石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	完形	2.9	2.0	0.5	2	
11	D－6	包含層	石鏃	鉄石英	茶褐色	有	凹基無茎	完形	3.8	2.2	0.5	2.2	
12	D－6	23A土坑	石鏃	珪質頁岩	暗色	有	凹基無茎	完形	4.0	1.8	0.5	3.4	
13	D－6	9溝	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	完形	1.9	1.6	0.4	1	
14	C－5	SB	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	欠損	2.2	1.6	0.5	1.5	残存長
15	C－5	包含層	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	完形	2.4	1.8	0.4	1	
16	D－6	23B土坑	石鏃	流紋岩	明色	無	凹基無茎	完形	2.2	1.6	0.4	1.2	
17	CD－6	22土坑	石鏃	チャート	暗色	有	凹基無茎	完形	2.0	1.5	0.2	0.5	
18	D－7	大溝	石鏃	黒色頁岩	黒色	有	凹基無茎	完形	2.4	1.5	0.4	1.2	
19	C－6	炉址	石鏃	チャート	暗色	有	凹基無茎	欠損				0.4	
20			石匙	輝石安山岩	暗色	無	横形	完形	3.3	5.2	0.8	8.9	
21	D－6	9溝	石匙	チャート	白色	有	横形	完形	2.9	2.7	0.6	3.5	
22	E－5		石錐	流紋岩	明色	無		完形	3.6	2.3	0.8	5	
23	C－6	1住周辺	削器	凝灰岩	明色	無		欠損		3.3	1.0	15.8	
24	D－6	38土坑	掻器？	流紋岩	明色	無	不定形		6.4	5.2	0.7	42.5	剥片利用？
25			掻器	黒色頁岩	黒色	無	不定形		3.6	2.3	0.8	6.2	剥片利用，剥落あり
26	C－6	包含層	掻器	鉄石英	赤褐色	有	不定形		4.2	2.7	1.1	7.8	剥片利用，剥落あり
27	E－7	包含層	掻器	流紋岩	暗色	無	不定形		12.1	4.9	1.1	56.5	剥片利用，剥落あり
28	D－6	9溝	掻器	頁岩	明色	無	不定形		5.2	3.8	1.4	24.3	剥片利用，剥落あり
29	C－5	包含層	掻器	流紋岩	明色	無	不定形		5.4	2.9	1.1	11.7	剥片利用，剥落あり
30	E－9		掻器	チャート	暗色	有	不定形		3.8	2.5	0.9	7.1	剥片利用，剥落あり
31			剥片	黒色頁岩	黒色	有	不定形	欠損		8.0	12.0	60.3	二次加工ある剥片
32	C－5	炉址周辺	剥片	珪質頁岩	明色	有	不定形		2.5	2.2	0.4	1.6	
33	C－6	包含層	剥片	流紋岩	暗色	無	不定形		4.1	2.5	0.6	6	
34	C－6	1住周辺	剥片	流紋岩	明色	無	不定形		5.6	3.6	0.7	14.4	
	F－11	25土坑	剥片	流紋岩	暗色	無	不定形		3.2	2.9	0.6	4.7	
			剥片	流紋岩	暗色	無	不定形		5.6	2.8	0.8	19.5	
35	C－6	包含層	磨製石斧	流紋岩	明色	無	定角	刃部破損	14.6	7.0	2.5	566	残存長
36	東拡張区	包含層	磨製石斧	流紋岩	明色	無	定角	刃部破損	13.7	6.0	2.4	392	残存長
37	C－5	包含層	磨製石斧	流紋岩	明色	無	定角	完形	8.7	3.7	1.1	72	
38	D－8	9溝	磨製石斧	流紋岩	明色	無	定角	刃部破損	4.8	3.4	0.9	30	
39	D－6	9溝	磨製石斧	流紋岩質凝灰岩	明色	無	定角	欠損				114	刃部欠損
40			打製石斧	安山岩	暗色	無	短冊	欠損	12.5	7.5	2.3	260	残存長
41	G－10	9溝	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	完形	9.5	5.8	1.8	104	
42	C－6	包含層	打製石斧	頁岩	明色	無	短冊	完形	8.3	4.5	1.6	60	
43	D－7	包含層	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	欠損		5.3	1.2	68	基部欠損
44	C－5	9溝	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	完形	9.1	4.2	1.3	59	
45	G－10	JP58	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	欠損	9.0	4.4	1.2	61	残存長，基部欠損
46	D－8	包含層	打製石斧	流紋岩	暗色	無	短冊	完形	13.0	5.5	1.4	117	片刃？
47	C－3	包含層	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	完形	11.7	5.0	1.3	91	
48		表採	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	欠損		6.5	2.6	194	基部欠損
49	C－3	包含層	打製石斧	流紋岩	明色	無	短冊	欠損				109	刃部欠損，被熱
50	D－5	包含層	打製石斧	砂岩	明色	無	短冊	欠損			1.8	96	刃部欠損，被熱
51	DE－8	9溝	打製石斧	流紋岩	明色	無	バチ	欠損			1.0	69	刃部欠損
52	D－5	包含層	打製石斧	流紋岩	明色	無	バチ	完形	11.3	6.0	2.3	166	
53	F－6	包含層	打製石斧	流紋岩	明色	無	バチ	欠損		6.1	2.5	146	
54	D－6	包含層	打製石斧	安山岩	明色	無	バチ	欠損		6.9	0.9	78	基部欠損
55	D－7	9溝	打製石斧	流紋岩	明色	無	分銅	完形	10.8	7.4	2.6	165	
56	G－9	包含層	磨石類	角閃石安山岩	淡赤色	無	自然礫	完形	12.5	8.8	5.8	858	磨面1，凹面2
57	E－9	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	9.4	8.8	9.2	941	叩打痕
58	G－10	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	10.2	8.2	3.7	412	凹面2
59	C－6	S－19	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	10.0	7.8	4.7	614	磨面2，凹面1
60	D－4	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	11.1	9.8	4.6	780	磨面2
61		1溝	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	8.9	7.1	2.4	203	磨面1
62	E－4	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	8.8	8.2	4.3	464	磨面2
63	E7	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	6.0	6.5	4.7	255	磨面1，叩打痕
64	C－3	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	欠損		7.0	2.9	154	凹面2
65	F－11	25土坑	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	欠損	9.8	9.8	4.3	601	磨面1？，凹面2
66	E－8	包含層	磨石類	角閃石安山岩	淡赤色	無	自然礫	完形	8.9	7.7	4.1	319	凹面1，叩打痕
67	C－6	S－17	磨石類	凝灰岩	明色	無	自然礫	完形	12.3	5.3	2.6	235	磨面1，凹面2
68	C－6	S－20	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	10.0	8.5	5.7	725	凹面2
69	G－8	包含層	磨石類	角閃石安山岩	淡赤色	無	自然礫	完形	10.8	9.0	6.6	930	凹面2，叩打痕
70	C－5	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	10.4	5.6	5.0	325	磨石？
	G－11	包含層	磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	完形	10.0	9.8	4.8	664	磨面あり
			磨石類	流紋岩	明色	無	自然礫	欠損	11.1	10.0		914	磨面1？叩打痕
71	C－5	包含層	石錘	流紋岩	明色	無	打欠	欠損	13.3	8.9	2.2	335	
72	D－6	38土坑	石錘	流紋岩	明色	無	打欠	完形	10.9	6.4	2.3	230	
73	C－3	包含層	石錘	流紋岩	明色	無	打欠	完形	7.9	6.4	2.5	155	
74	G－3		石錘	流紋岩	明色	無	打欠	完形	8.7	5.9	2.0	120	
75	D－7	9溝	石錘	流紋岩	明色	無	打欠	完形	8.2	6.2	1.5	126	
76	E－4		石錘	安山岩	明色	無	切目	完形	4.0	1.8	1.3	12.7	
77		32土坑	石冠	凝灰岩	明色	無	断面三角	完形	8.6	6.0	3.1	173	
78	E－8		石皿	凝灰岩	明色	無		破片				1294	
79		1溝	石皿	流紋岩	明色	無		破片				1039	
80	B		石核	凝灰岩	明色	無			16.8	10.4	6.4	1016	
81	E－4		石核？	流紋岩	明色	無			7.8	5.1	2.1	102	
82	E－9	包含層	石核	鉄石英	赤褐色	有			8.7	4.5	2.4	111	
83	C－4	包含層	石核？	流紋岩	明色	無			6.1	5.3	1.7	68.6	
84	C－4	包含層	石核	珪質頁岩	明色	有			6.4	3.6	2.0	52.4	
85	C－5	SB	玉類	黒色頁岩	黒色	有	管玉	欠損	2.1			4.3	
86	B－4	包含層	玉類？	流紋岩	明色	無		完形	2.4	0.8	0.6	2.1	
87	C－6	51土坑	玉類	硬玉	明色	有	大珠	完形	5.4	3.0	2.1	44.2	
			不明	流紋岩	明色	無	板状	破片		2.7		17.5	研磨が入念，側面の線条痕が顕著

第6表　石器観察表

第６章　梯川中流域左岸における古代集落の動向について
－軽海西芳寺・荒木田遺跡の調査から－

１．はじめに

この章は、軽海西芳寺遺跡と荒木田遺跡を中心に梯川中流域左岸の古代集落の動向を若干考えてみようというものである。ここで検討する主な項目は集落の時期、建物の方位・規模、立地等である。それぞれの遺跡から出土した遺物あるいは遺構については十分な検討は行っていない。また、梯川中流域左岸と限定したように、筆者の力量不足と広範囲を検討するよりは限られた範囲内の動向を探ることを考えた。

２．荒木田遺跡

荒木田遺跡は軽海西芳寺遺跡の北約400mに位置し、梯川の自然堤防上に立地している。県埋文センターと小松市教育委員会で調査が行われている。県埋文センターの調査は道路の拡張部分の調査であり掘立柱建物等の遺構を充分に検出しているとは言い難いが、軽海西芳寺遺跡を含めて梯川までの約500mという長い調査区であり、その結果両遺跡の立地と動向がよくわかるという好条件も生み出したといえる。

荒木田遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡であり、古代では８世紀後半～９世紀前半を中心としている。県埋文センターの調査では建物跡は３棟程度しか検出されていないが、小松市教委の調査では数十棟の建物跡が検出されている。市教委の調査は未報告であるので、県調査分について述べると、検出された３棟の掘立柱建物はいずれも調査区外に延びており、その規模を明らかにすることは出来ない。建物の方位はいずれも西偏する。掘立柱建物以外の遺構では、水場遺構（ＳＸ１３）が注目される。水場遺構は湧水を利用したもので、自然堤防の傾斜面に立地している。この水場遺構からは８世紀第２四半期から９世紀後半頃の土器が出土しており、そのうち約130点の墨書土器が確認されている。その他貝類、木製品等の多数の遺物が出土している。墨書土器の中には「兎橋」と読めるものもあり、兎橋郷の一部であった可能性が考えられている。この水場遺構は飲料水としての日常的な使用だけでなく、斎串・人形などが出土している事も含めて非日常的な使用、いわゆる祓いの儀式にも使用されていたと考えられている。そしてこの水場遺構は「村落結合のあかしであり共同体のアイデンティティー確認の場であった」とされている。荒木田遺跡で再び集落が形成されるのは12世紀のことである。

３．軽海西芳寺遺跡

軽海西芳寺遺跡は５次の調査が行われており、縄文時代から中世の複合遺跡であることが明らかになっている。縄文時代の遺跡は丘陵端部に位置しており、古代の軽海西芳寺遺跡とは立地が異なっている。古代は７世紀初頭から10世紀前半段階の遺構・遺物が検出されている。１・２次調査で検出されている掘立柱建物は、総柱建物５棟、側柱建物４棟が検出されている。それぞれの詳細は本報告に譲るとして、建物方位を見ると、東偏２～５度にまとまるグループと、10度以上東偏するグループ、そして１棟のみ西偏する建物がある。それらの時期は、柱穴等から良好な遺物が出土していないため、個々の建物について明らかにすることは出来ないが、東偏２～５度のグループは８世紀後半から９世紀前半、10度以上東偏するグループは８世紀後半以前、西偏するものに関しては不明である。３～５次調査では、７世紀後半から10世紀前半頃まで遺構遺物が検出されている。掘立柱建物は一部を除きすべて西偏している。１・２次調査で検出されている掘立柱建物とは明らかに建物方位が異なっている。昭和58年度調査区北端のＳＤ０１を境にして建物群が違う可

能性が高いと思われる。西偏する建物は、荒木田遺跡、漆町遺跡や、後述する佐々木ノテウラ遺跡を含めてもそれほど多くは検出されていない。ただし、佐々木遺跡では多くみられるようである。

4．佐々木ノテウラ遺跡

県埋文センターによって昭和59年に調査されている。古代は７世紀前半から10世紀前半の遺構・遺物が検出されている。７世紀前半から８世紀前葉とされている建物群は、建物方位を14～16度東に振っている。９世紀後半～10世紀前半の建物群は７～９度西偏する。また井戸が付随している。前者は複数の建物小群が倉庫を共有しているあり方であるとしているのに対して、後者は一つの建物小群内に井戸・倉庫を持ち、自立化が進んでいる段階ととらえられている。

5．佐々木遺跡

平成９年度に小松市教育委員会で調査された佐々木遺跡では、７世紀前半から８世紀中頃とみられている柵列で区画された建物群が調査されている。未報告であり詳細は不明だが、面積60㎡を越える大型の掘立柱建物、倉庫群、井戸、工房跡などが検出されている。その性格についてはまだ明らかにされていないが、梯川流域では古代にあまり見られない井戸を持つこと、柵に区画された中に倉庫域と居住域が明確に分かれていることなど、一般の集落とは様相が異なる。建物の方位を見ると、西偏するものがほとんどである。

6．微地形図・調査区断面図から

荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡とも微高地上に立地していることがよくわかる。軽海西芳寺遺跡の立地している場所の方が、標高も高く７世紀初頭から集落が形成されていることも含み、安定した場所であったことがわかる。両遺跡の境界は、ＳＸ０４付近の鞍部が考えられている。ＳＸ０４は自然河道と考えられており、法仏・月影式期の土器がその肩部から大量に出土している。おそらくその時期にはかなりの水量があったと思われる。荒木田遺跡はこのＳＸ０４がほぼ埋まった８世紀中頃に集落が形成されたものと考えられる。それでも埋まった部分はかなり軟弱であったと思われる。

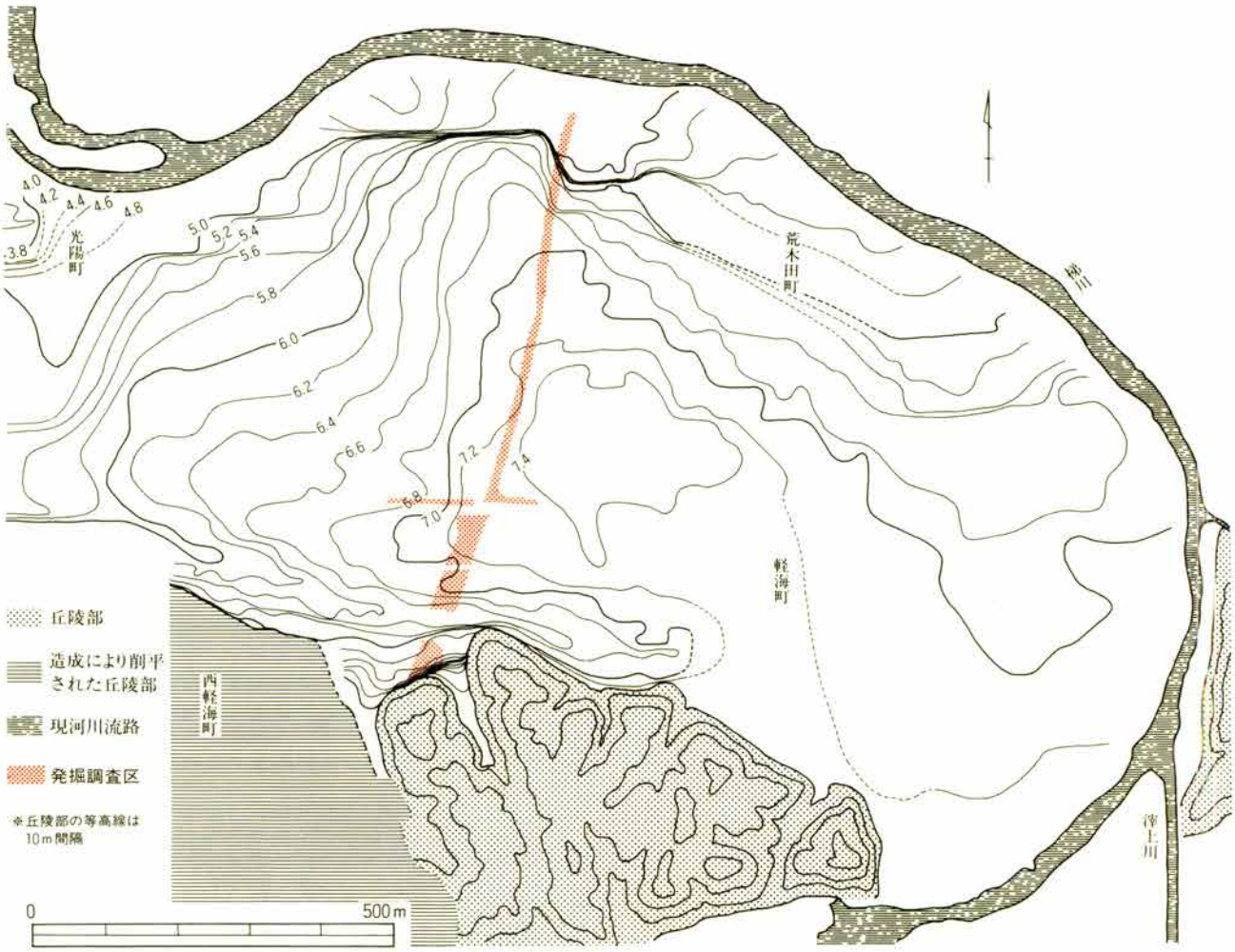
7．おわりに

荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡は、その集落の形成の時期は違うが、廃絶の時期はほぼ同じで10世紀前半代であること、また佐々木ノテウラ遺跡でも同じ様な状況があることがわかった。また佐々木遺跡のような官的な集落も、７世紀後半から８世紀中頃にかけて存在していたこともわかってきた。10世紀後半以降の集落を探すと、漆町遺跡のような長期にわたって成立している集落や、集落の様相は不明だが11世紀代の遺物がまとまって出土している中海遺跡などがある。荒木田・軽海西芳寺遺跡周辺や佐々木ノテウラ遺跡周辺においては、10・11世紀代の集落は見られない。このことは国府移転論とも関連するような歴史的な事象によるものか、それとも梯川の氾濫などの自然災害などに伴うものかは現段階では判断する材料はないが、再び集落が形成されるのは12世紀を待たなければならない。

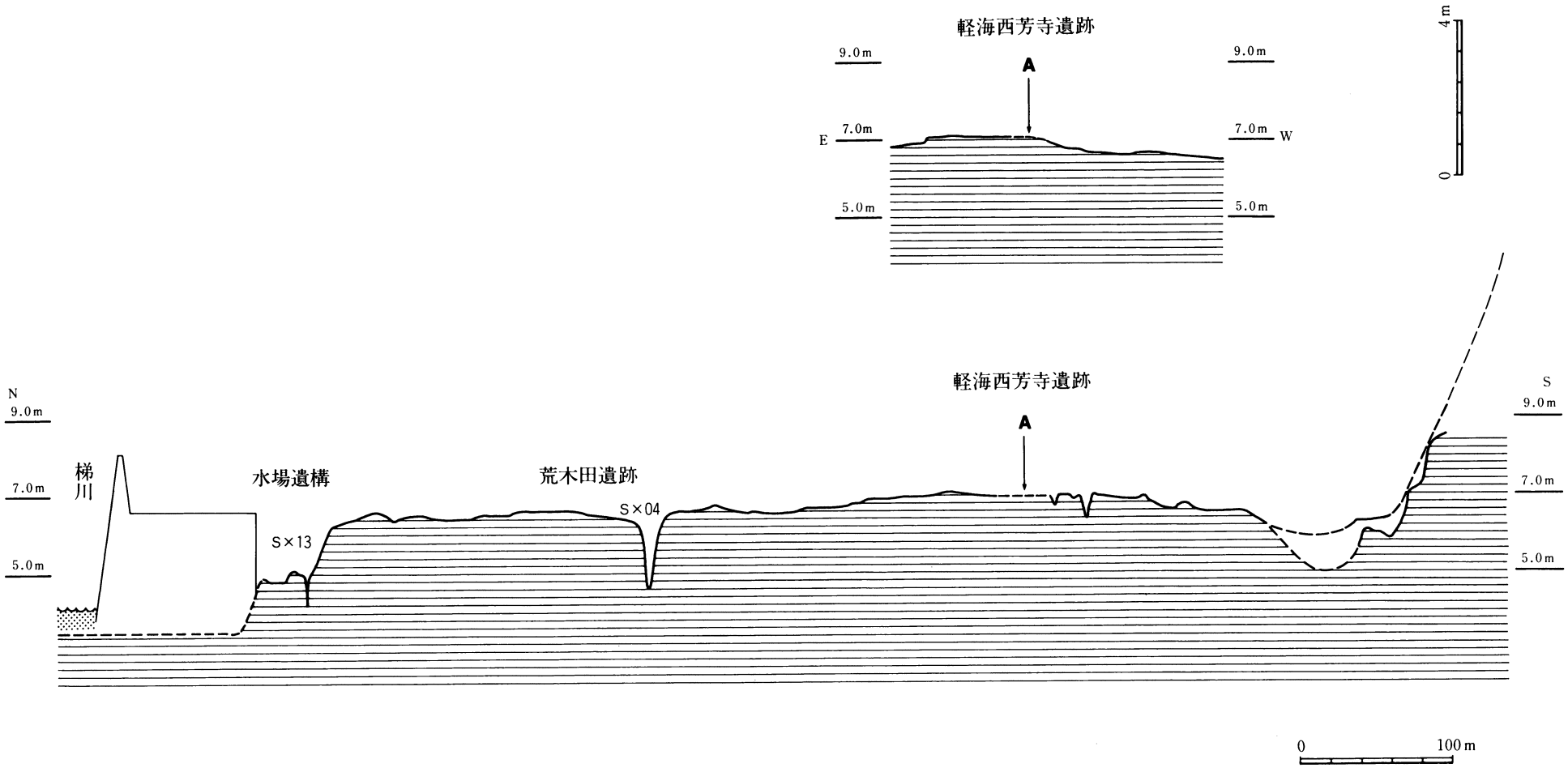
荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡ともに、一般集落として理解して差し支えないものと思われるが、７世紀後半にピークがあり、10世紀前半代で消えてしまうということを評価すれば、それはいわゆる律令型といわれる村落が辿った姿そのものを表しているといえるのではないだろうか。そして12世紀代に再び集落が形成されていく。これは古代にはそれほど居住域としては適さなかった場所を積極的に活用していく、自立を強め

た農民の活発な活動を物語るものと考えたい。

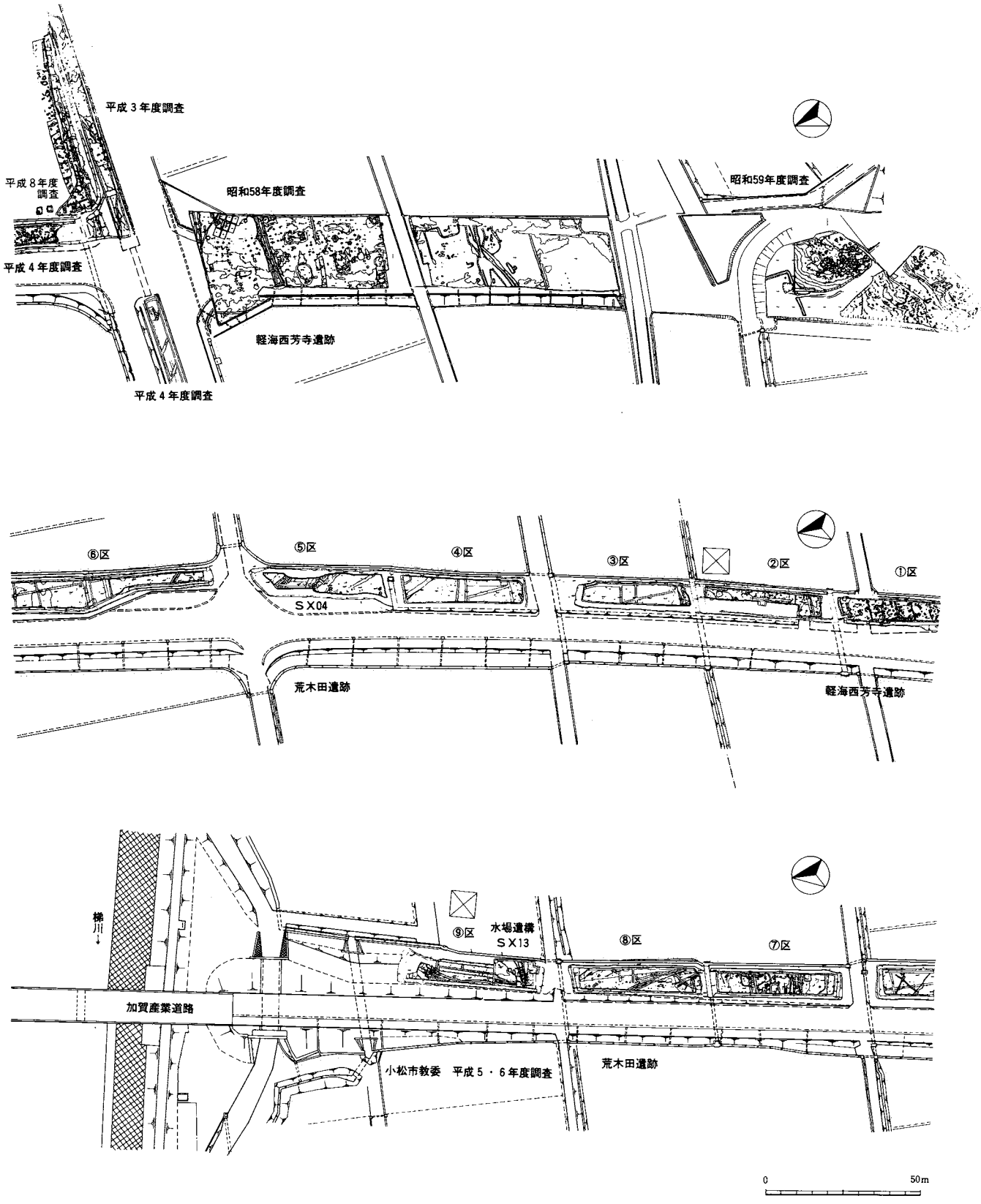
[引用・参考文献]
石川県立埋蔵文化財センター　1986　『佐々木ノテウラ遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1986　『軽海遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1986　『漆町遺跡』Ⅰ
石川県立埋蔵文化財センター　1987　『小松市中海遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1988　『漆町遺跡』Ⅱ
石川県立埋蔵文化財センター　1989　『浄水寺墨書資料集』
藤田邦雄　1992　「加賀における様相　－土師器－」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会
石川県立埋蔵文化財センター　1994　『軽海西芳寺遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1995　『荒木田遺跡』
北陸中世土器研究会　1995　『中世北陸の木製容器』
石川県立埋蔵文化財センター　1998　「小松市佐々木遺跡」『第55回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会資料』



第68図　遺跡周辺の微地形図（S＝1／10,000）



第69図　荒木田・軽海西芳寺遺跡調査区断面図（横軸S＝1／4,000、縦軸S＝1／160）



第70図　軽海西芳寺遺跡・荒木田遺跡の調査区全体図（荒木田1995より転載　一部改編）

写 真 图 版

調査前風景（東から）

表土除去作業（西から）

完掘状態（西から）

完掘状態（東から）

第１号土坑完掘状態（北から）

第２号土坑完掘状態（北から）

第３号土坑土層断面（南から）

同遺物出土状態

同左

第１号掘立柱建物跡完掘状態（東から）

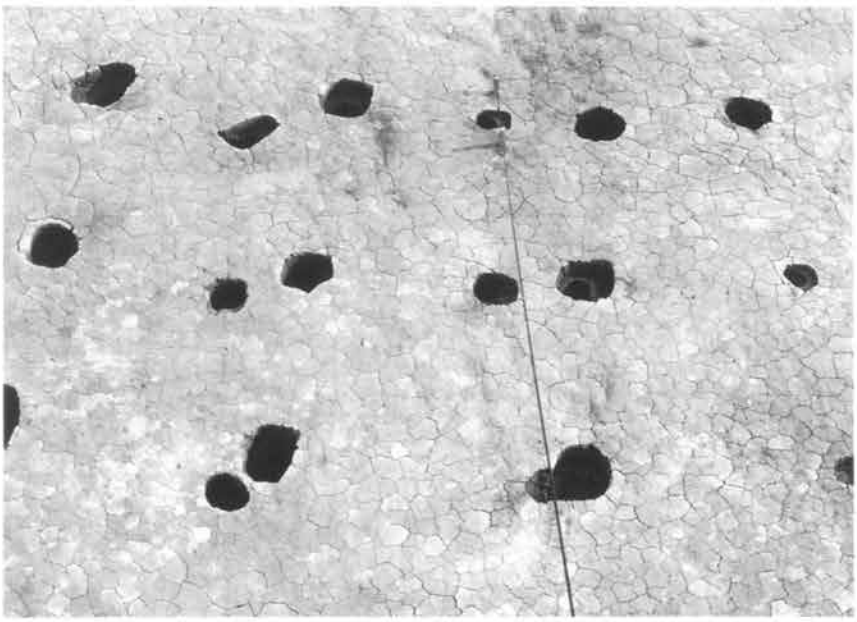
第31号ピット礎板出土状態（東から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

出土遺物（S＝1／3）

空中写真（東から）

空中写真（北から）



SB01－02完掘状態（北から）

図版八　昭和五十八年度（遺構）

SB04完掘状態（北から）

SB05完掘状態（西から）

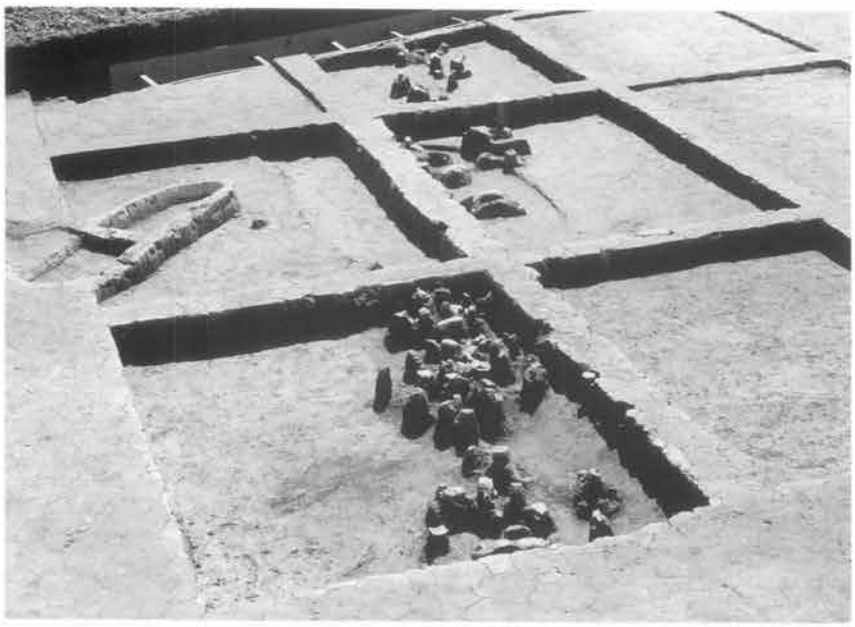
SB07完掘状態（西から）

SE01遺物出土状態

SE01完掘状態

SE02完掘状態

図版十　昭和五十八年度（遺構）



弥生溝土器出土状態

SK07土器出土状態

SD01土層断面（西から）

図版十一　昭和五十八年度（遺構）

雨乞池完掘状態

馬鞍雨乞石全景

北山平と馬鞍雨乞石

図版十二　昭和五十九年度（遺構）

北調査区

溝群完掘状態（東から）

SD10遺物出土状態

南調査区上層

ピット群（南から）

南調査区上層

SD07完掘状態（南から）

南調査区下層

炉石等検出状態（東から）

43号土坑土器出土状態
（第56図・276）

図版十四　昭和五十九年度（遺構）

南調査区下層

7・8号土坑完掘状態

10・11号土坑土層断面

23号土坑完掘状態

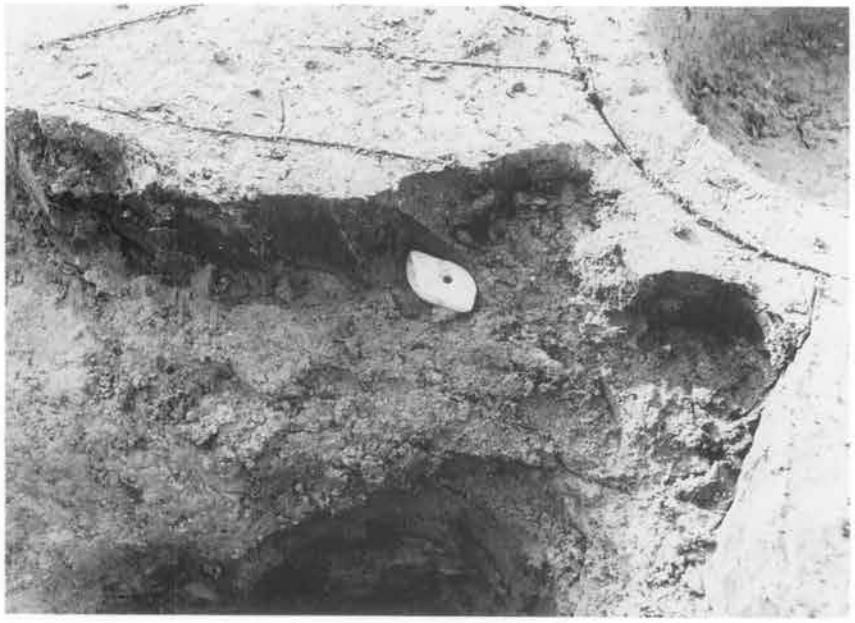
南調査区下層

33号土坑土器出土状態

39号土坑土層断面

41・42・52号土坑完掘状態

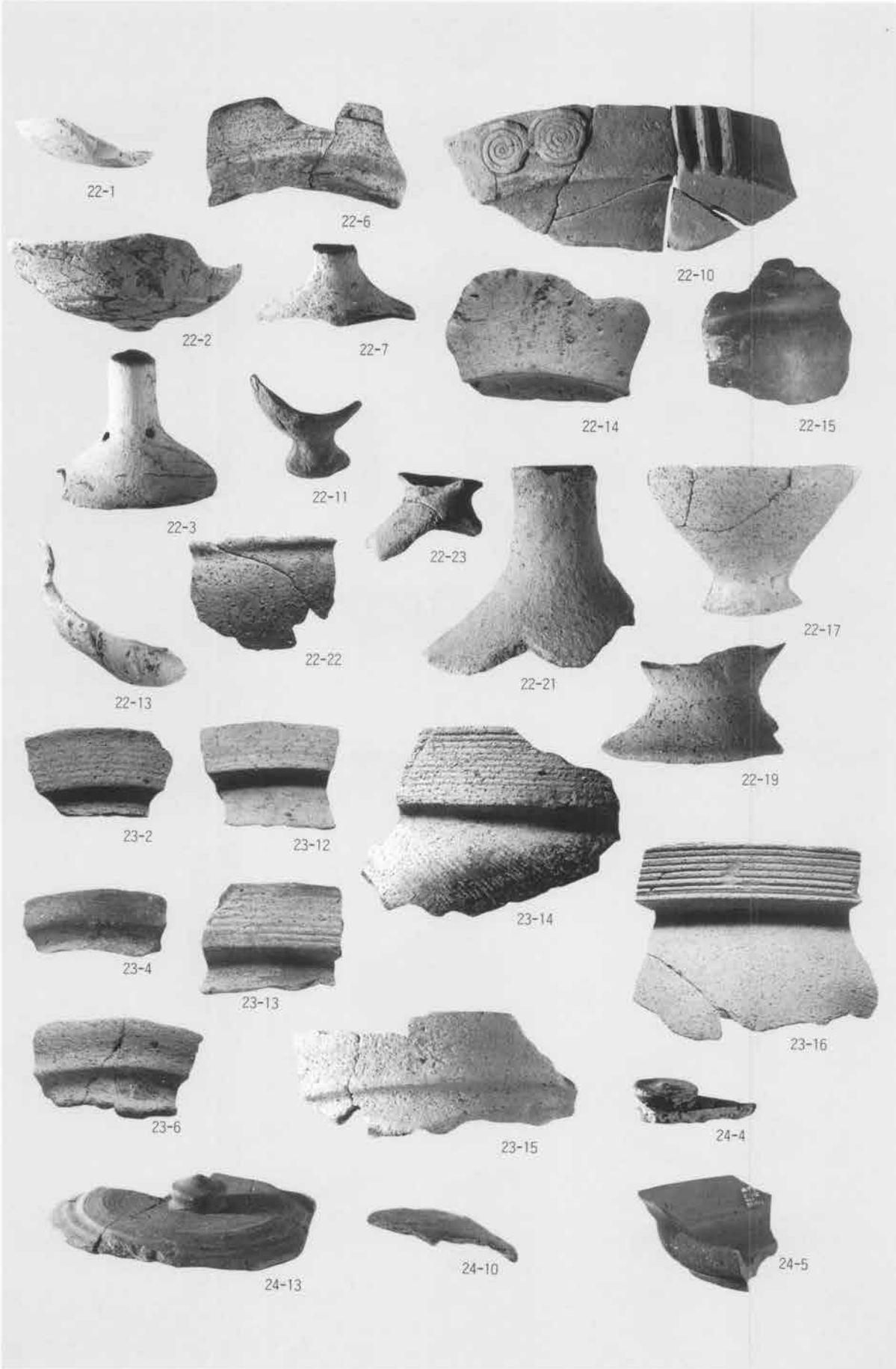
図版十六　昭和五十九年度（遺構）



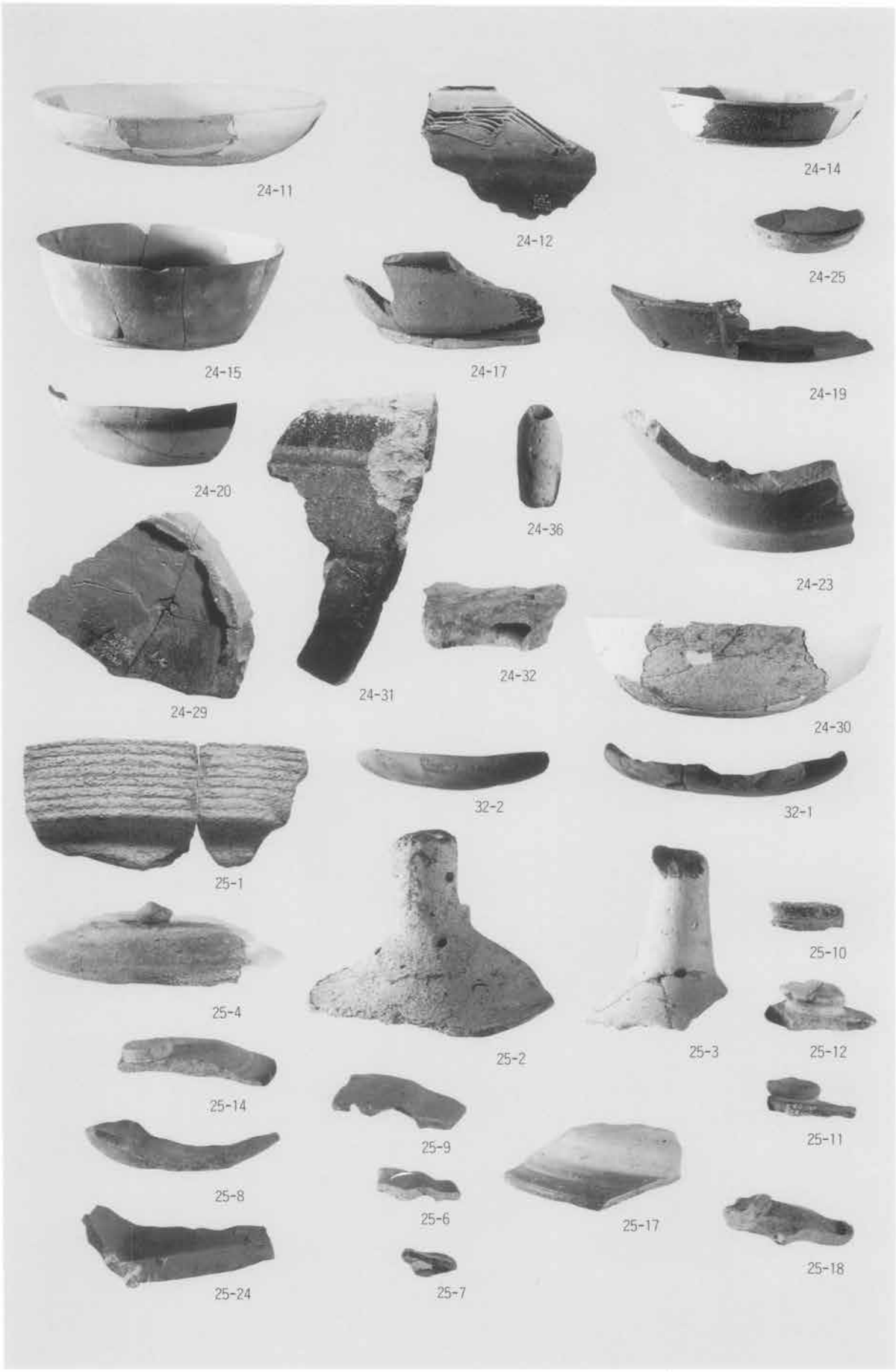
51号土坑大珠出土状態
（第67図・87）

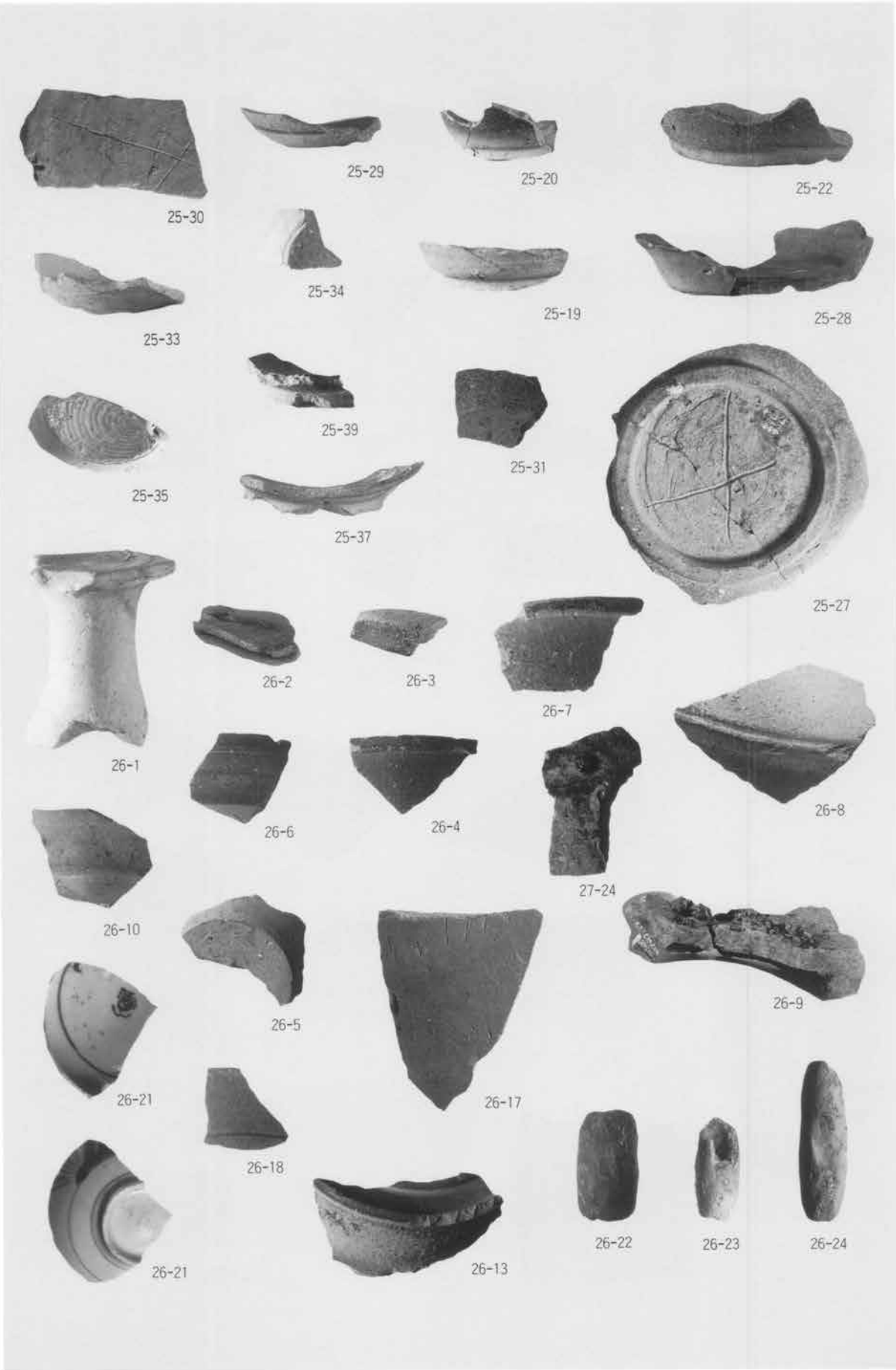
51号土坑土層断面

テラス部完掘状態（東から）

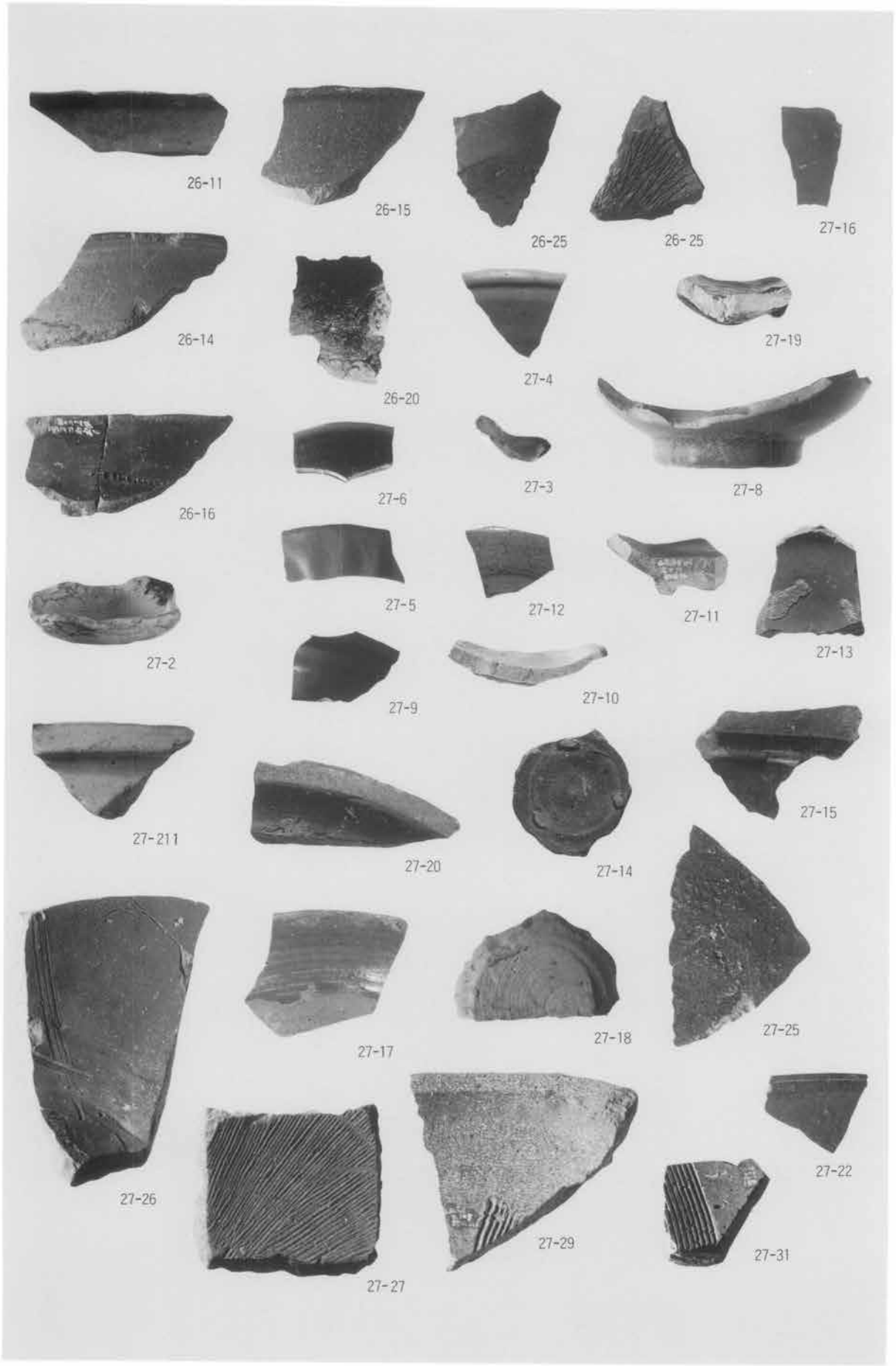

22-1
22-6
22-10
22-2
22-7
22-14
22-15
22-11
22-3
22-23
22-17
22-22
22-21
22-13
22-19
23-2
23-12
23-14
23-4
23-13
23-16
23-6
23-15
24-4
24-13
24-10
24-5

図版十八　昭和五十八年度（遺物）



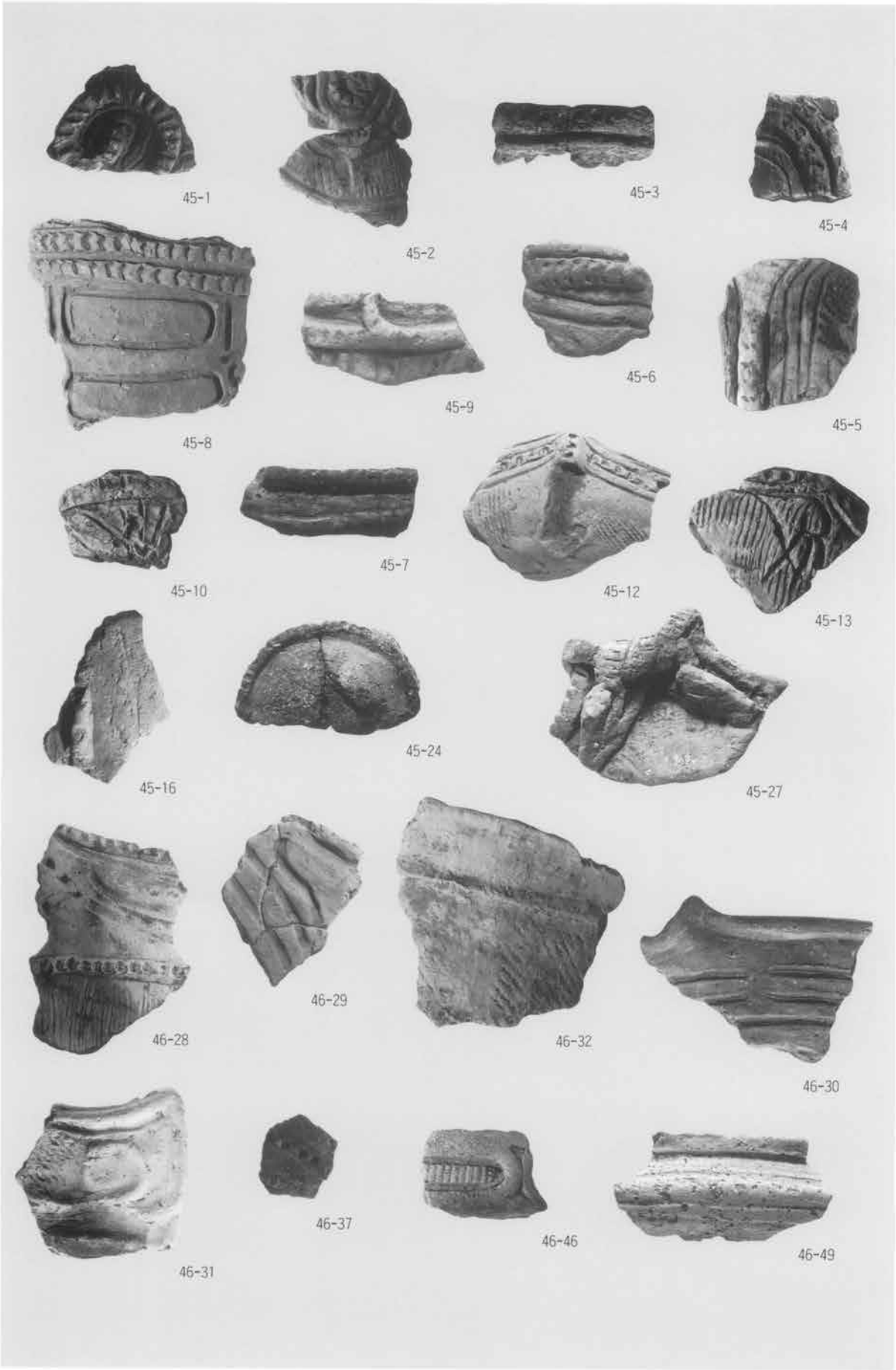

25-30
25-29
25-20
25-22
25-34
25-33
25-19
25-28
25-39
25-31
25-35
25-37
25-27
26-2
26-3
26-7
26-1
26-6
26-4
26-8
27-24
26-10
26-5
26-9
26-21
26-17
26-18
26-21
26-13
26-22
26-23
26-24

図版二十　昭和五十八年度（遺物）



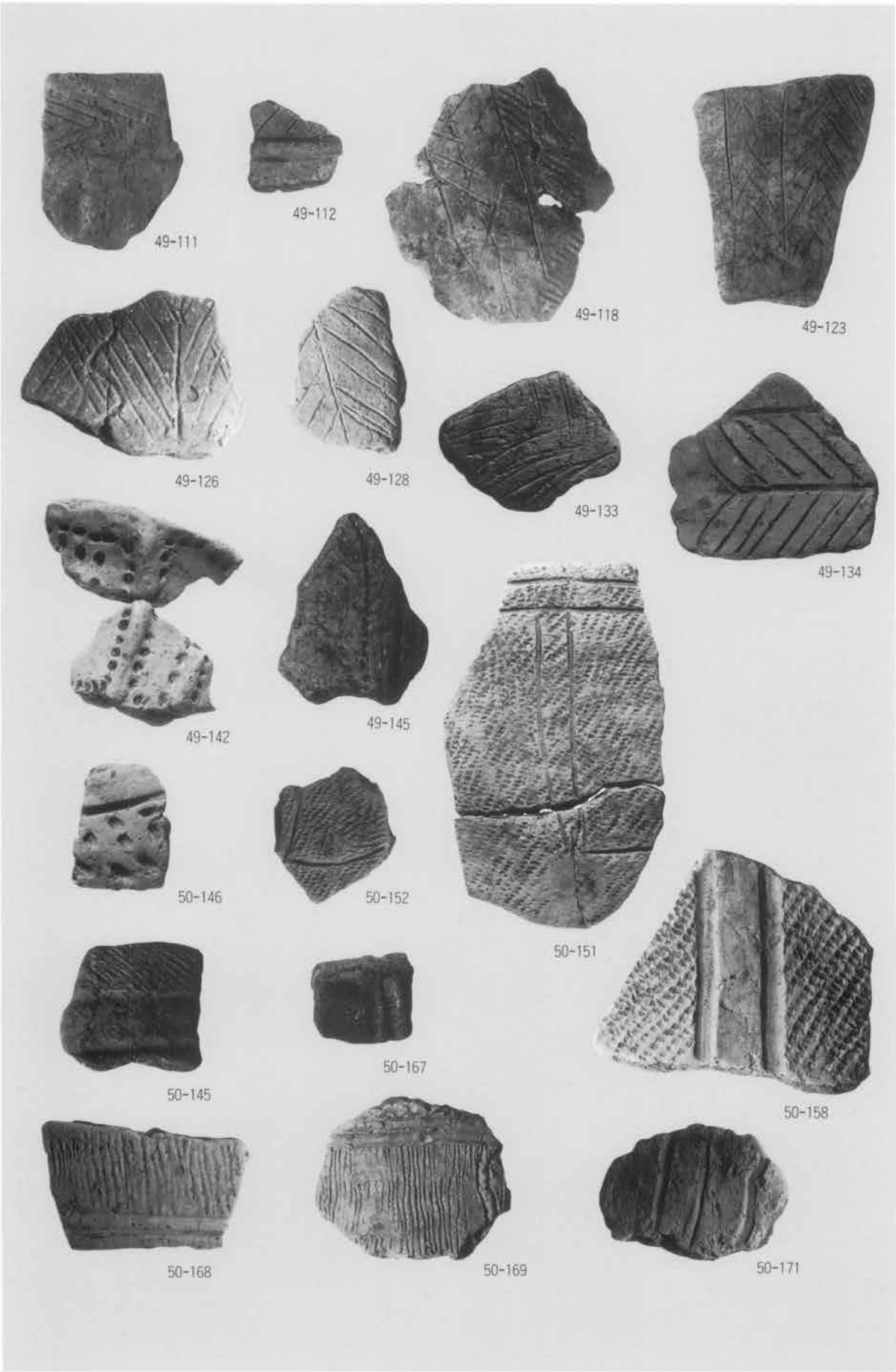
図版二十一　昭和五十八・五十九年度（遺物）

図版二十二　昭和五十九年度（遺物）



図版二十三　昭和五十九年度（遺物）

図版二十四　昭和五十九年度（遺物）



51-173

51-179

51-180

51-185

51-186

51-189

51-191

53-240

54-253

54-258

54-266

54-270

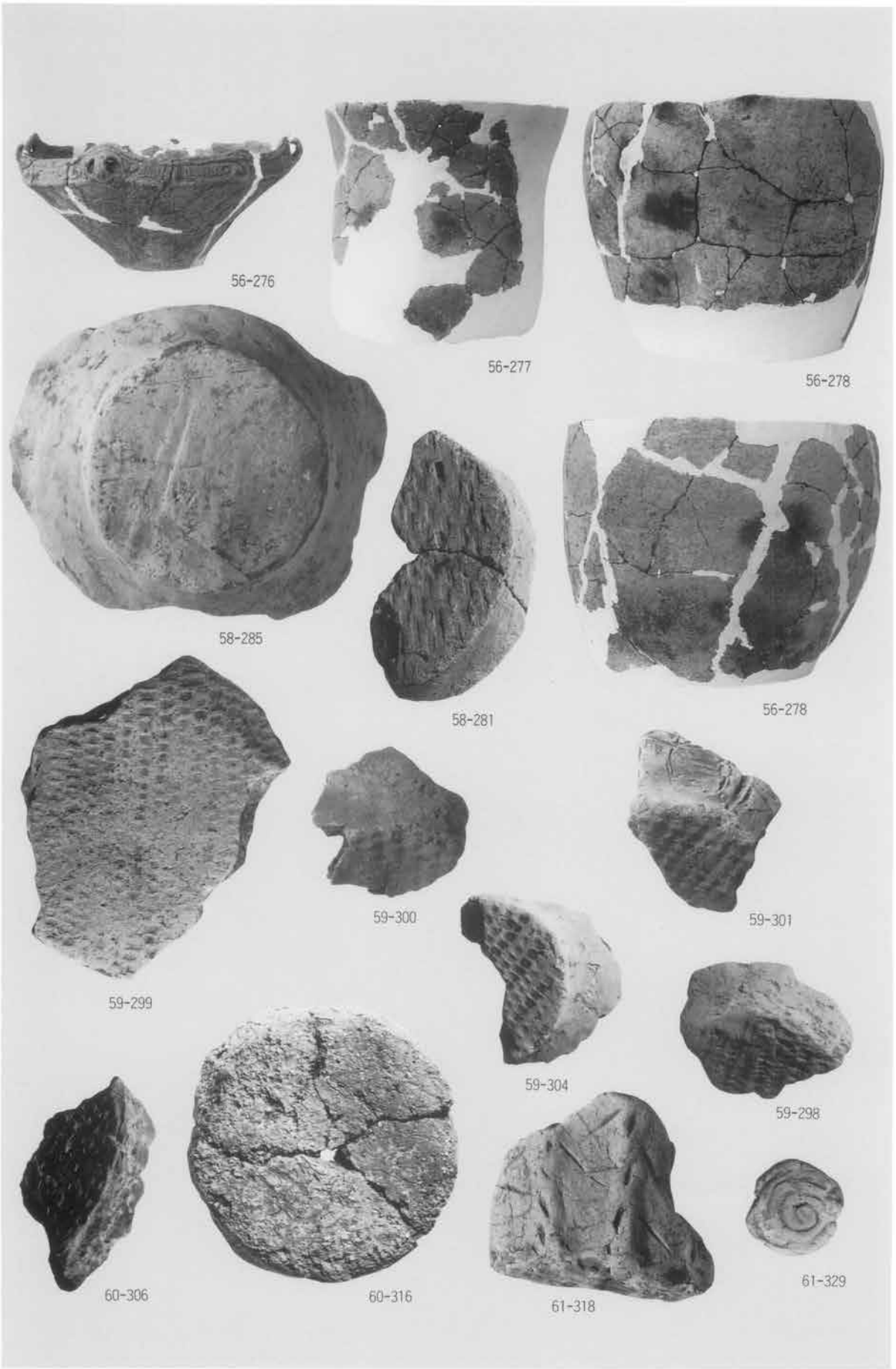
54-271

55-273

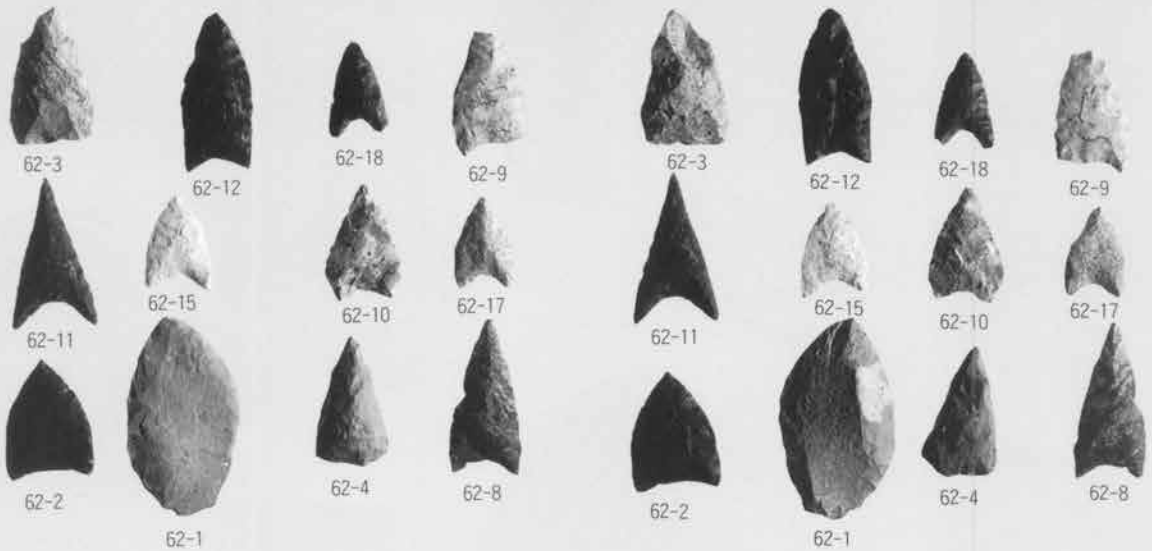
55-274

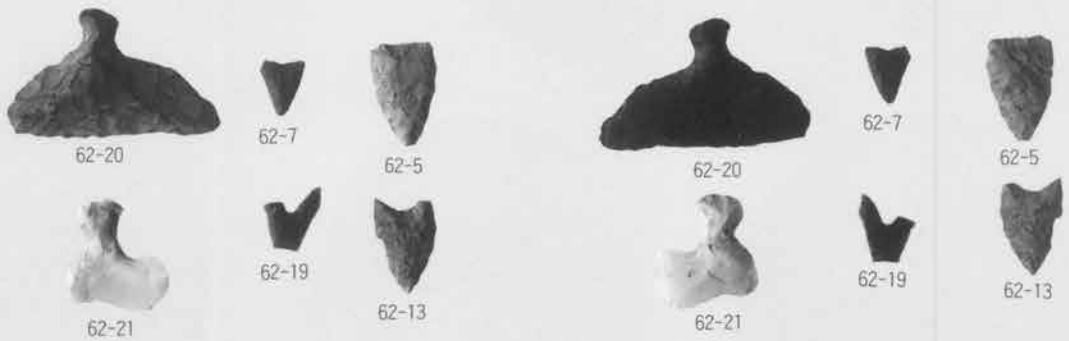
55-275

図版二十六　昭和五十九年度（遺物）

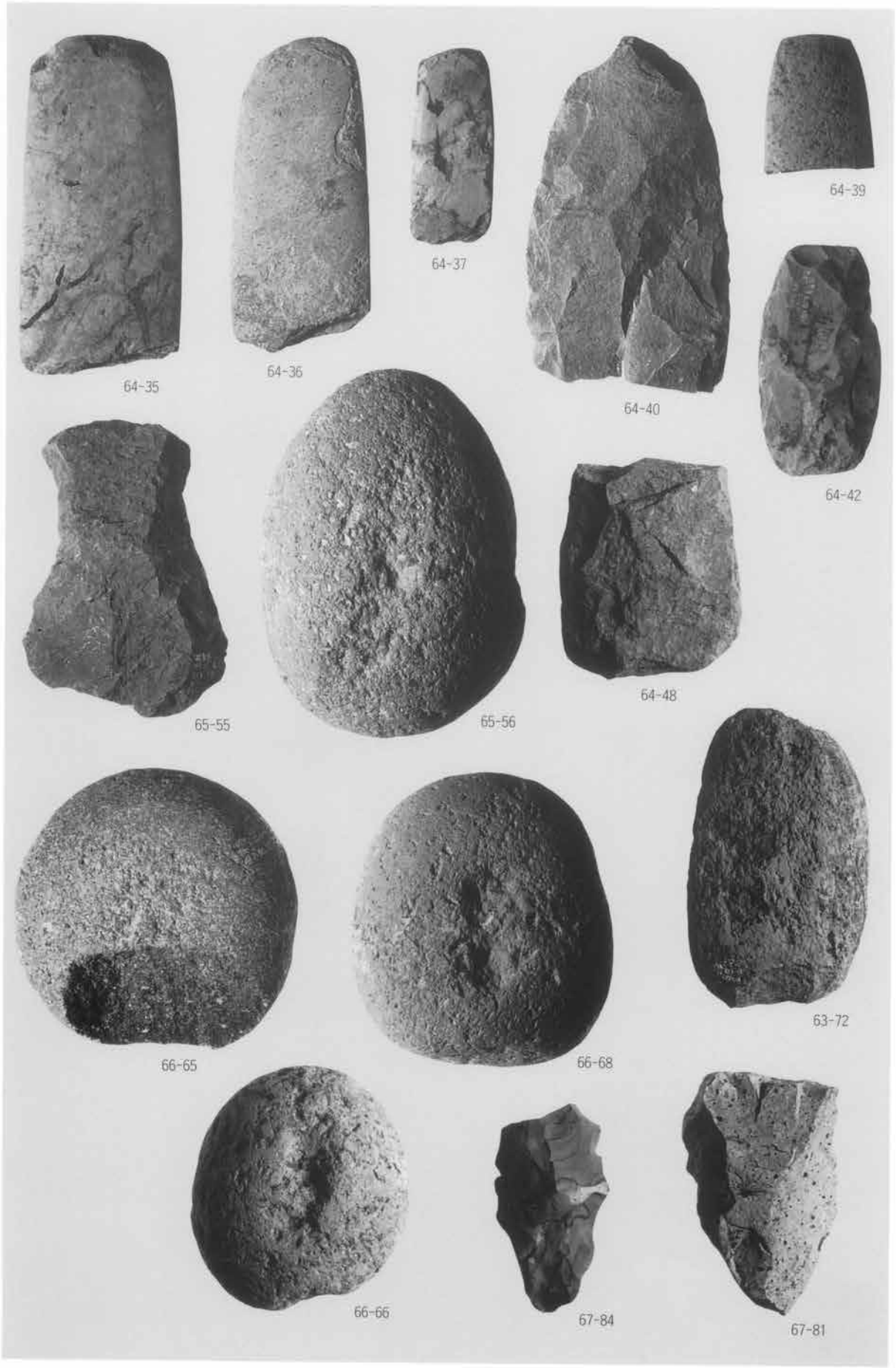


図版二十七　昭和五十九年度（遺物）





図版二十八　昭和五十九年度（遺物）



報 告 書 抄 録

ふりがな	かるみさいほうじいせき
書名	軽海西芳寺遺跡Ⅱ
副書名	ふるさと支援道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岩瀬由美、柿田祐司、宮田　明
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921-8044　石川県金沢市米泉町4丁目133番地　電話（076)-243-7692
発行年月日	西暦1998年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かるみさいほうじいせき 軽海西芳寺遺跡	いしかわけん 石川県 こまつし 小松市 かるみまち 軽海町	17203	03235	36° 23′ 51″	136° 30′ 36″	19961203 ～ 19961217	250	ふるさと支援道路整備工事（一般国道360号）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
軽海西芳寺遺跡	集落遺跡	古代	溝　5条 土坑　3基 掘立柱建物　4棟	土師器 須恵器	

軽海西芳寺遺跡Ⅱ

ふるさと支援道路整備工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日　平成10年3月27日(1998)

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

印　　刷　北國書籍印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1998